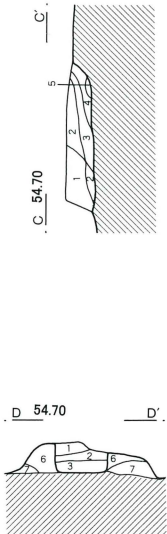
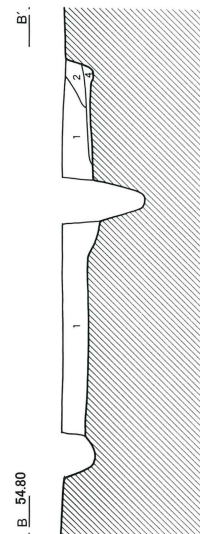
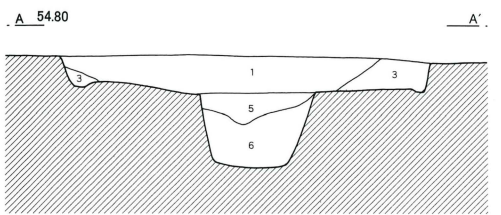
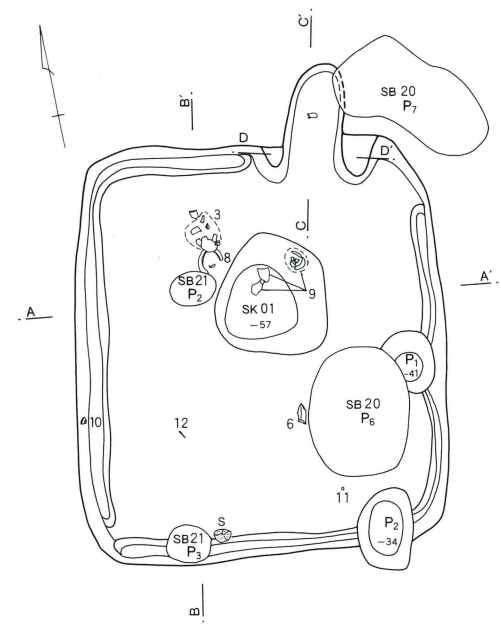


第128図 A区第77号住居跡・出土遺物



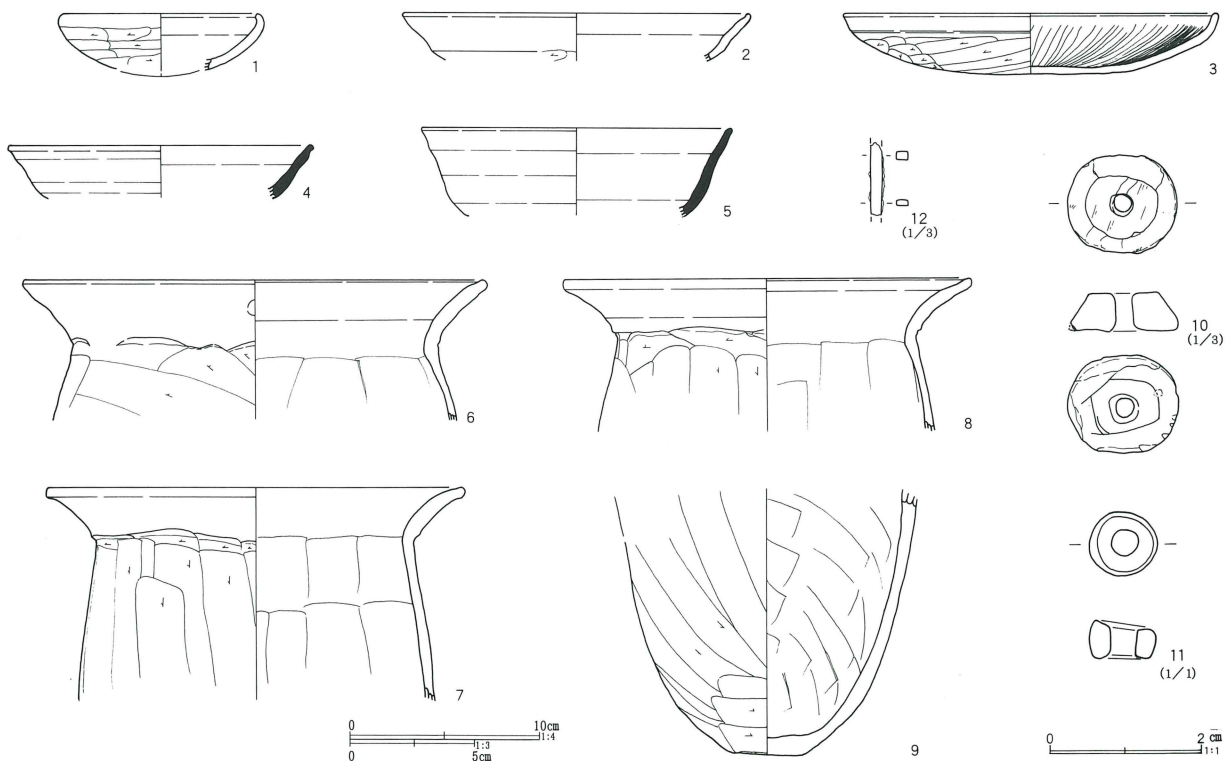
SJ 77

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロックやや多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ロームブロック混入
- 6 暗褐色土 ロームブロック主体

カマド

- 1 暗褐色土 大粒のロームブロックまばらに混入。ローム粒子やや多量
- 2 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・褐色粘土混入
- 3 明褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・褐色粘土混入
- 4 暗褐色土 灰・炭化物・被熱粘土ブロック混入
- 5 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土混入
- 6 暗茶褐色土ローム粒子・粘土少量
- 7 黒褐色土 ローム粒子少量

0 2 m (1:80)



第60表 A区第77号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(10.2)	2.9		AB	A	褐色	25%	覆土。底部外面黒斑あり
2	土師皿	(18.2)	2.5		AB	A	褐色	5%	覆土
3	土師暗文皿	19.7	3.2		AB	A	明褐色	80%	No.7。床面。内面放射暗文
4	須恵坏	(16.0)	2.8		C片	B	灰色	10%	覆土。末野産
5	須恵坏	(16.2)	4.6		D片	B	黄褐色	15%	カマド内。末野産
6	土師甕	(24.2)	7.5		ABC	B	褐色	10%	No.10。覆土下層
7	土師甕	21.9	11.3		AB	B	褐色	60%	カマド内
8	土師甕	21.4	8.3		AD	B	褐色	75%	No.8。床面
9	土師甕		14.0	3.8	AB	B	褐色	60%	No.9。床面
10	石製紡錘車	No.1。覆土下層。直径4.25cm。高さ1.5cm。孔径0.7cm。重さ36.51g。残存100%。滑石製							
11	白玉	No.2。覆土中層。直径0.8cm。高さ0.5cm。孔径0.3cm。重さ1g。滑石製							
12	不明鉄製品	No.3。覆土中層。残長2.7cm。断面方形から長方形。刀子柄部?							

面がやや沈下していた。

壁溝はカマド周囲と南西コーナー部を除き巡っている。深さは5cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器坏・皿・暗文皿・甕、須恵器坏、石製紡錘車、白玉、鉄製品がある(第128図)。1は小振りの内屈口縁坏。2は皿。3は床面出土の土師器暗文皿。内面に放射暗文が施される。4・5は須恵器坏。6～9は土師器甕。口縁部の外反は大きく、器壁の厚い胴部はタテケズリされる等、鬼高系長胴甕の系譜を引いている。10は滑石製紡錘車。広底面に軸孔を囲むような線刻がある。西壁際から出土した。11は白玉。12は角棒状の鉄製品である。

須恵器は19片出土し、内訳は坏が11点(末野産10・南比企産1)、蓋4点(末野)、甕4点(末野)である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第79号住居跡 (第150図)

A区第79号住居跡は調査区西端の44・45-8グリッドに位置する。第31・32号住居跡、第93号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

平面形は方形系と推定されるが、南東コーナーが検出されたのみで、詳細は不明である。残存規模は長軸長2.00m、短軸長1.89m、深さ0.50mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

床面は平坦で堅く締まっていた。埋土はローム混じりの暗褐色土を基調としていた。

付属施設は壁溝が巡るのみで、カマド・Pitなどは検出されなかった。

遺物は検出されず時期は不明であるが、重複する第93号住居跡との関係から熊野Ⅱ期以前で、おそらくⅠ期に遡る可能性が高いと思われる。

A区第80号住居跡 (第129図)

A区第80号住居跡は43・44-8・9グリッドに位置する。調査当初、カマドがなく重複する第26号住居跡と軸が揃うため、共に中世の竪穴建物と考えていたが、断面観察から第82号住居跡の方が新しいものと判断され、古代の住居跡と考えた。北壁側を第26号住居跡、南壁部を第82号住居跡に切られ、遺存状態は悪い。また、第33号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

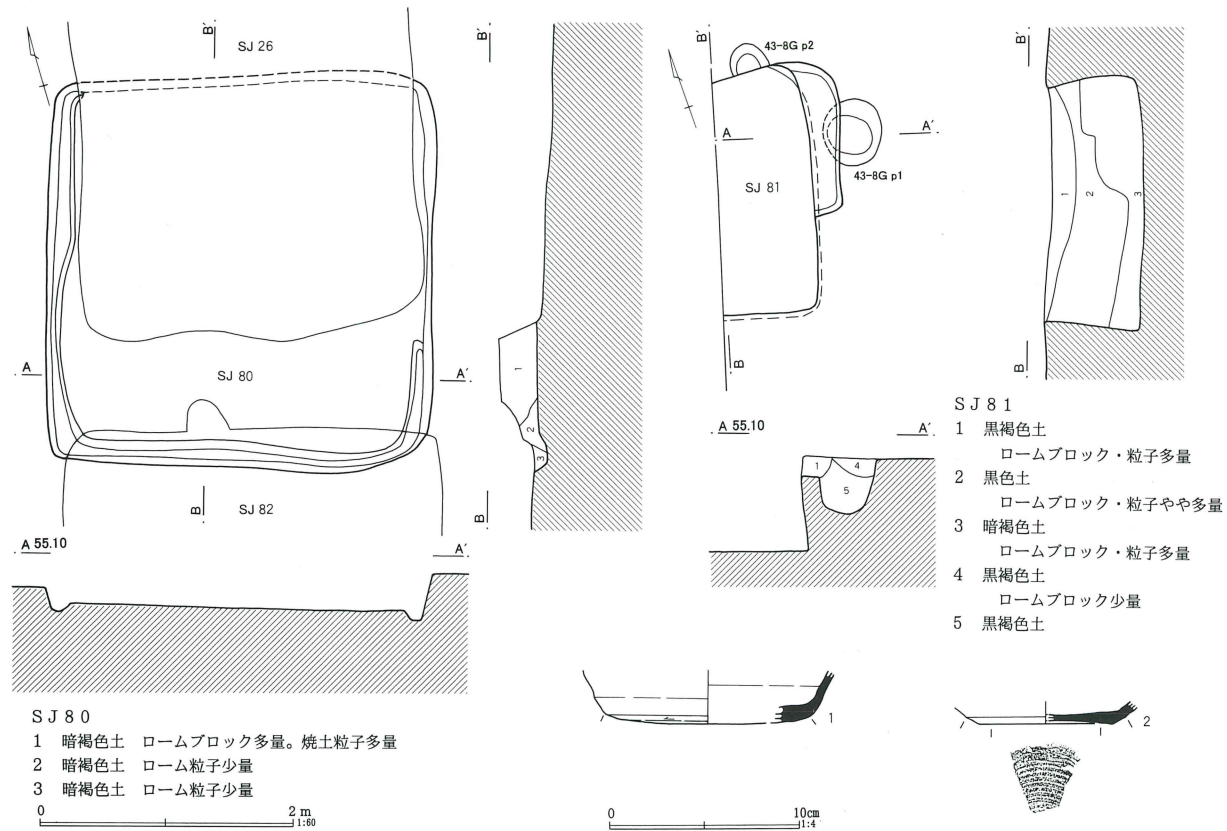
平面形は方形と考えられ、規模は推定長軸長3.18m、短軸長3.08m、深さ0.30mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

残存する床面は平坦で堅く締まっていた。埋土は焼土粒子とロームブロックを多量に含む暗褐色土を基調としていた。壁溝はL字状に巡っている。

カマドやピットなどの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく図化可能なものは須恵器坏が1点あるのみである。第129図1は須恵器坏。底部は丸底風で、回転ヘラケズリ調整される。胎土には白色粒子と片岩を含み末野産である。焼成は良好で暗灰色。10%残存。覆土から出土した。時期は不明であるが、重複する第82号住居跡との関係から熊野Ⅶ期またはそれ以前という限定はできる。

第129図 A区第80・81号住居跡・出土遺物



A区第81号住居跡 (第129図)

A区第81号住居跡は43-8グリッドに位置する。調査区外に掛かるため全体は不明である。平面形は方形系と考えられ、東壁外に浅い張出状の土壌が伴う。残存規模は長軸長1.92m、短軸長0.80m、深さは0.72mと小型で非常に深い遺構である。主軸方位はN-15°-Eを指す。

床面は平坦で堅く締まっていた。埋土はロームブロックが多量に混じる暗褐色から黒褐色土で、明らかに埋め戻された様相が認められた。壁は直立からややオーバーハング気味に立ち上がる。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図化できたのは第129図2の須恵器坏のみである。第129図2は須恵器坏。底径(7.0)cm。胎土に片岩を含み末野産である。焼成は普通、色調は暗灰色。残存率は10%。底部は回転糸切り後、周辺部と体部下端を回転ヘラケズリ調整している。時期は不明である。古代の住居とするには異質な面があり、中世に降る可能性も考慮すべきである。

A区第82号住居跡 (第130図)

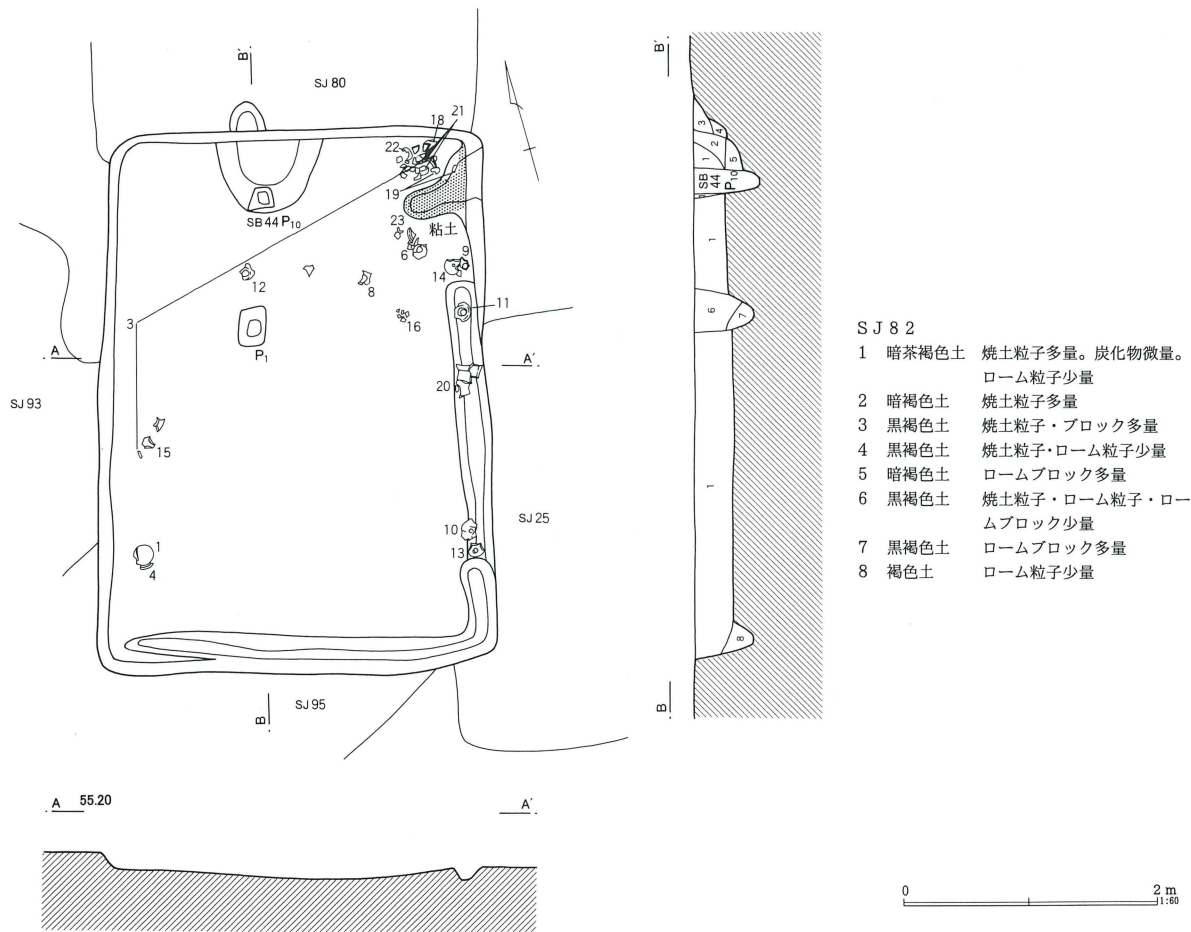
A区第82号住居跡は44-8グリッドに位置する。第80・93・95号住居跡を切り、第25号住居跡に上面を削平されていた。また、第44号掘立柱建物跡は本住居よりも新しい。北側に重複する第80号住居跡と本住居跡は壁ラインがほぼ揃い主軸も一致することから、80号住居跡から本住居跡に建て替えられた可能性もある。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.32m、短軸長3.02m、深さ0.30mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。

床面は凹凸があるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は焼土粒子を多量に含む暗茶褐色土を基調としており、大きな土層変化はない。

カマドは明確に捉えられなかった。住居東壁北端に被熱粘土と焼土の堆積が存在し、カマドを想定して精査したが、壁外に延びる掘り込みも対応する袖もなく、存在を確定できなかった。また、北壁中央付近にも焼土が多量に認められ、カマドかとも思わ

第130図 A区第82号住居跡



れたが、袖や灰層を検出できず、結局不明確なままに終わった。

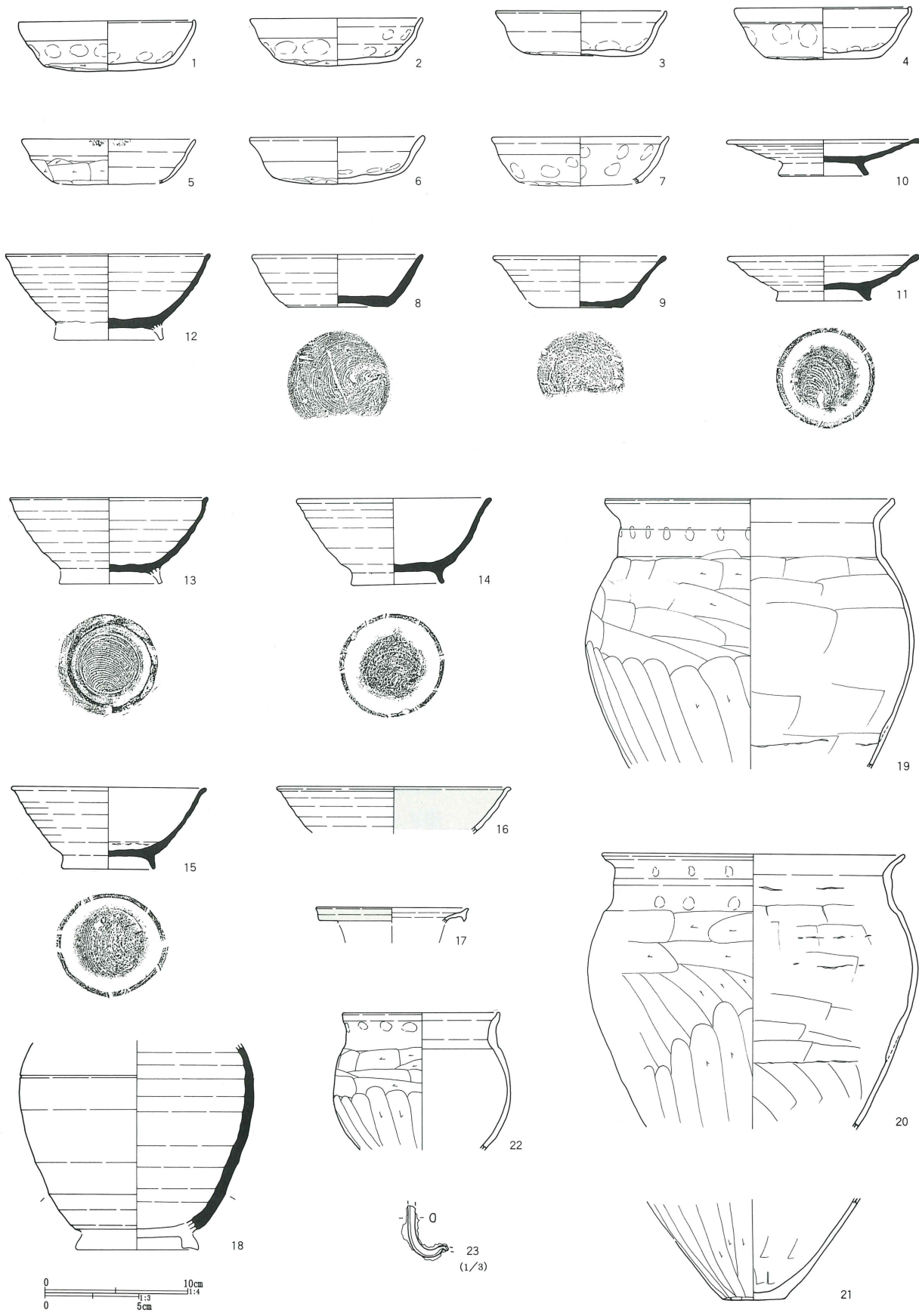
ピットは1本中央付近に検出されたが、伴うものではない。壁溝は南壁から東壁に掛けて部分的に検出された。深さは10～15cm前後である。

出土遺物は土師器坏・甕・小型甕、須恵器坏・高台碗・高台皿・長頸瓶、灰釉陶器碗・長頸瓶、鉄製品がある(第131図)。1～7は土師器坏。底部は平底で、やや扁平なタイプである。体部は無調整を基本とするが、ヘラケズリするものも含まれる(5)。8・9は須恵器坏。8は箱形の器形で底径も大きい。遺構には直接伴わない可能性が高い。9は口縁部が外反し、底径は口径の1/2となる。10・11は高台皿である。12～15は高台碗。口径は13.5～14cm前後である。無蓋と思われる。16は灰釉陶器碗。口縁部は小さく外反する。外面は無釉で、内面のみ淡黄緑色の

灰釉が塗られている。胎土はやや砂っぽく黑色粒子が吹き出している。二川またはそれ以東の産で、K-90号窯式平行と考えられる。17は灰釉陶器長頸瓶で、外面に淡黄緑色の灰釉が掛かり、表面に黑色粒子が吹き出している。非東濃、猿投～三河産と思われる。18は須恵器長頸瓶。外面は紫灰色で、肩部に黒色の自然釉が厚く掛かる。内面は青灰色に焼き上がる。在地産であるが、産地不明。19～21は「コ」の字状口縁甕である。23は釣針状に屈曲する不明鉄製品。断面が蒲鉾形で、鉸具の可能性がある。

須恵器は94片出土し、内訳は坏が67点(末野産64・南比企3)、高台碗8点(末野)、高台皿2点(末野)、蓋11点(末野)、壺瓶類1点(末野)、甕3点(末野)、鉢1点(末野)、器種不明1点(産地不明)である。時期は熊野Ⅵ期後半と考えられる。

第131图 A区第82号住居迹出土遺物



第61表 A区第82号住居跡出土遺物観察表 (第131図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.2	3.6		AB	B	褐色	90%	No.54。覆土下層
2	土師坏	12.0	3.3		A	B	褐色	25%	覆土
3	土師坏	11.9	3.1		AB	B	橙褐色	60%	No.7・53。覆土下層
4	土師坏	12.2	3.6		AB	B	褐色	70%	No.55。覆土下層
5	土師坏	(12.1)	3.1		A	C	橙褐色	50%	覆土。口唇部油煙付着
6	土師坏	12.0	3.3		A	B	橙褐色	60%	No.38。覆土下層
7	土師坏	12.2	3.2		AB	B	褐色	65%	覆土
8	須恵坏	(11.8)	3.6	7.0	C片	B	灰色	45%	No.48。覆土下層。末野産。底部B0手法。ヘラ記号「一」
9	須恵坏	(12.0)	3.6	6.0	B片	B	青灰色	50%	No.42。覆土下層。末野産。底部B0手法
10	須恵高台皿	(13.2)	2.5	5.8	B片	C	灰褐色	50%	No.57。ほぼ床面。末野産。底部B0手法
11	須恵高台皿	(13.0)	3.1	6.4	BC片	B	褐色	65%	No.45。覆土下層。末野産。底部B0手法
12	須恵高台碗	(14.2)	5.3		C片	B	褐色	30%	No.50。覆土中層。末野産。底部B0手法
13	須恵高台碗	(13.7)	5.3		BC片	C	黄灰褐色	65%	No.56。床面。末野産。底部B0手法
14	須恵高台碗	13.5	6.0	6.3	B片	B	青灰色	70%	No.44。覆土下層。末野産。底部B0手法
15	須恵高台碗	(13.4)	5.7	6.3	片	B	灰色	35%	No.52。覆土下層。末野産。底部B0手法
16	灰釉碗	(16.0)	3.3		F	A	灰白色	30%	No.47。覆土下層。内面灰釉刷毛塗り
17	灰釉長頸瓶	(10.6)	1.0		F	A	灰白色	10%	覆土。表面淡黄緑色の灰釉掛かる
18	須恵長頸瓶		13.2		BCE	A	紫灰色	15%	No.19。床面。産地不明。内面青灰色
19	土師甕	20.0	18.9		ABD	B	淡褐色	45%	No.1.4他。床面～覆土下層
20	土師甕	(21.0)	19.2		AB	B	褐色	15%	No.46。覆土下層
21	土師甕		7.0	4.2	BD	A	淡褐色	45%	No.9・30・31・32。覆土下層～中層
22	土師小型台付甕	10.8	9.6		AB	A	黄褐色	60%	No.35。覆土下層
23	不明鉄製品	No.40。ほぼ床面。残長2.7cm。鉸具の可能性はある							

A区第83号住居跡 (第132図)

A区第83号住居跡は43-9グリッドに位置する。第78号住居跡、第151号土壌と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.60m、短軸長2.46m、深さ0.35mである。主軸方位はN-35°-Eを指す。

床面は全体に平坦で強く踏み固められていた。埋土はローム粒子とロームブロックが多量に含まれ(第2層)、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北東壁に設置される。燃烧部は壁を切り込んでおり、底面は2段に掘り込まれていた。燃烧部側壁は強く被熱している。埋土は第1・2層が天井部崩落土、第3層が灰層と考えられる。袖は白色

粘土を積み上げて構築されている。また、カマドの下部から土壌が1基検出された(SK1)が、カマドの掘り方と考えられる。

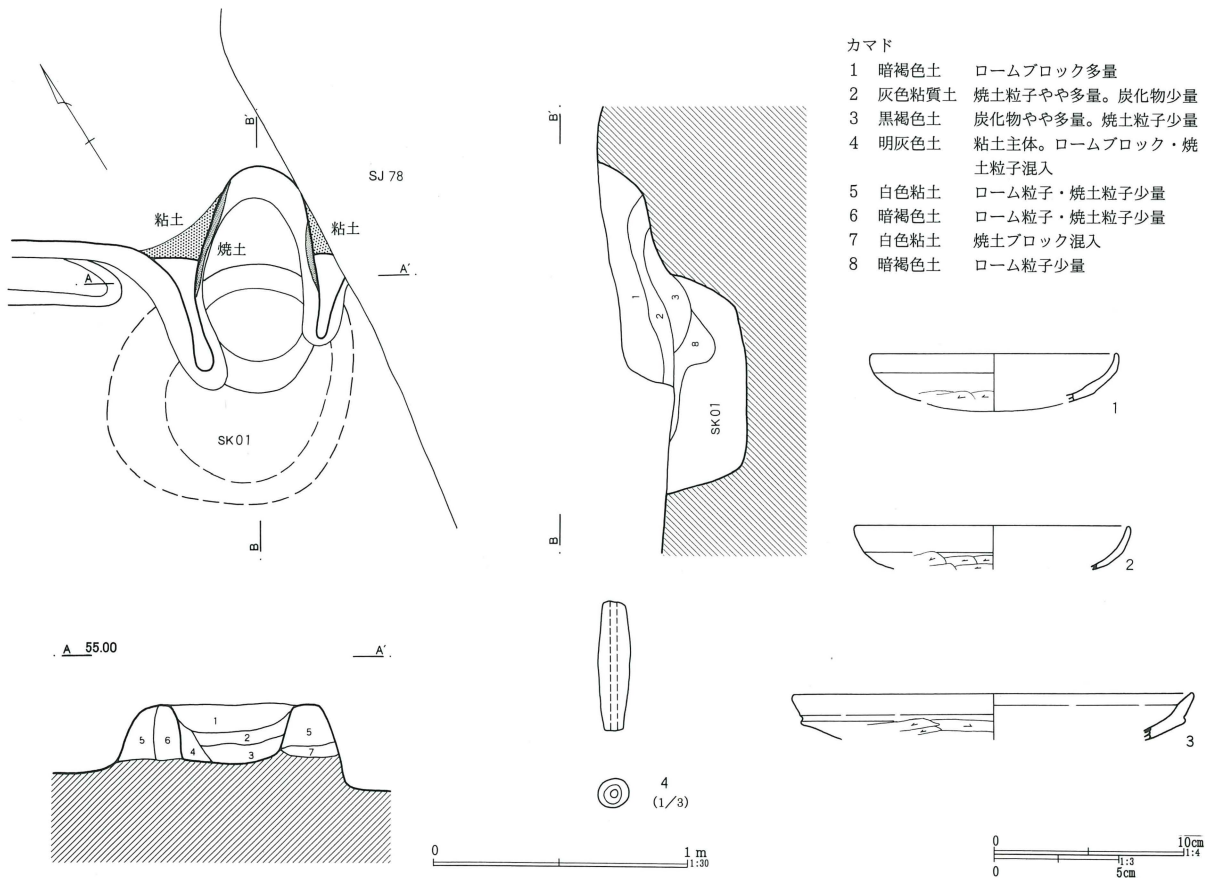
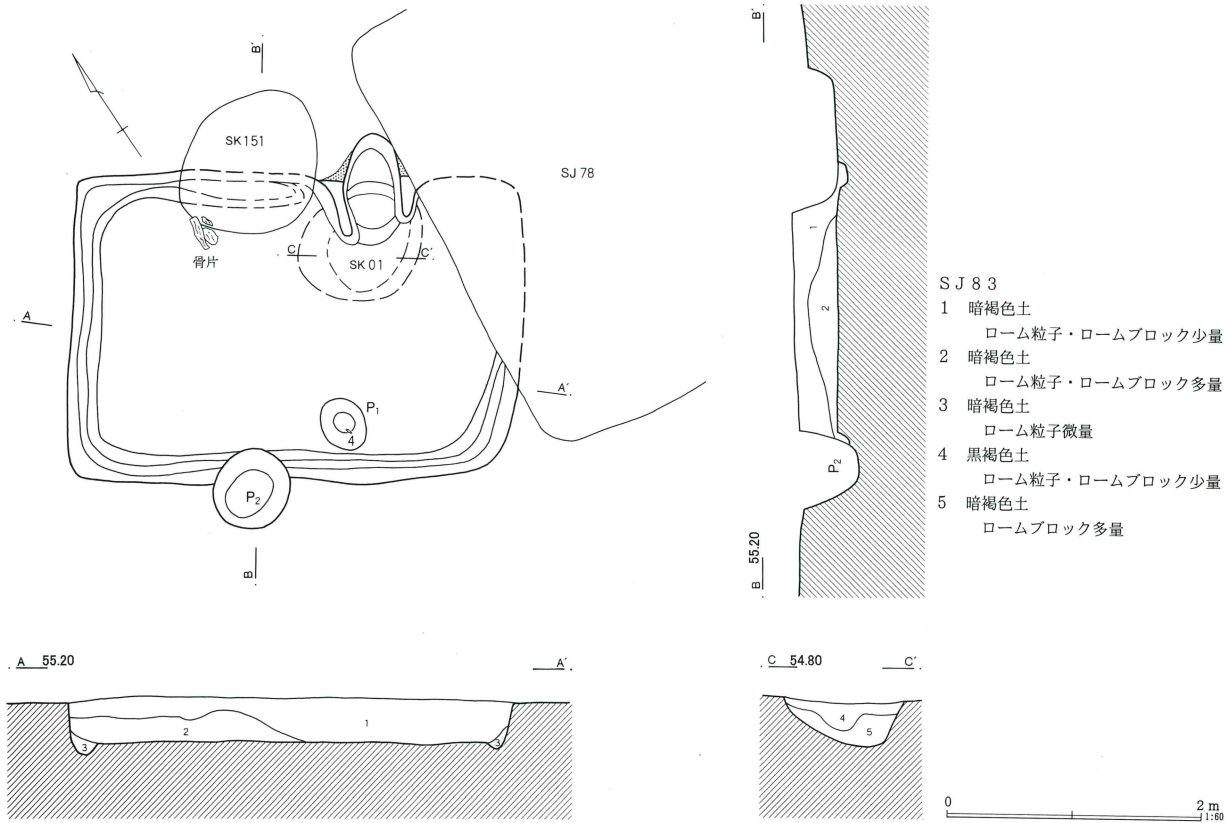
ピットは2本検出された。Pit1の帰属は不明、Pit2は伴わない。壁溝は残存する壁には巡っていた。深さ5~10cm。

出土遺物は少なく、土師器坏と皿、土錘がある(第132図)。1・2は土師器坏。おそらく弱い丸底形態となろう。3は皿で、口縁下の稜は鋭い。土錘は覆土下層から出土した。その他、確認面から骨片が検出されたが、遺存状態が悪く取り上げられなかった。後世の所産であろう。遺物は小片で時期決定の目安とするには不安があるが、土師期杯は熊野II期~III期段階のものと考えられる。

第62表 A区第83号住居跡出土遺物観察表(第132図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.0)	2.5		A	B	橙褐色	10%	覆土
2	土師坏	(14.5)	2.3		A	B	褐色	10%	覆土
3	土師皿	21.0	2.5		AG	B	褐色	10%	覆土
4	土錘	No.1。覆土下層。長さ5.1cm。最大径1.2cm。孔径0.25cm。重さ7.66g。胎土BC。焼成A。淡褐色							

第132図 A区第83号住居跡・出土遺物



A区第84号住居跡（第133・134図）

A区第84号住居跡は42・43-9グリッドに位置する。第85号住居跡、第30号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.95m、短軸長2.34m、深さ0.25mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。

床面はやや起伏があるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土はローム混じりの暗褐色土を基調としており、土層変化に乏しい。人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北東壁に設置される。燃焼部から煙道部に掛けては緩やかに立ち上がり、壁外に延びる。燃焼部側壁は弱く被熱していた。埋土はローム混じりの暗褐色土から黒褐色土を基調としており、白色粘土は少ない。底面が火床面と思われるが、明確な灰層は形成されていなかった。左右の袖は土師器甕を据え置いて、袖の芯に使用していた。また、両袖を結ぶライン上の燃焼部からは、土師器長甕が2個体連結した状態で検出された。天井部の架構材として使用されたものと考えられる。

ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・甕・壺・鉢がある（第135図）。1・2は土師器模倣坏。小片であるがいずれも小型品である。3は鉢で、胴部と底部はヘラケズリ。外面全体に煤が付着している。4は土師器壺。球胴で胴部はヘラケズリ。住居中央部の覆土下層から出土した。5～8は土師器甕。5は小型で、カマド右

袖に倒立状態で据えられていた。6はカマド左袖に正立状態で埋設されていた。口縁部は大きく開き、胴部上位がヨコ、以下は縦方向のヘラケズリ。7・8はカマド天井部の架構材に使用されたもので、8の中に7を差し込んだ状態で出土した。いずれも胴部はナナメケズリ。9は鉄鏝か。棘篋被がある。時期は熊野I期と考えられる。

A区第85号住居跡（第133・134図）

A区第85号住居跡は42・43-8・9グリッドに位置する。北西壁部は調査区外に延び、全容は不明である。重複遺構との新旧関係は、第84号住居跡を切り、第30号掘立柱建物跡、第139号土壌及び第142号土壌に切られていた。また、南東壁は第27号住居跡と接する。

平面形は方形と推定され、規模は長軸長5.40m、短軸長5.16m、深さ0.43mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土は第3層に大粒のロームブロックが多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは検出されなかった。おそらく北西壁に存在すると推定される。

ピットは7本検出された。Pit1・Pit2が住居に伴う主柱穴に相当しよう。他のピットは遺構に伴うものではなかろう。

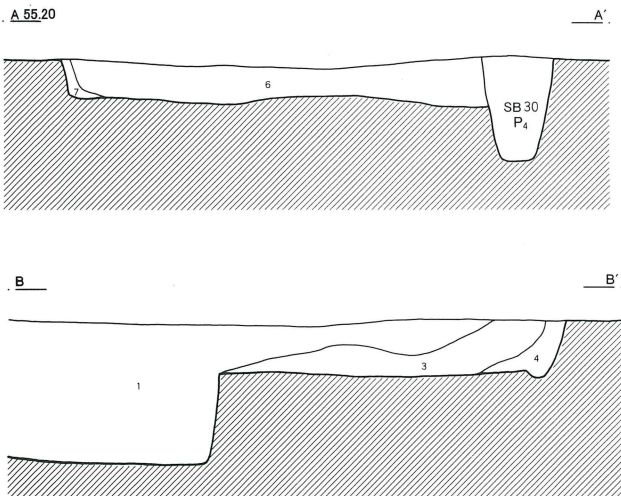
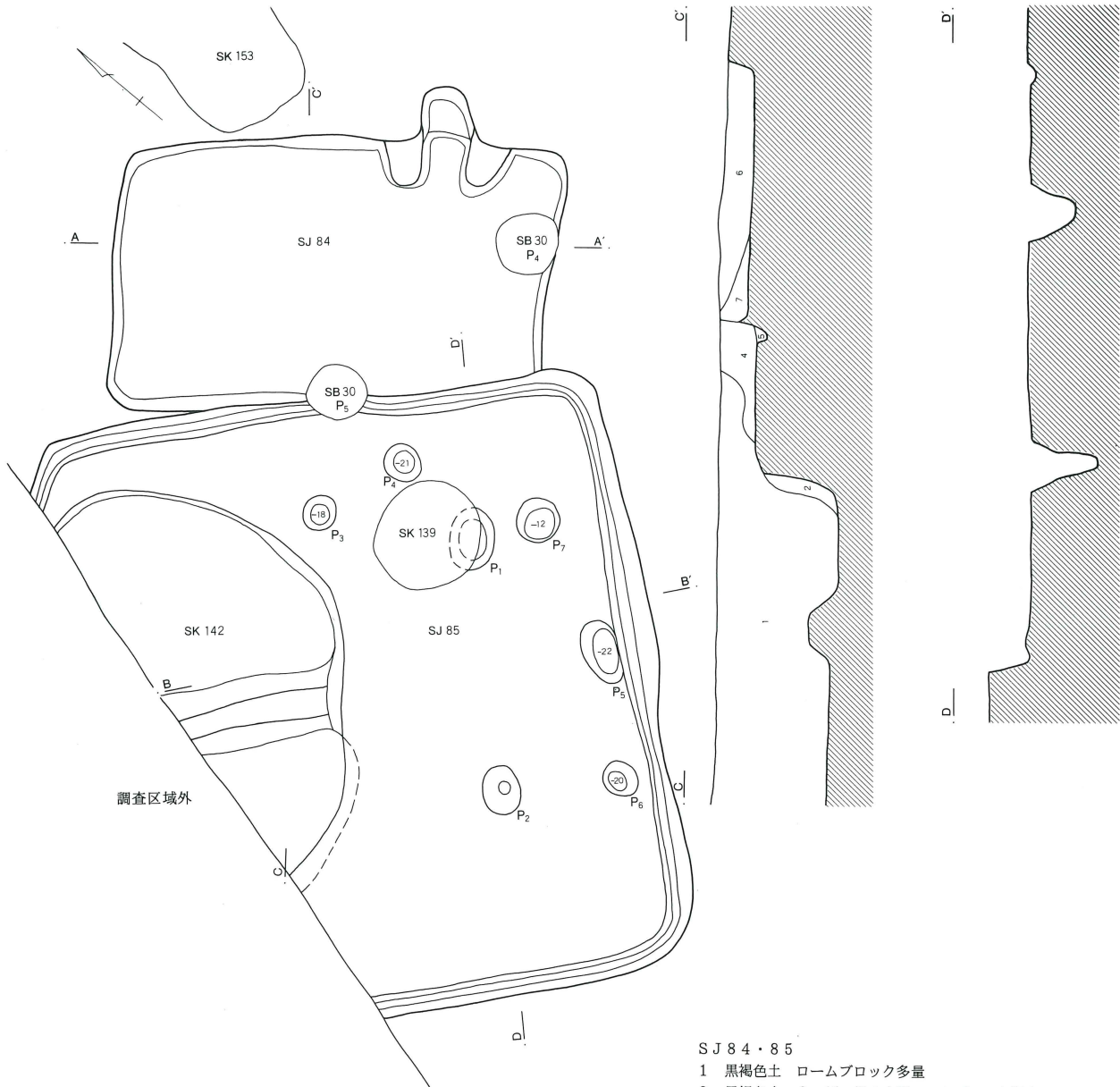
壁溝は全周する。深さ10cm程度である。

出土遺物は土師器坏・小型甕・鉢・壺・鉄製品と編物石がある（第136図）。遺物は東コーナー周辺と

第63表 A区第84号住居跡出土遺物観察表（第135図）

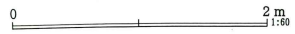
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.0)	2.8		B G	A	暗褐色	20%	覆土
2	土師坏	(11.4)	2.8		G	A	明褐色	20%	カマド
3	土師鉢	(22.8)	14.6		A B G	A	褐色	45%	覆土
4	土師壺	21.6	30.6		A B	B	淡褐色	80%	No.3. 覆土下層
5	土師小型甕	17.5	16.4		A B	B	褐色	80%	カマド内No.13. カマド右袖内
6	土師甕	23.0	16.0		A B	B	明褐色	95%	カマド内No.12. カマド左袖内
7	土師甕		29.1	3.6	A B	B	明褐色	50%	カマド内No.1. 底部～胴部下位に黒斑あり
8	土師甕	20.8	31.6		A B G	B	明褐色	45%	カマド内No.5・7・8・9・11
9	鉄鏝?	No.1. ほぼ床面。残長6.5cm。棘篋被がある							

第133図 A区第84・85号住居跡(1)

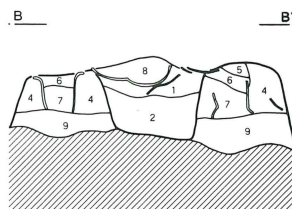
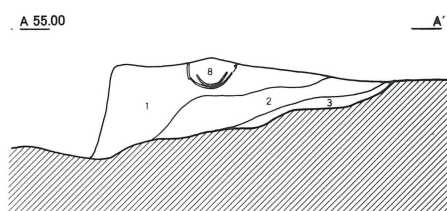
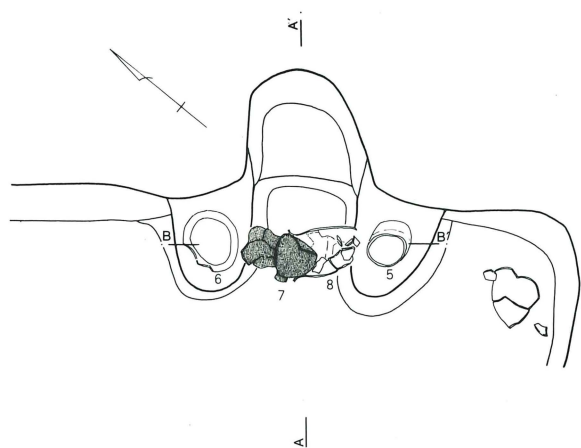


SJ 84・85

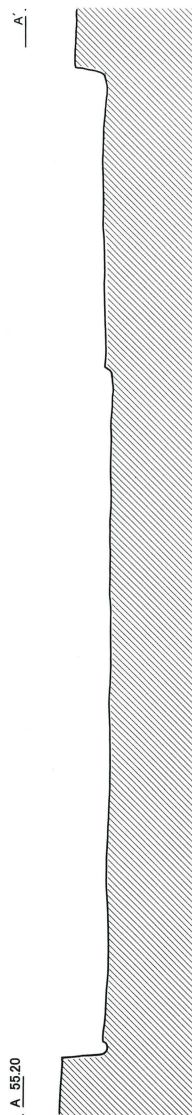
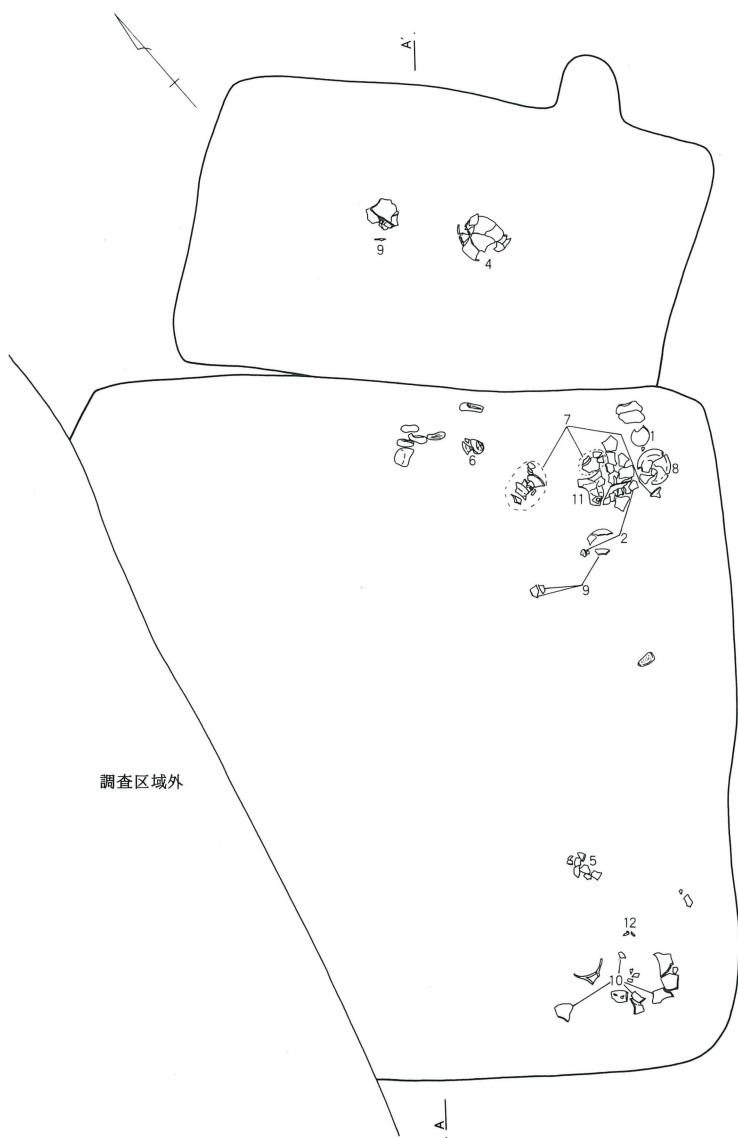
- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 2 黒褐色土 8~15cm径の大型ロームブロック混入
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 5 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒子やや多量。ロームブロック少量
 - 7 暗褐色土 2~4cm径のロームブロック多量
- カマド
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 4 暗茶褐色土 粘質土
 - 5 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 6 暗灰白色粘質土
 - 7 暗褐色土 粘質・ローム粒子少量
 - 8 暗褐色土 焼土ブロック混入
 - 9 暗褐色土 ロームブロック多量



第134図 A区第84・85号住居跡(2)

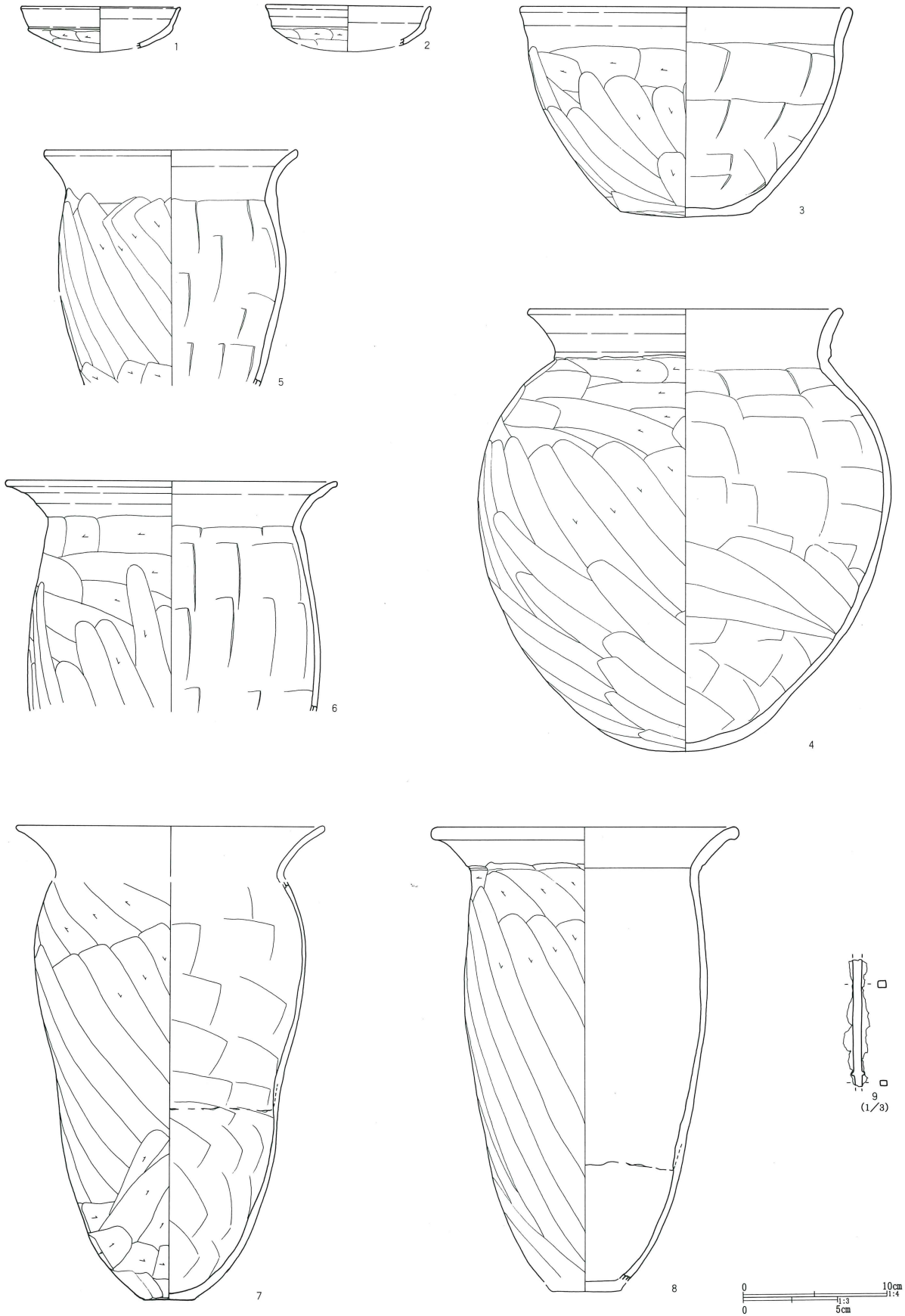


0 1 m 1:30

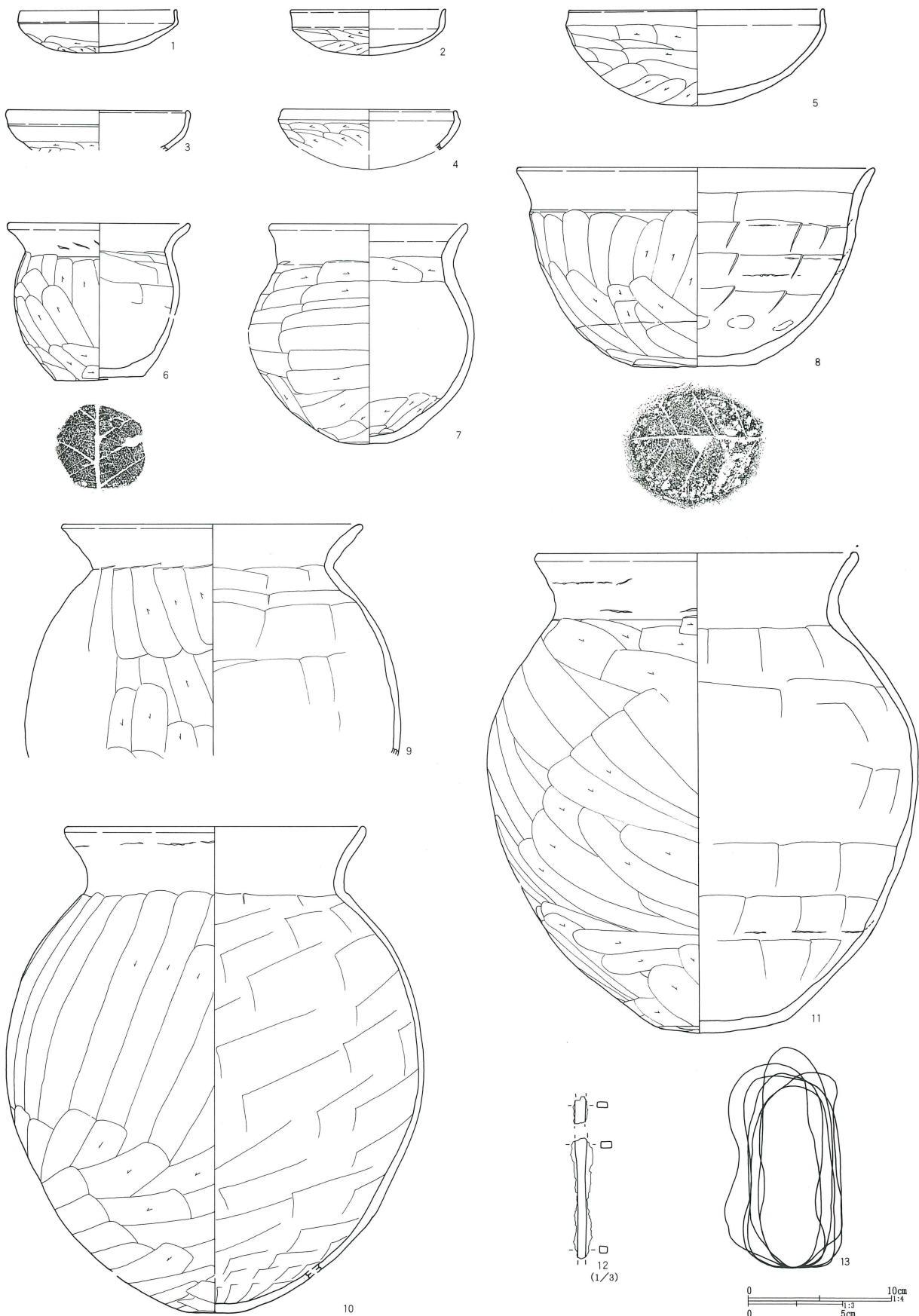


0 2 m 1:60

第135图 A区第84号住居跡出土遺物



第136图 A区第85号住居跡出土遺物



第64表 A区第85号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	10.8	3.1		A C	B	褐色	90%	No26。覆土下層。口縁歪みあり。模倣坏的作り
2	土師坏	10.7	3.2		B G	A	褐色	85%	No21・23。覆土下層。底部外面黒斑あり
3	土師坏	(12.6)	2.8		A B	A	明褐色	20%	覆土
4	土師坏	(12.0)	2.7		A B	A	橙褐色	25%	覆土
5	土師坏	17.8	6.7		A B C	B	褐色	90%	No13。ほぼ床面。
6	土師小型甕	(12.6)	11.0	6.2	B	B	褐色	60%	No33。覆土下層。底部木葉痕
7	土師小型壺	13.6	15.4		A B C	B	淡褐色	80%	No22・29・31・32。床面～覆土中層
8	土師鉢	24.7	13.9	8.8	A B C	B	黄褐色	100%	No24。覆土下層。底部木葉痕
9	土師壺	(20.7)	16.2		A B	A	淡褐色	15%	No18・19。床面
10	土師壺	(22.0)	33.4	9.0	A B	B	褐色	45%	No1・3・8・9。覆土下～中層。底部～胴部黒斑
11	土師壺	(20.6)	33.8		A B	B	淡褐色	50%	No30。覆土下層
12	不明鉄製品	No4。ほぼ床面。残長7.6cm。断面方形							

南コーナー周辺に集中する。北東壁際には編物石が散乱していた。1～4は土師器坏。1は北武蔵型坏とも模倣坏ともとれる形態で、土はやや粗く歪みがある。2は模倣坏である。3は丸椀風の坏で、定形化していない。4は北武蔵型坏。口縁部は短く内屈し、胎土も精選されている。5は大型の北武蔵型坏である。6は小型甕で、底部は木葉痕が残る。7は小型壺。8は鉢で、底部は木葉痕が残る。全面に煤が付着し、胴部上位は二次被熱により器面が剥落している。9～11は土師器壺。12は角棒状鉄製品。須恵器は検出されなかった。時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

A区第86号住居跡(第137・138図)

A区第86号住居跡は41・42-9グリッドに位置する。第30・31・32号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も古い。

比較的大型の住居跡で、平面形は方形。規模は一辺5.94m、深さ0.40mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。

床面は平坦で、全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土が厚く堆積し(第1層)、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

カマドは北壁に設置される。燃烧部はほぼ壁内に納まり、段をもって煙道部に続く。埋土は第2～4層が天井部崩落土である。燃烧部側壁は弱く被熱していた。火床面は底面に相当するが、灰の堆積は僅

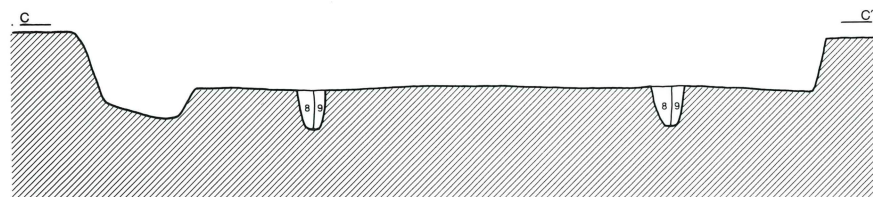
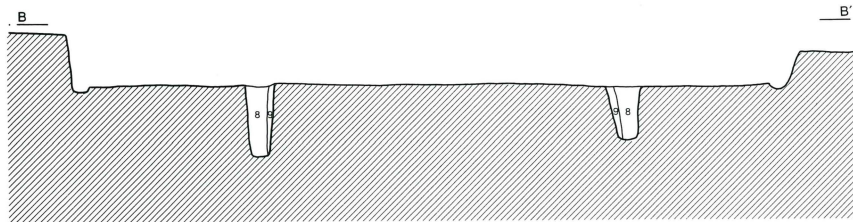
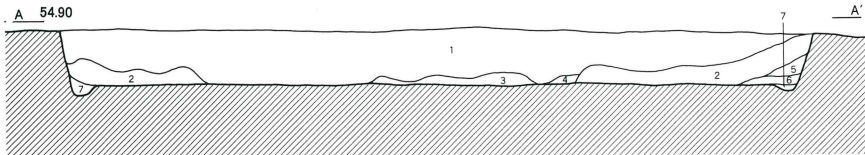
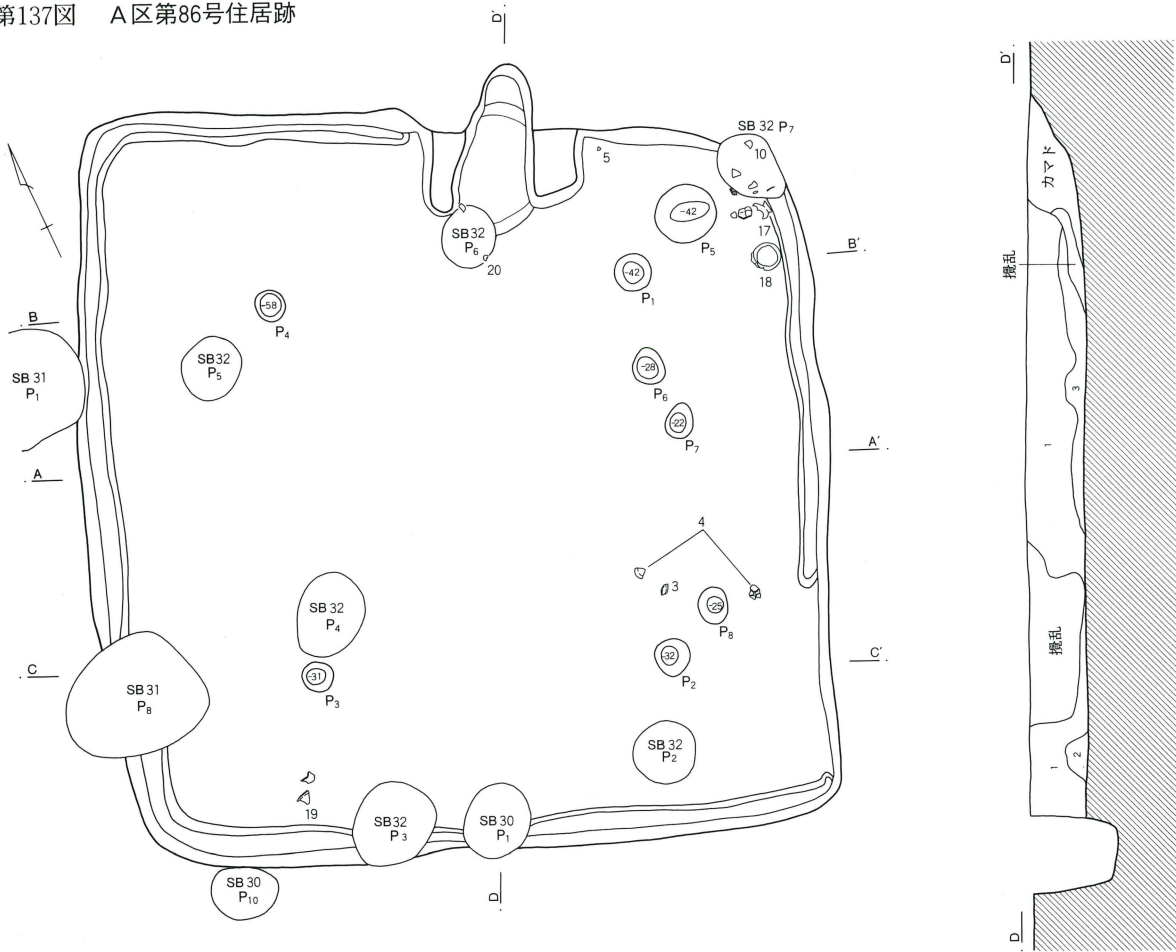
かであった。袖は白色粘土を積み上げて構築されている。遺存状態は悪く、カマドの前面に袖と天井部から崩落した白色粘土が多量に流出していた。

ピットは掘立柱建物跡柱穴以外に8本検出された。Pit1～4が住居に伴う主柱穴である。全て柱痕が確認されたが、柱径は細い。深さは30～60cmである。Pit5は貯蔵穴の可能性もあるが、上面は貼床されており、住居廃絶段階には埋め戻され、床面として使用されたことが判明した。Pit6～8に関しては帰属不明である。なお、掘立柱建物跡柱穴は平面、あるいは断面観察から全て住居を切っていることが確認できた。

壁溝はカマド周囲と東壁南端部を除いて巡っていた。深さは5～10cmである。

出土遺物は少なく、全て破片である。土師器坏・皿・暗文坏・暗文皿・小型甕・壺、須恵器坏・蓋・甕、板状土製品、石製紡錘車がある(第139図)。1～4は土師器模倣坏。3・4は口径12cm代で、熊野遺跡の中でも古い様相をもつ。5・6・8は北武蔵型坏。6は口縁部が直立し、様相的にはやや新しい。9～11は土師器皿。いずれもタイプは異なる。12は暗文皿で、内面に放射状暗文と螺旋暗文が施されている。13～15は須恵器蓋。13は口縁部を折り返してかえりをつくる。湖西産と推定される。14・15は細片。16は須恵器坏で底部を欠く。末野産。17は土師器小型甕、18は壺。いずれも東コーナー部のほぼ床面から出土した。17は長胴器形で、器肉は厚くタテ

第137図 A区第86号住居跡

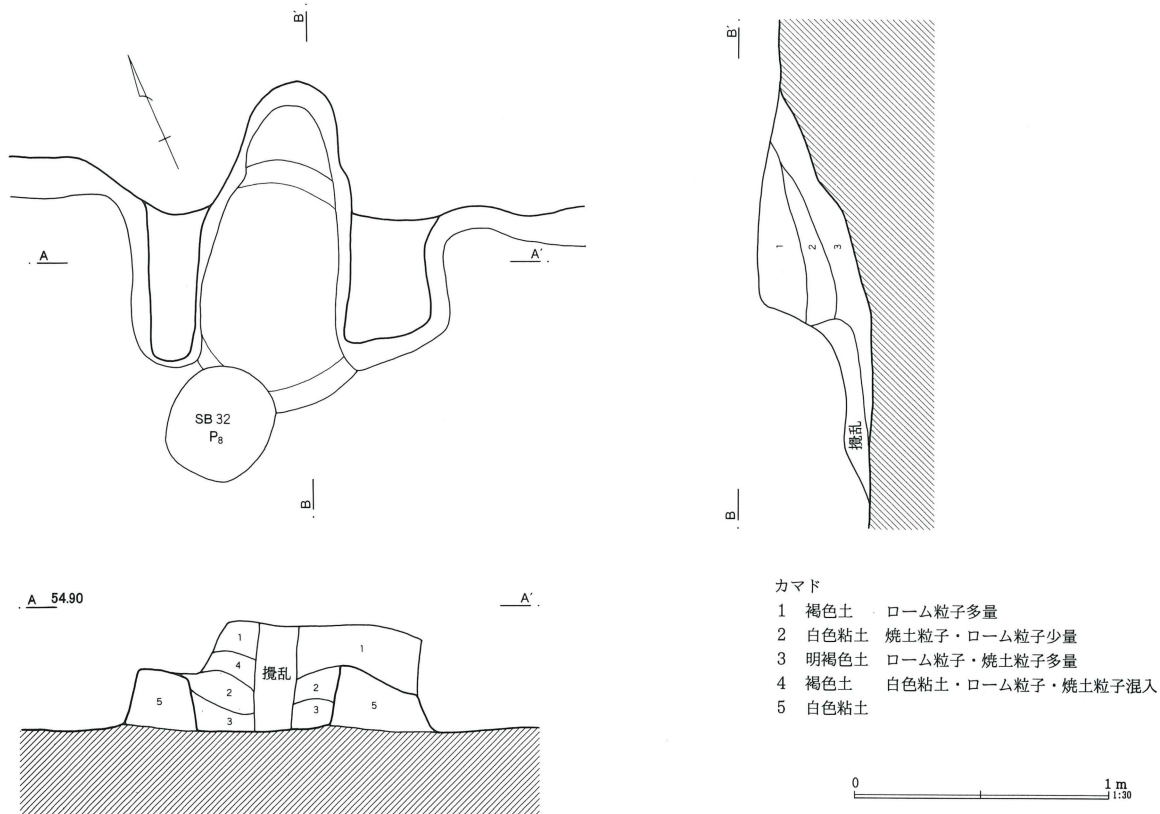


SJ 86

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 褐色土 | ロームブロック・ローム
粒子多量 |
| 2 黒色土 | ロームブロックやや少量 |
| 3 灰白色粘土 | 焼土ブロック |
| 4 黄褐色土 | ソフトローム |
| 5 黄褐色土 | ソフトローム・黒色土混入 |
| 6 褐色土 | 暗褐色土・ローム粒子混入 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロック |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子・ブロック少量 |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック多量 |

0 2m
1:50

第138図 A区第86号住居跡カマド



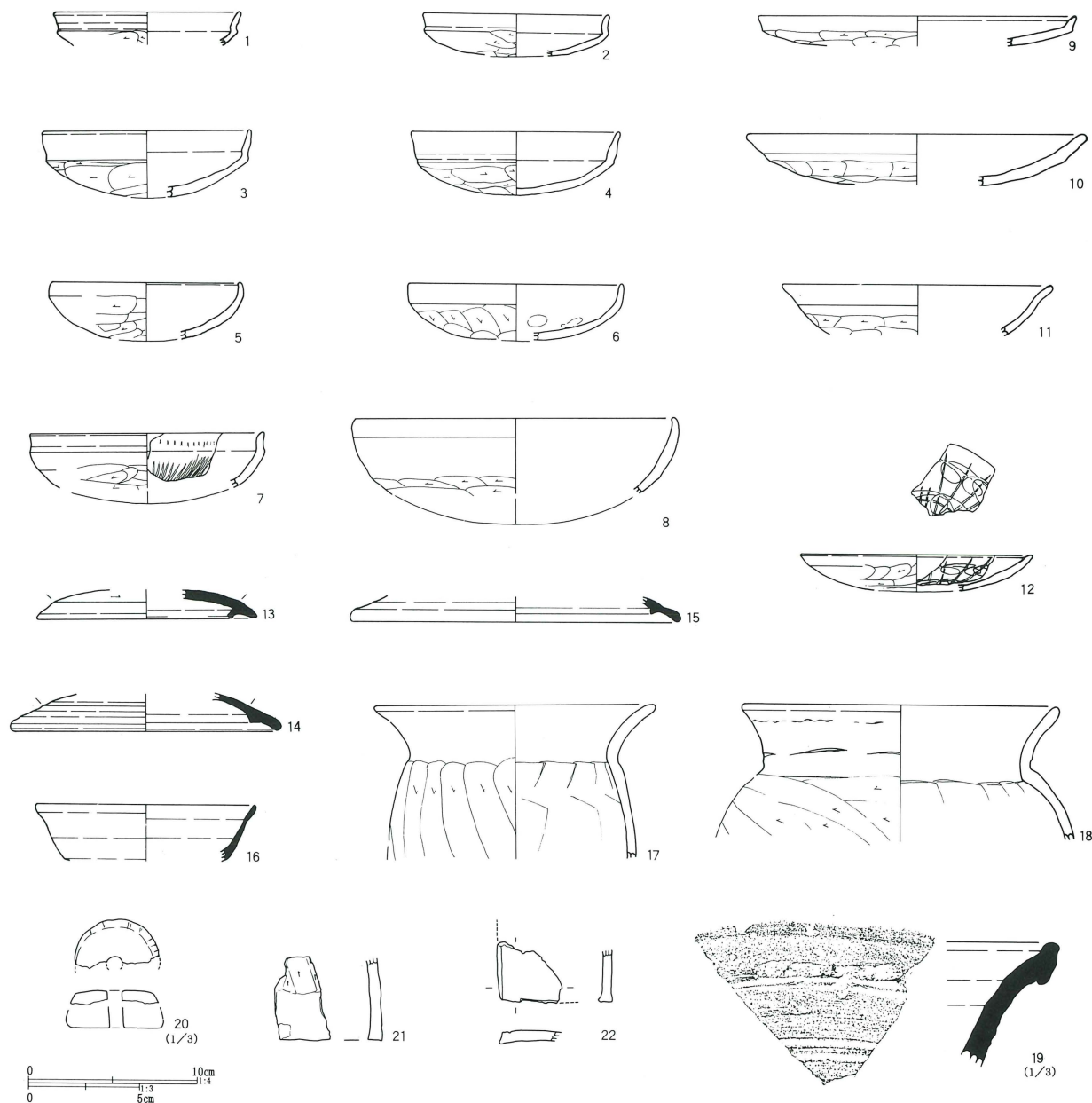
- カマド
- 1 褐色土 ローム粒子多量
 - 2 白色粘土 焼土粒子・ローム粒子少量
 - 3 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
 - 4 褐色土 白色粘土・ローム粒子・焼土粒子混入
 - 5 白色粘土

第65表 A区第86号住居跡出土遺物観察表 (第139図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.0)	2.0		C D	A	褐色	5%	覆土
2	土師坏	(11.0)	2.4		C	A	褐色	5%	覆土
3	土師坏	(12.2)	3.9		B D G	B	褐色	35%	No14。覆土中層
4	土師坏	12.3	3.8		A B	B	灰褐色	50%	No13・15。覆土中～下層
5	土師坏	(11.2)	3.3		A C D	A	褐色	10%	No2。覆土中層
6	土師坏	(12.6)	3.3		A B	B	褐色	25%	覆土
7	土師暗文坏	(13.8)	3.2		C D	A	明褐色	5%	覆土。内面放射暗文
8	土師坏	(19.0)	4.5		A B	B	褐色	35%	覆土
9	土師皿	(18.8)	1.8		A B	B	褐色	20%	覆土
10	土師皿	(20.0)	3.0		A B	B	橙褐色	20%	No3。覆土下層
11	土師皿	(16.0)	3.0		A B	B	褐色	15%	覆土
12	土師暗文皿	(13.8)	2.1		A B C	A	黄褐色	10%	覆土。内面放射暗文+螺旋暗文(2段)
13	須恵蓋	(13.0)	1.7		B	A	灰色	25%	覆土。湖西産。素地土肌目細かい
14	須恵蓋	(15.8)	2.2		B片	A	灰色	5%	覆土。未野産
15	須恵蓋	(19.5)	1.5		B	B	灰色	10%	覆土。未野産
16	須恵坏	(13.0)	3.4		B片	B	灰色	20%	覆土。未野産
17	土師小型甕	16.5	9.1		A B	B	褐色	60%	No10。床面
18	土師壺	18.6	7.9		A B G	B	褐色	80%	No12。ほぼ床面
19	須恵甕	(48.5)	5.5		B片	B	灰色	5%	No16。覆土上層。未野産。内面上部自然釉付着
20	紡錘車	No18。覆土上層。残存径3.90cm。重さ5.7g							
21	板状土製品	覆土。胎土A B G。焼成A。褐色。底面は面取り、外面下位は雑なげ、上位は軽いヘラケズリ							
22	板状土製品	覆土。胎土A B G。焼成A。褐色。ヘラで直角に面取りされる。21と同一個体							

ヘラケズリなど古墳時代(鬼高期)的な様相を色濃く残す。19は須恵器甕口縁部片。20は石製紡錘車。節理面で剥落している。21・22は土師質の板状土製品。21は図上の下端をヘラで面取りしている。表裏

第139図 A区第86号住居跡出土遺物



両面をナデ調整するが、一部軽いヘラケズリが入る。22は図上で左側端と下面をヘラで面取りしている。胎土・色調や焼きの状態から同一個体と判断される。竈形土製品の一部か。

須恵器は45片出土し、内訳は坏が22点（末野18・南比企2・不明2）、蓋11点（末野10・湖西1）、甕11点（末野）、壺瓶類1点（不明）である。時期比定は小破片が多く確定はできないが、出土遺物の時期は熊野Ⅰ期～Ⅱ期の両者が含まれている。大破片の模倣坏（4）や床面から出土した小型甕（17）、壺（18）

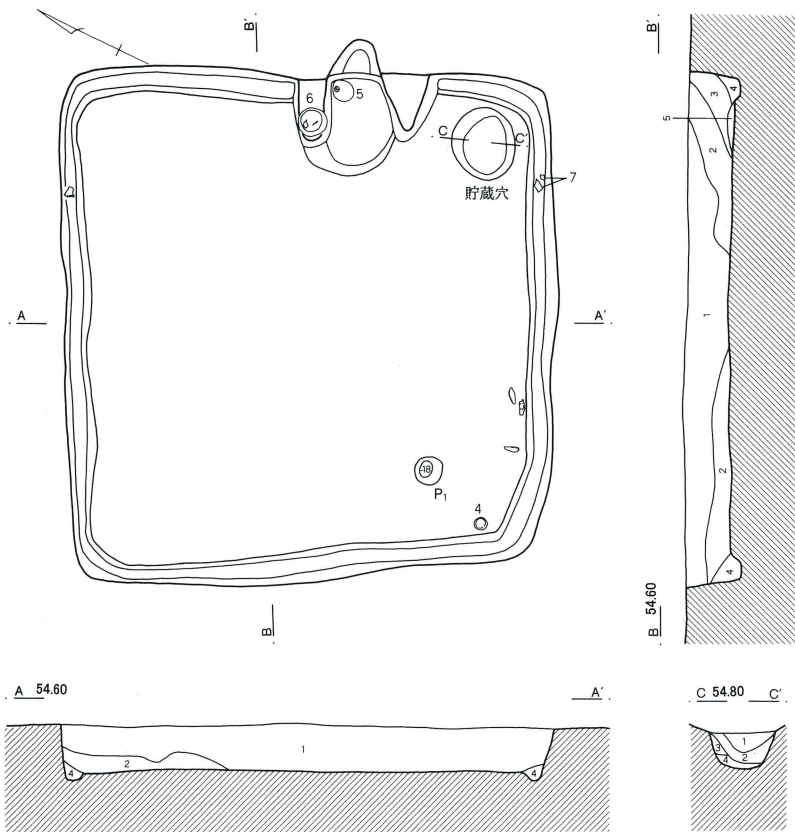
をもとにすると、Ⅰ期に構築から廃絶を迎え、Ⅱ期に埋没したと考えておきたい。

A区第87号住居跡（第140図）

A区第87号住居跡は41・42-11・12グリッドに位置する。重複遺構はない。平面形は整った方形で、規模は長軸長4.08m、短軸長3.96m、深さ0.35mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。

床面は平坦でカマド前面から住居中央部は堅く踏み固められていた。壁際はやや軟弱である。埋土はローム混じりの暗褐色～黒褐色土を基調としており

第140図 A区第87号住居跡

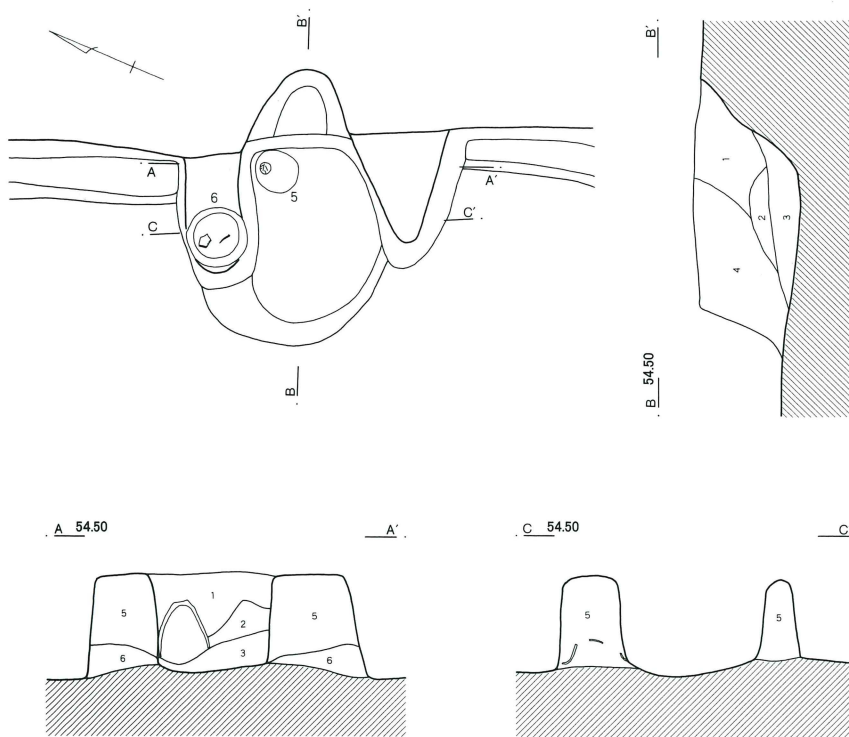


SJ 87

- 1 暗褐色土 ローム粒子やや多量。ロームブロック少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ブロックやや多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
- 4 黒褐色土 ローム粒子微量
- 5 黒褐色土 白色粘土混入。焼土粒子・炭化物少量

貯蔵穴

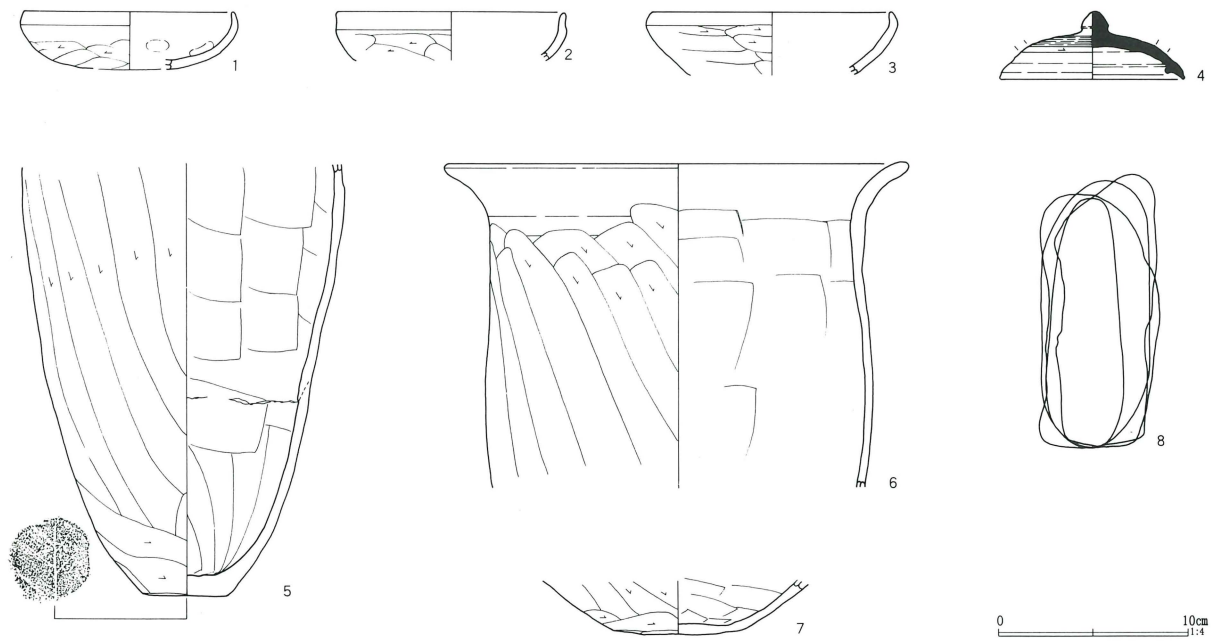
- 1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多量
- 3 ロームブロック混入
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量



カマド

- 1 暗褐色土 白粘土粒子・焼土粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色土 黒褐色土混入。焼土ブロックローム粒子少量
- 3 暗灰褐色土 白色粘土混入。焼土粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子やや多量。ロームブロック少量。灰褐色粘質土混入
- 5 灰褐色粘質土 ローム粒子・ブロック・焼土粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子多量

第141図 A区第87号住居跡出土遺物



第66表 A区第87号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.0)	3.0		AB	B	褐色	30%	覆土
2	土師坏	(12.0)	2.6		AB	B	褐色	10%	覆土
3	土師坏	(12.6)	3.3		B	B	明褐色	10%	覆土
4	須恵蓋	9.7	3.6		BC片	A	灰色	100%	No8. ほぼ床面。末野産。天井部回転ヘラケズリ+拵目
5	土師甕		22.7	4.4	AB	B	灰褐色	90%	No9. カマド内
6	土師甕	24.1	17.1		AB	B	明褐色	65%	No10. カマド左袖内
7	土師壺		2.8	7.0	AB	B	暗褐色	40%	No2・3. 覆土下層

(第1・2層)、一次堆積後に埋め戻された可能性もある。

カマドは北東壁に設けられていた。燃烧部は壁内に納まり、壁外の煙道部に続く。燃烧部底面はフラットで床面との段差はほとんどない。側壁は被熱していた。袖は白色～灰褐色粘土を積んで構築され、左袖には土師器甕が倒立状態で埋置されていた。袖の芯に使用されたものと考えられる。埋土は第1・2・4層は天井部崩落土、第3層は掘り方埋土か。灰層はほとんどない。燃烧部奥壁際から口縁部を欠いた土師器甕が倒立状態で検出された。火床面に埋置されたとすれば、支脚に転用された可能性もある。

ピットは1本検出された。対応する柱穴がなく、深度も浅いため、住居に伴う柱穴とするには無理がある。貯蔵穴はカマド脇の東コーナーにある。直径

55cmの円形で、深さ30cm。

壁溝は全周する。深さは5～10cm程度である。

出土遺物は少なく、土師器坏・甕・壺、須恵器蓋、編物石がある(第141図)。1～3は土師器坏。1・3は内屈口縁の北武蔵型坏、2は模倣坏系であるが、口縁部下の稜は鈍い。4は須恵器蓋である。ほぼ完形で、南コーナー部のほぼ床面から裏返し状態で出土した。宝珠つまみで、天井部外面は回転ヘラケズリ後、カキ目を施す。末野産と思われる。5はカマド内から逆位で出土した土師器長胴甕。胴部上位から口縁部を欠く。胴部縦ヘラケズリで底部は木葉痕を残す。6はカマド左袖内から出土した土師器甕。8は編物石。南東壁際から出土した。

須恵器は10片出土し、内訳は坏が4点、蓋が1点、高台坏が1点、盤が2点、甕が2点で、いずれも末

野産と思われる。時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

A区第88号住居跡（第142図）

A区第88号住居跡は42-11・12グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は長軸長2.46m、短軸長2.17m、深さ0.05mである。主軸方位はN-1°-Wを指す。

床面は削平されており、掘り方のみかろうじて残存するのみである。ピットは6本検出されたが、住居に伴う可能性は低い。カマド、壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土したのみで、図化可能な遺物はない。時期は不明である。

A区第89号住居跡（第143・144図）

A区第89号住居跡は40・41-11グリッドに位置する。第45号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい。また、埋土上面に第185号土壌が乗っていた。平面形は方形で、規模は長軸長4.00m、短軸長3.40m、深さ0.45mである。主軸方位はN-31°-Wを指す。

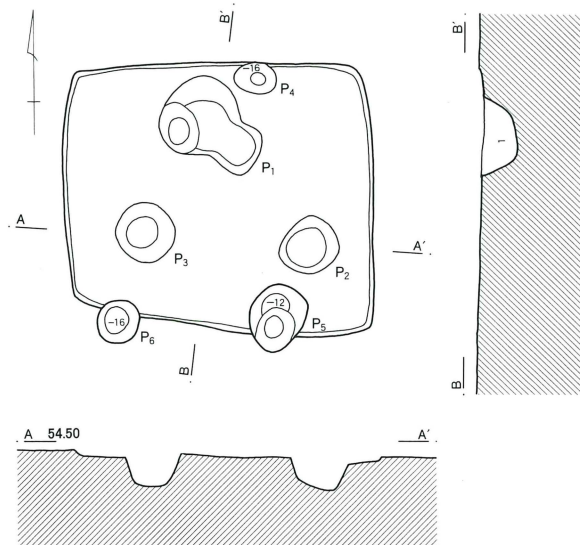
床面は凹凸が顕著で、全体に堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子の混入がやや多いが、特に埋め戻された形跡は認められなかった。

カマドは北西壁に設置され、燃烧部は壁を切って掘り込まれていた。底面は段をもつが床面からの掘り込みは浅い。埋土は灰褐色の砂質土が主体で、白色粘土は使用されていない。第1～3層が天井部崩落土、第4層が天井部崩落土+灰層である。袖はローム粒子・焼土粒子混じりの灰褐色土を積み上げて構築されていた。右袖内には土師器甕が倒立状態で埋置され、袖の芯に用いられていた。

ピットは4本検出された。Pit 1・2は伴う可能性がある。壁溝は全周する。深さは5～10cm。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕・壺・台付甕、須恵器環・高台環・椀・蓋・壺・鉢、鉄製品がある（第145・146図）。1～4は土師器環。1は小振りの北武蔵型環で、口縁部は内彎する。2～4は暗文環タイプの土器であるが、内面の暗文はない。5・6

第142図 A区第88号住居跡



SJ 88

1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量

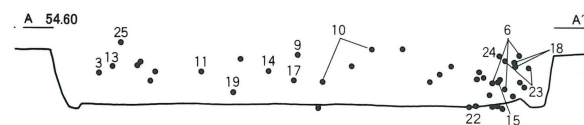
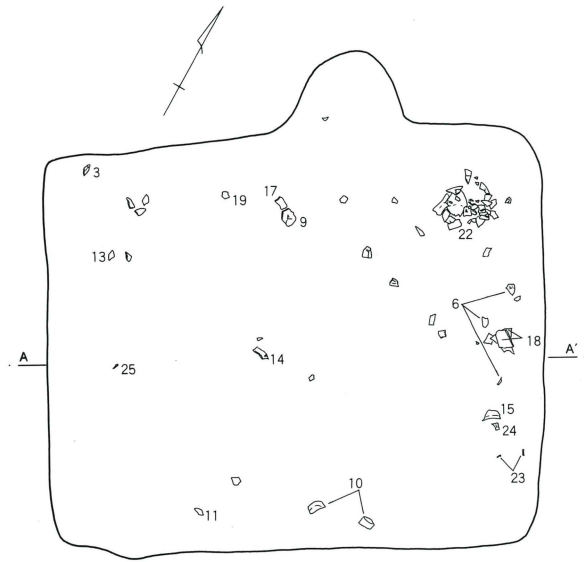
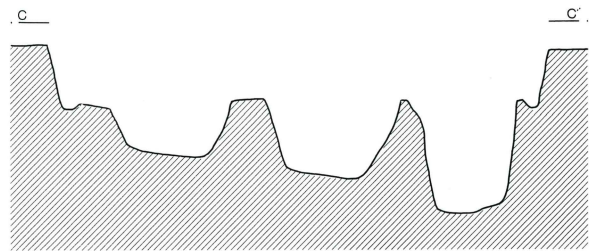
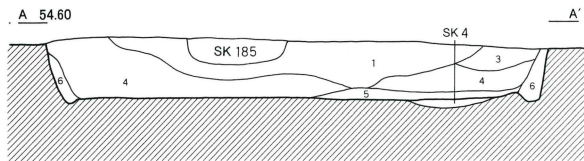
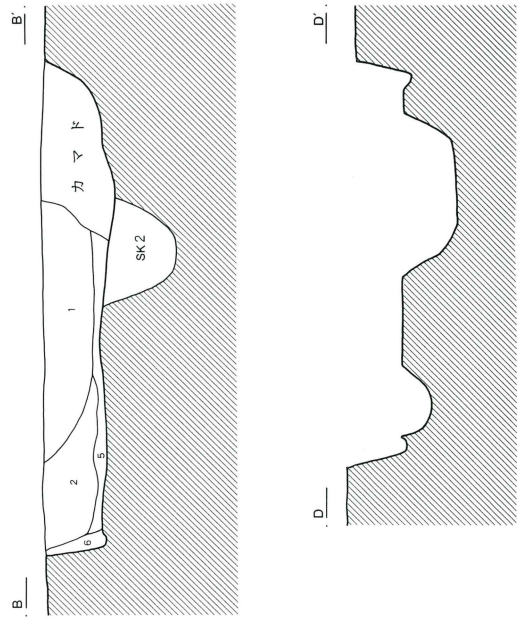
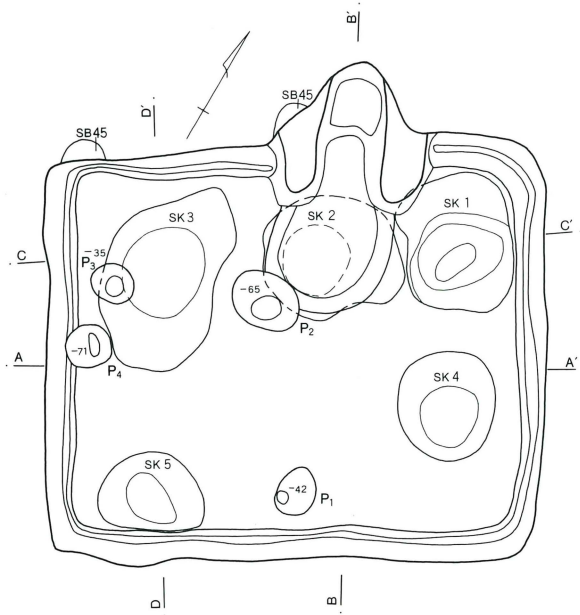
0 2m
1:50

は暗文環。内面に放射状暗文が施文される。7・9・10は須恵器環。9は平底風で、底部は全面手持ちヘラケズリ。10は大振りで丸底風である。底部～体部下端に掛けて回転ヘラケズリ調整。ロクロ逆時計回り。見込部には不定方向の仕上げナデを加えている。8は深身で口縁部外面に2条の沈線が巡る。金属器模倣椀と思われる。11は高台環。高台は底部縁辺に付き貧弱である。底部は回転ヘラケズリ。12はかえり蓋。13は鉢か。14は須恵器壺か。外面に自然釉と窯壁が付着する。胎土から南比企産である。

15～18は土師器長胴甕。15は鬼高的な器壁の厚い甕で、胴部は直線的。タテケズリ調整。16はカマド右袖内に埋設されていた。口縁部は大きく外反し、胴部は上位に張りをもつ。胴部調整はタテ及びナメケズリである。器壁はやや薄くなる。22は土師器壺である。床面出土。23は片関の刀子、24は基部に折り返しをもつ鎌である。25は不明鉄製品。断面方形の角棒状を呈する。

須恵器は33片出土し、内訳は環が17点（末野産）、高台環1点（末野産）、椀1点（末野産）、蓋5点（末野産）壺瓶類1点（南比企産）、甕5点（末野産）、鉢3点（末野産）である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

第143図 A区第89号住居跡・遺物分布図



SJ 89

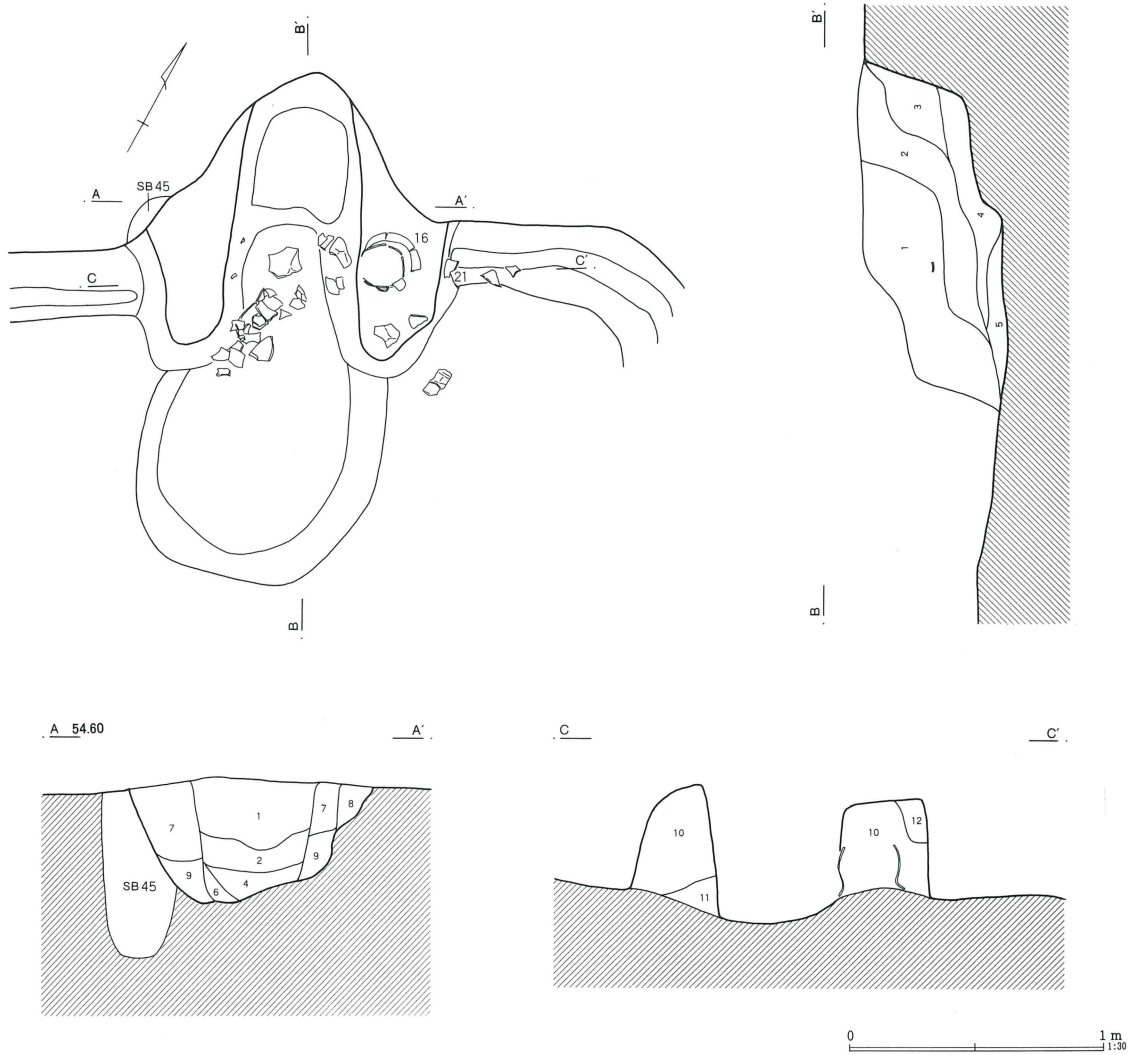
- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
- 4 褐色土 ローム粒子多量
- 5 褐色土 ローム粒子・ブロックやや多量
- 6 明褐色土 ローム粒子微量

カマド

- 1 灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入。黒色土少量
- 2 明灰褐色砂質土 焼土ブロック・ロームブロック少量
- 3 灰褐色砂質土 ローム粒子やや多量
- 4 黒灰色土 焼土・灰・炭化物混入(灰層)
- 5 褐色土 ロームブロック多量
- 6 褐色土 ロームブロック・焼土粒子やや多量
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量
- 8 黒褐色土 ローム粒子多量
- 9 茶褐色土 焼土粒子・ロームブロック混入
- 10 灰褐色土 微細なローム粒子を均一に混入
- 11 灰褐色土 ロームブロック・焼土混入
- 12 灰褐色土 ローム混入なし



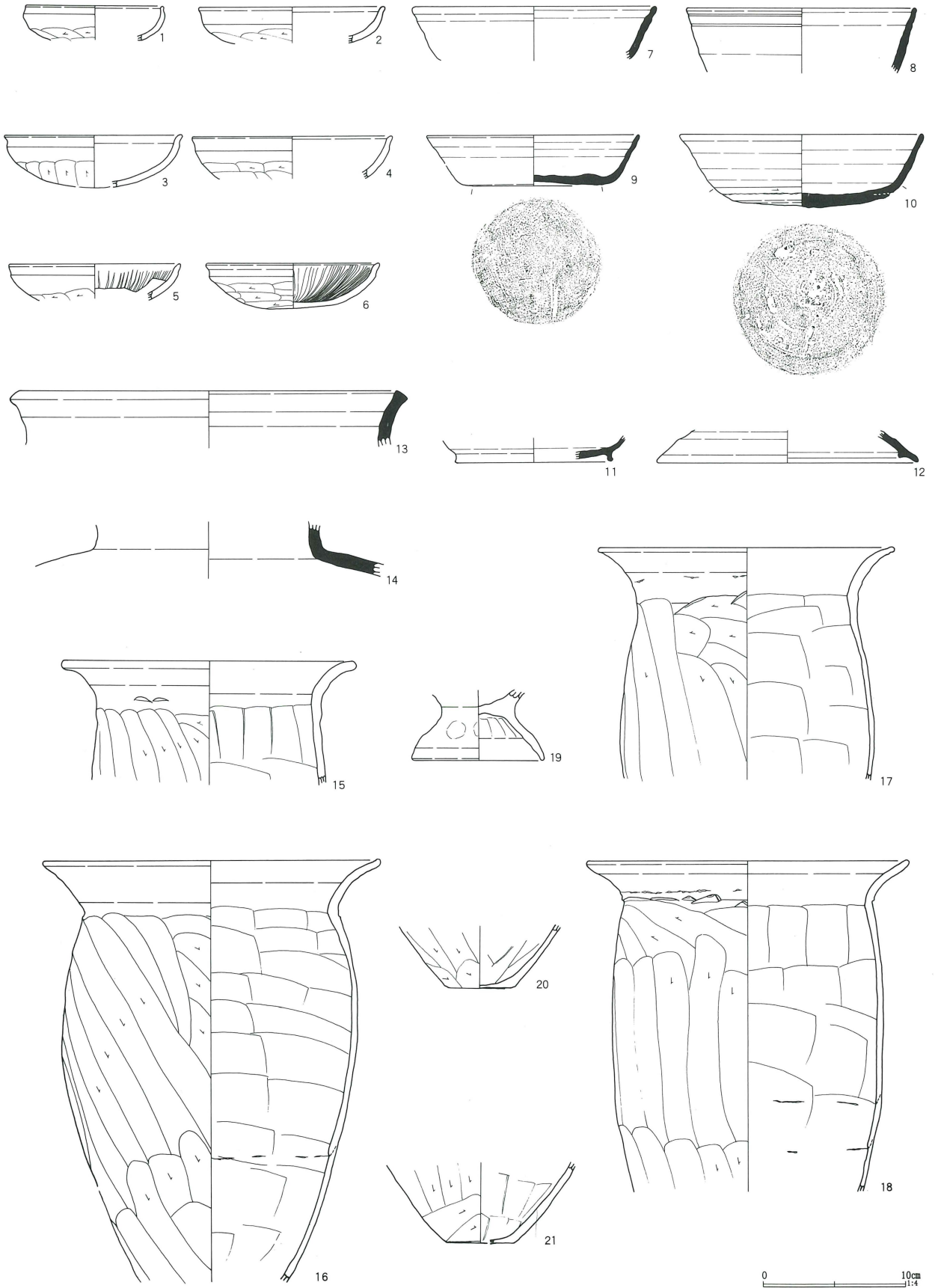
第144図 A区第89号住居跡カマド



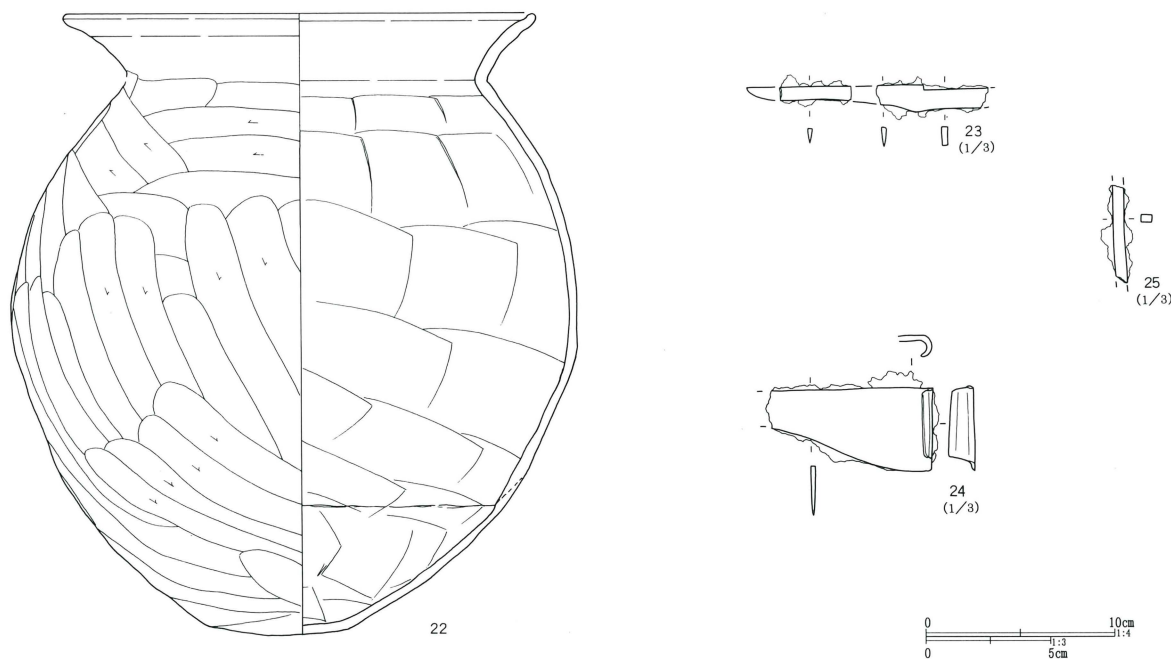
第67表 A区第89号住居跡出土遺物観察表 (第145・146図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(9.6)	2.4		AB	B	褐色	40%	覆土
2	土師坏	(13.0)	2.5		AD	A	明褐色	10%	覆土。暗文坏タイプ
3	土師坏	12.4	3.6		AB	A	赤褐色	35%	No.19。覆土中層。内面暗文なし
4	土師坏	(14.0)	3.0		AB	A	褐色	30%	覆土。内面暗文なし 黒斑あり
5	土師暗文坏	(12.0)	2.6		AB	B	暗褐色	30%	覆土。内面放射暗文
6	土師暗文坏	12.0	3.2		AC	A	赤褐色	95%	No.9・31他。覆土下層～上層。内面放射暗文
7	須恵坏	(17.0)	3.7		B片	B	灰褐色	10%	覆土。末野産
8	須恵碗	(16.0)	4.6		B片	A	灰色	5%	覆土。末野産
9	須恵坏	(15.0)	3.5	9.8	C D片	C	黄灰色	50%	No.21。覆土上層。末野産。底部2a手法
10	須恵坏	17.0	5.1	10.7	C片	B	灰色	65%	No.1・2。覆土中層+上層。末野産。底部3c手法
11	須恵高台坏		1.8	(11.0)	B片	B	灰褐色	15%	No.4。覆土中層。末野産
12	須恵蓋	(18.4)	2.3		C片	B	灰色	10%	覆土。末野産
13	須恵鉢	(26.4)	4.0		BC	A	灰色	5%	No.14。覆土中層。末野産
14	須恵壺		4.1		B針	A	灰色	25%	No.11。覆土中層。南比企産。外面窯壁付着
15	土師甕	(20.0)	8.7		ABC	B	褐色	25%	No.8。覆土中層
16	土師甕	23.6	29.6		ABC	A	褐色	85%	No.38。カマド右袖内
17	土師甕	(20.6)	16.3		ABD	B	明褐色	20%	No.22。覆土中層
18	土師甕	22.4	23.2		ABC	A	明褐色	50%	No.28・29。覆土中層+上層

第145图 A区第89号住居跡出土遺物(1)



第146図 A区第89号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
19	土師台付甕		4.9	9.1	AB	A	褐色	50%	Na20. 覆土下層
20	土師甕		4.4	(5.0)	BC	B	茶褐色	35%	カマド左袖内
21	土師甕		5.7	4.8	BC	A	茶褐色	45%	Na3. カマド右袖
22	土師壺	24.6	32.7	7.5	BCD	A	褐色	85%	Na36. 床面
23	刀子	Na5・6. 覆土上層。Na5(残長2.8cm) Na6(残長4.5cm)							
24	鎌	Na7. 覆土上層。残長6.6cm。幅3.3cm							
25	不明鉄製品	Na13. 覆土上層。残長3.9cm。角棒状							

A区第90号住居跡 (第147図)

A区第90号住居跡は40・41-10・11グリッドに位置する。第36号掘立柱建物跡との関係は、住居を切る第201号土壌を建物柱穴と誤認したが、断面観察と床面の状況から住居が新しいことが判明した。また、壁溝が二重に巡り、一度建て替えられた(拡張)ものと考えられる。建て替え後を90A号、建て替え前を90B号住居跡とする。

90A号住居跡の平面形は方形で、規模は長軸長4.44m、短軸長4.40m、床面までの深さは0.18mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

床面は90B号住居跡を埋めてつくり、やや凹凸が目立つが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は、ローム・焼土混じりの暗褐色~黒褐色土で構成されていたが、自然堆積か否かは不明である。

カマドは北西壁の北コーナーに寄った位置に構築

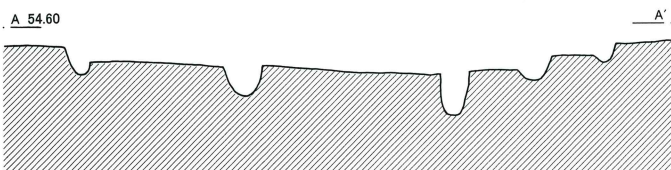
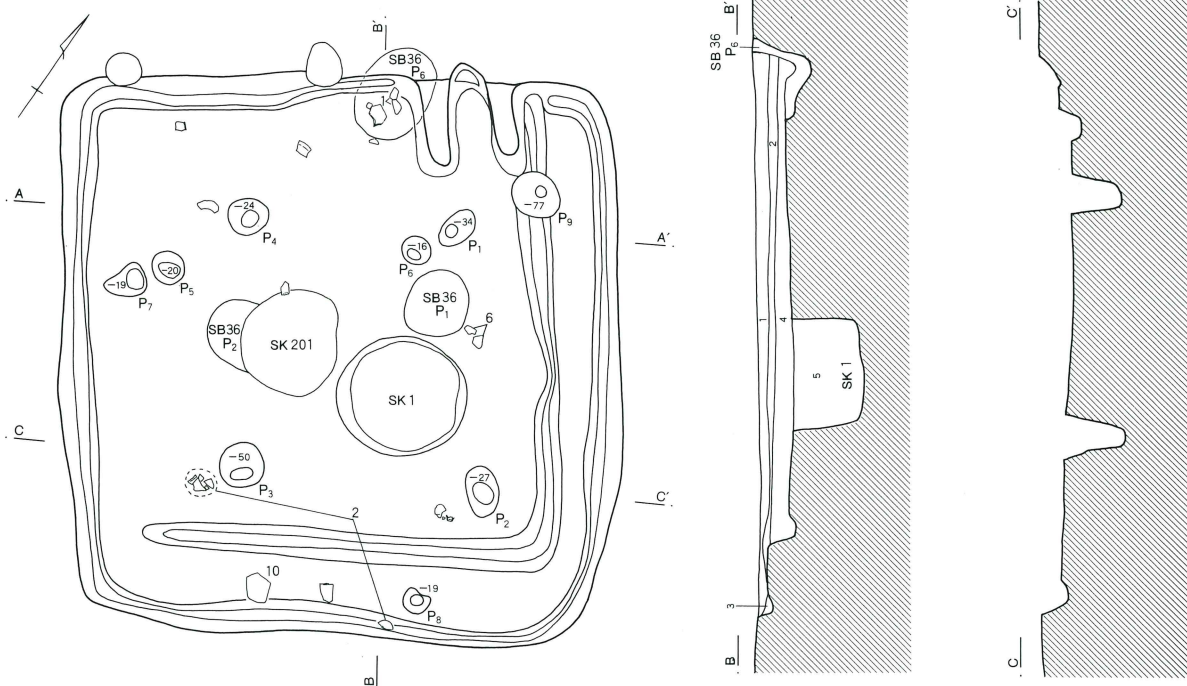
されていた。燃焼部はほぼ壁内に納まっている。カマド構築材は褐色系の粘質土を用い、白色粘土は使用されていない。第1~3層が天井部崩落土、第4層が掘り方埋土と考えられる。火床面は第4層上面となろう。但し、埋土に焼土や灰の含有量は少ない。袖は黒色土やローム混じりの褐色土を主体に構築され、右袖内には土師器甕が倒立状態で埋設されていた。袖の芯に転用されたものと推定される。

90A号住居跡の主柱穴はPit1~4が対応するものと考えられる。壁溝は全周する。深さは10cm程度である。

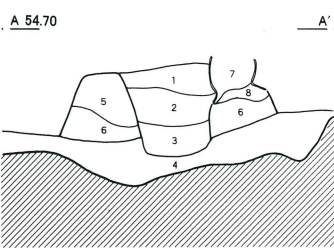
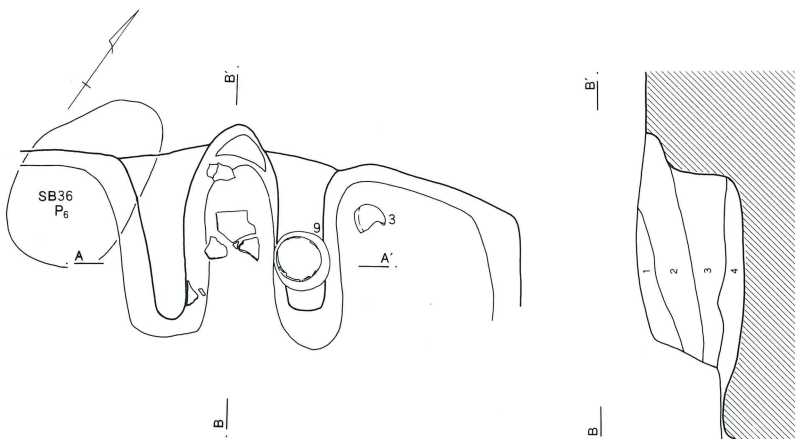
90B号住居跡は90A号住居跡北西壁と南西壁を共有する。方形で、規模は長軸長3.94m、短軸長3.84m、確認面からの深さは0.30m前後である。

伴うピットは不明確であるが、Pit5・6が対応する可能性はある。壁溝は「L」字状に屈曲する。北

第147図 A区第90号住居跡

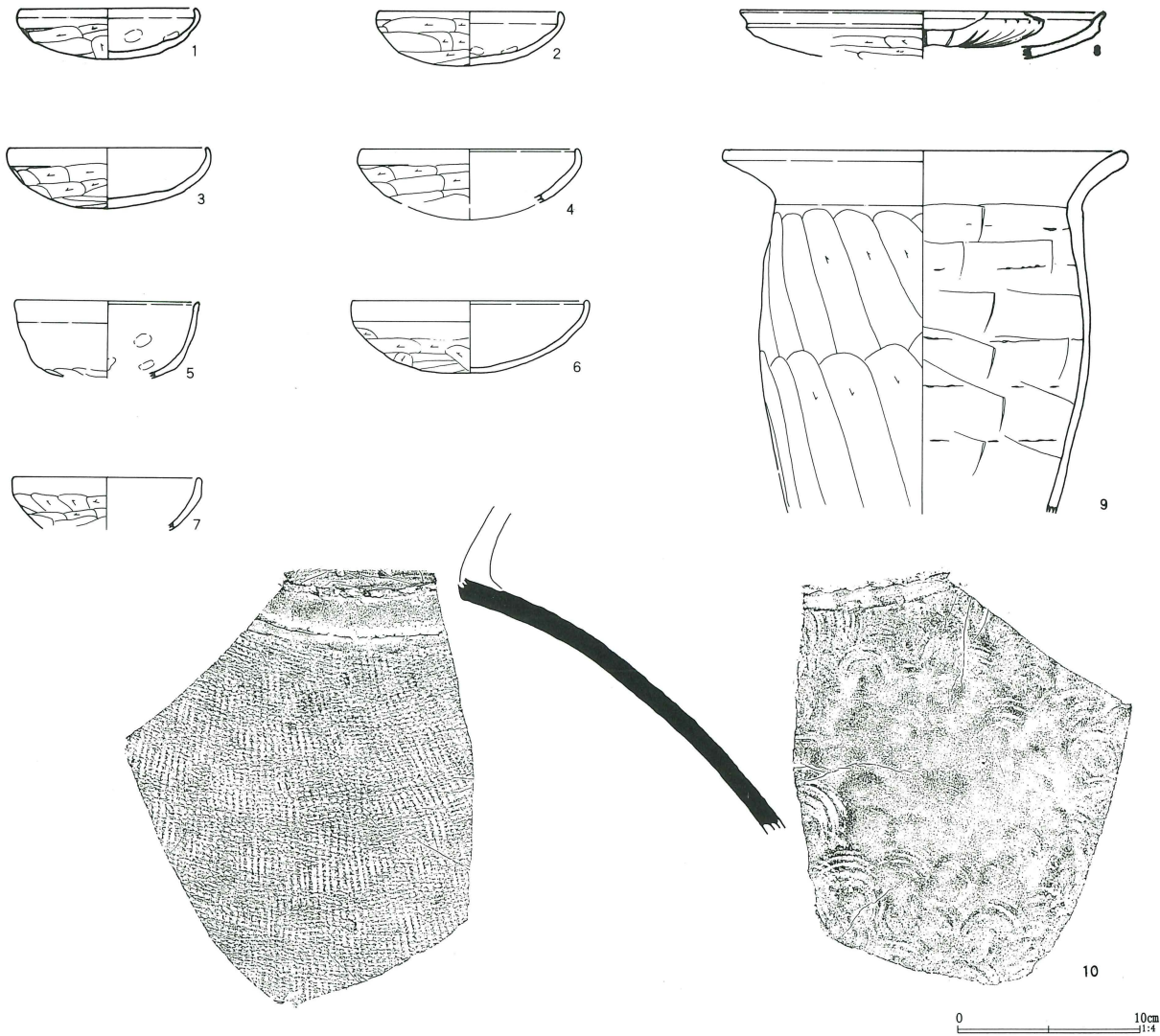


- SJ 90
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 4 黒色土 ローム粒子微量
 - 5 暗褐色土 ロームブロック混入
- 0 2 m
1:60



- カマド
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
 - 2 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量(貼床)
 - 5 褐色土 微細な焼土粒子・ローム粒子均一に混入
 - 6 暗褐色土 黒色土ブロック・ロームブロック混在
 - 7 褐色土 ローム粒子混入
 - 8 褐色粘土 ロームブロック多量
- 0 2 m
1:60

第148図 A区第90号住居跡出土遺物



第68表 A区第90号住居跡出土遺物観察表 (第148図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	9.7	2.8		AB	A	明褐色	95%	No.2・3。SB36Pit8内
2	土師坏	10.0	3.0		BG	A	褐色	90%	No.11・14。床面+覆土下層。歪み著しい
3	土師坏	11.0	3.4		BDG	A	明褐色	75%	No.15。覆土下層
4	土師坏	(11.9)	3.0		AB	B	褐色	25%	覆土
5	土師坏	(10.0)	4.3		DG	A	褐色	15%	覆土。外面磨滅 調整不明瞭
6	土師坏	12.9	4.0		AB	A	褐色	75%	No.9。覆土下層。器肉に青灰色の還元部あり
7	土師坏	(10.2)	2.9		G	A	明褐色	20%	覆土
8	土師暗文皿	(20.0)	2.6		AB	A	明褐色	10%	覆土。内面放射暗文
9	土師甕	22.0	20.0		AB	A	橙褐色	90%	No.10。カマド右袖内
10	須恵大甕				C片	B	茶褐色		No.13。覆土下層。末野産。内面磨滅

西壁と南西壁は90A号住居跡と共有する。

出土遺物は少なく、土師器坏・暗文皿・甕、須恵器甕がある (第148図)。1～7は土師器坏である。

1～4・6は内屈口縁の北武蔵型坏。1は口径9.7cmと小振りで、作りも良い。第36号掘立柱建物跡

柱穴掘り方から出土しているが、本住居から流れ込んだものと思われる。

5は非定形的な坏で、器面が荒れている。底部は丸底風でヘラケズリされる。7は口縁部が短く直立する坏で、口縁直下からヘラケズリされる。8は暗文皿。内面に放射暗文が施され

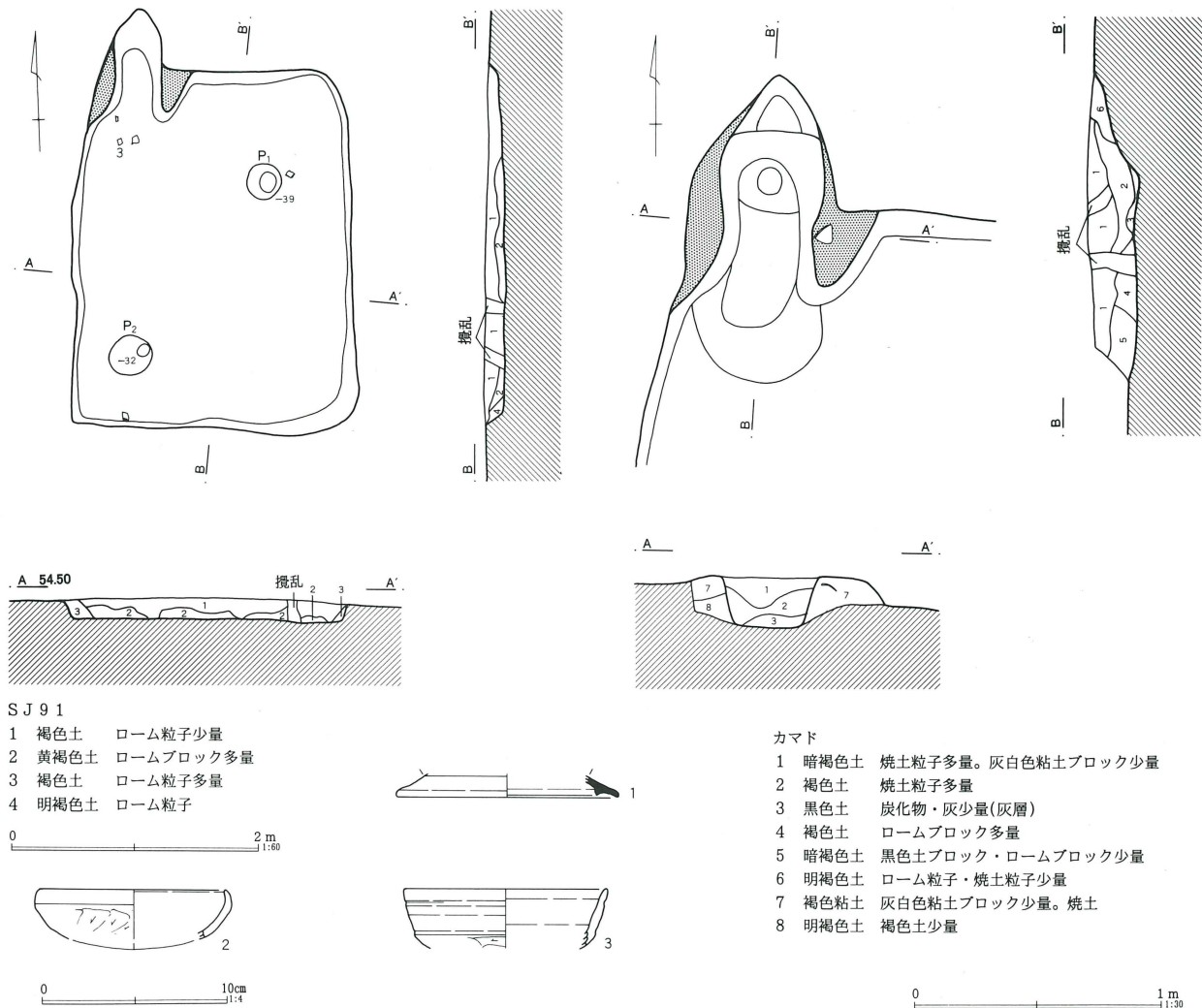
る。9はカマド右袖内に埋設された土師器甕。長胴器形で、胴部タテケズリ調整される。10は須恵器甕肩部片。外面は平行（擬格子）叩き。内面は同心円文当て具痕が残るが、中央付近がかなり強く磨滅しており、破片として二次的に使用されたことがわかる。

須恵器は甕が4片出土したのみである。いずれも末野産である。時期は熊野I期と考えられる。

A区第91号住居跡（第149図）

A区第91号住居跡は40・41-11・12グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

第149図 A区第91号住居跡・出土遺物



第69表 A区第91号住居跡出土遺物観察表（第149図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋	(12.0)	1.3		B片	B	灰色	5%	覆土。末野産
2	土師坏	(10.0)	2.7		AB	B	橙褐色	10%	覆土
3	土師坏	(11.0)	3.4		AB	B	淡黄褐色	10%	No4。覆土中層

平面形は長方形で、規模は長軸長3.00m、短軸長2.34m、深さ0.18mである。主軸方位はN-0°を指す。

床面は平坦で、特に堅く踏み固められた個所は見られなかった。埋土は第2層中にロームブロックが多量に含まれ、埋め戻された可能性がある。

カマドの構築位置は変則的で、北壁の西端に設けられていた。埋土は第1・2層が天井部崩落土、3層が灰層である。袖は白色粘土を用いて構築されていた。

ピットは2本検出されたが、伴うか否かは不明確である。壁溝はない。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏と須恵器蓋がある(第149図)。1は小振りの須恵器蓋。内面にかえりが付き、いわゆる坏Gの蓋であろう。2は内屈口縁の北武蔵型坏。3は有段口縁坏である。

須恵器は3片出土したのみである。内訳は蓋が1点(末野産)、壺瓶類が2点(末野1・南比企1)である。時期は不明確であるが、出土遺物から見ると熊野Ⅰ期と考えられる。

A区第93号住居跡(第150図)

A区第93号住居跡は調査区西端の44-8グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延びている。多数の遺構と重複し、新旧関係は第79・94・95号住居跡を切り、第31・32号住居跡、第82号住居跡、第33号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸長6.72m、残存短軸長2.88m、深さ0.48mである。主軸方位はN-16°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、非常に堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子と焼土粒子をやや多く含む褐色系土を主体としていた。また、カマド前面の床面にはカマドに由来する白色粘土が堆積していた。

カマドは北壁に設置されるが、西半は調査区外、燃焼部先端付近は第33号掘立柱建物跡柱穴に破壊され、遺存状態は悪い。燃焼部は壁外に延び、底面は皿状に窪む。埋土は第1・2・4・5層が天井部崩落土、第3層が灰層である。袖は右袖のみ遺存し、白色粘土を積み上げて構築されている。

ピットは2本検出された。いずれも深度が深く、住居に伴う主柱穴を構成するものと考えられる。

貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

第31号住居跡他の遺構に覆土を削平されているためか、出土遺物は少ない。土師器坏・暗文坏・皿・甕が検出された(第150図)。1は暗文坏で、内面に放射暗文が施文される。2-4は北武蔵型坏。5は皿である。6・7は土師器甕。6は口縁部が大きく外反し、胴部上端はヨコヘラケズリ。

須恵器は11片出土し、内訳は坏4点、蓋4点、甕2点、長頸瓶1点。いずれも末野産である。住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第94号住居跡(第151図)

A区第94号住居跡は44-8グリッドに位置する。第31・82・93・95号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複し、第95号住居跡を切り、他の遺構に切られていた。遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は方形で、規模は長軸長2.88m、短軸長2.40m、床面までの深さ0.30mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。

床面は掘り方上部に貼床され、堅く踏み固められていた。埋土は大粒のロームブロックを多量に混在する褐色土を主体としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

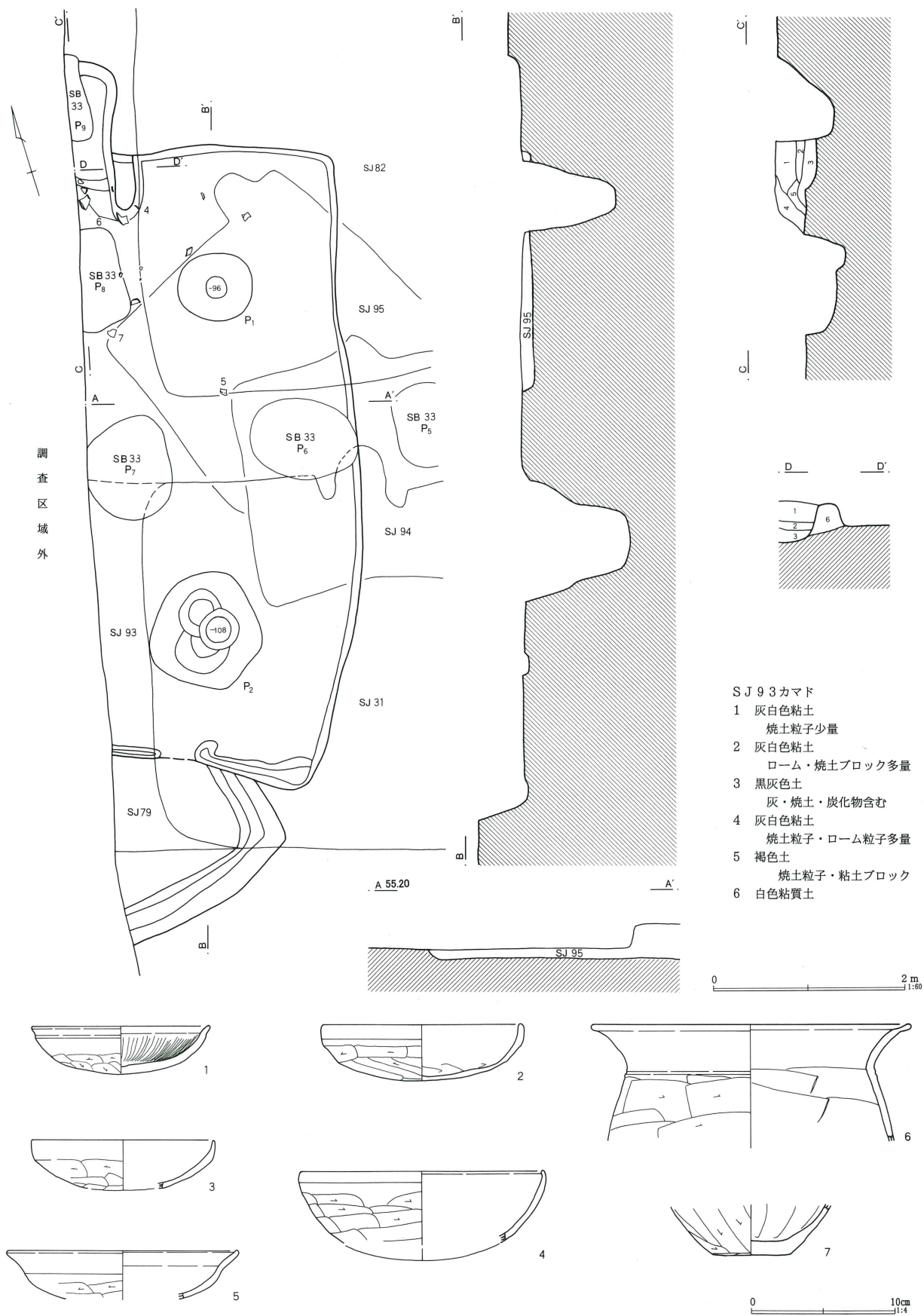
カマドは北壁の中央部に設置されるが、上面は削平されており、掘り方が遺存するのみで詳細は不明とせざるを得ない。掘り方埋土はロームブロック、焼土混じりの褐色土である。袖は遺存しない。

ピットは3本検出されているが、伴う可能性は低

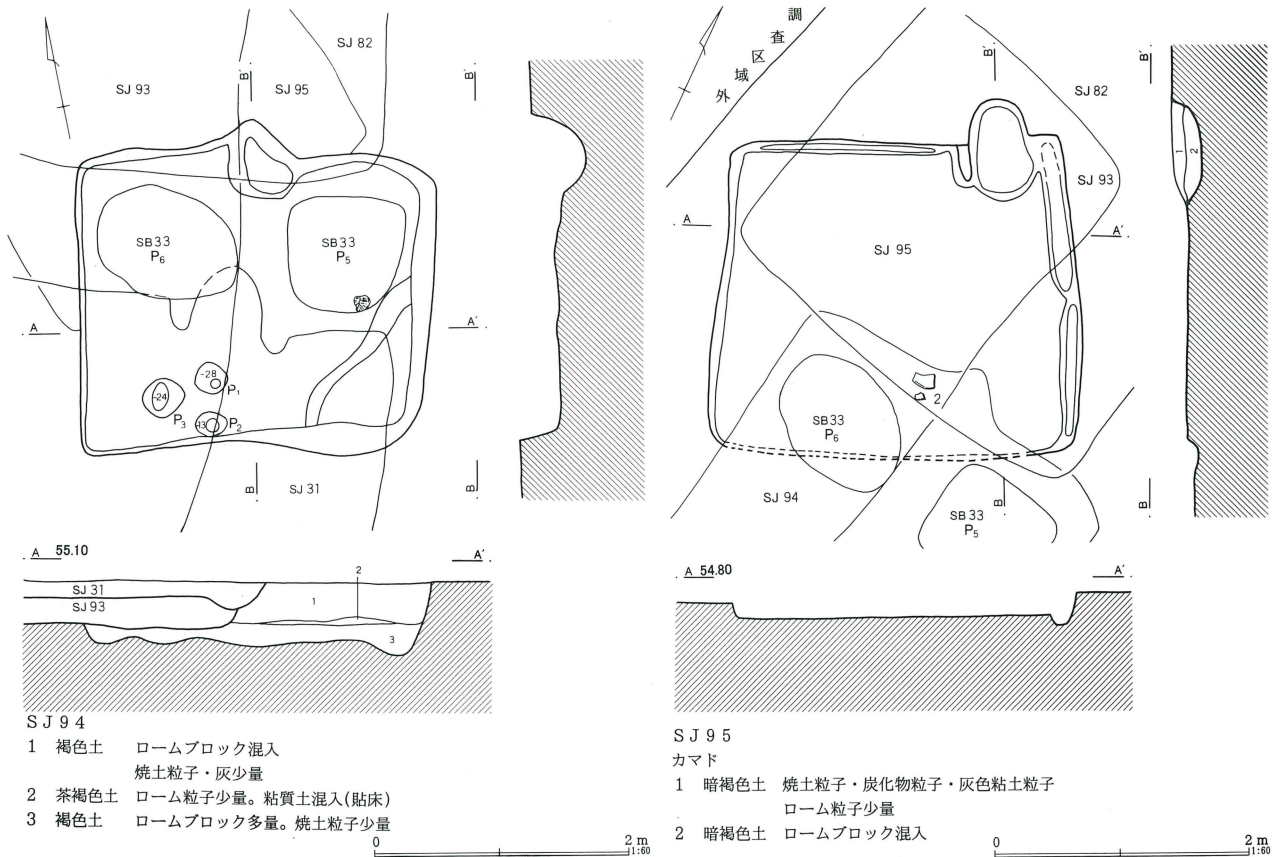
第70表 A区第93号住居跡出土遺物観察表(第150図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	(12.4)	3.4		AB	B	明黄褐色	25%	覆土。内面放射暗文
2	土師坏	(13.9)	3.9		AB	B	淡褐色	60%	覆土
3	土師坏	(12.7)	3.4		ABD	B	橙褐色	15%	カマド。全体に磨滅
4	土師坏	(16.9)	5.0		AB	B	橙褐色	35%	カマドNo2。カマド袖内
5	土師皿	(16.0)	3.4		AB	B	橙褐色	15%	No8。覆土下層
6	土師甕	22.0	8.2		ABD	B	茶褐色	50%	カマド内No1・4
7	土師甕		3.5	7.4	ABD	B	黄褐色	35%	No7。覆土中層

第150図 A区第93・79号住居跡・第93号住居跡出土遺物



第151図 A区第94・95号住居跡



第152図 A区第94号住居跡出土遺物



第71表 A区第94号住居跡出土遺物観察表 (第152図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	11.7	3.7		A B	B	褐色	75%	掘り方
2	土師暗文坏	(15.0)	4.3		A B G	B	褐色	50%	床面。内面放射暗文
3	土師皿	(18.0)	2.6		A B	B	褐色	10%	掘り方

い。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏・暗文坏・皿がある(第152図)。1は丸底形態の北武蔵型坏。2は床面から出土した暗文坏で内面に放射暗文が施文される。3は皿。須恵器は検出されなかった。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。重複する第93号住居跡と同一段階であるが、遺構の新旧関係から本住居跡の方が古いものと判断される。

A区第95号住居跡(第151図)

A区第95号住居跡は44-8グリッドに位置する。第31・82・93・94号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も古い。覆土上面に第82・93

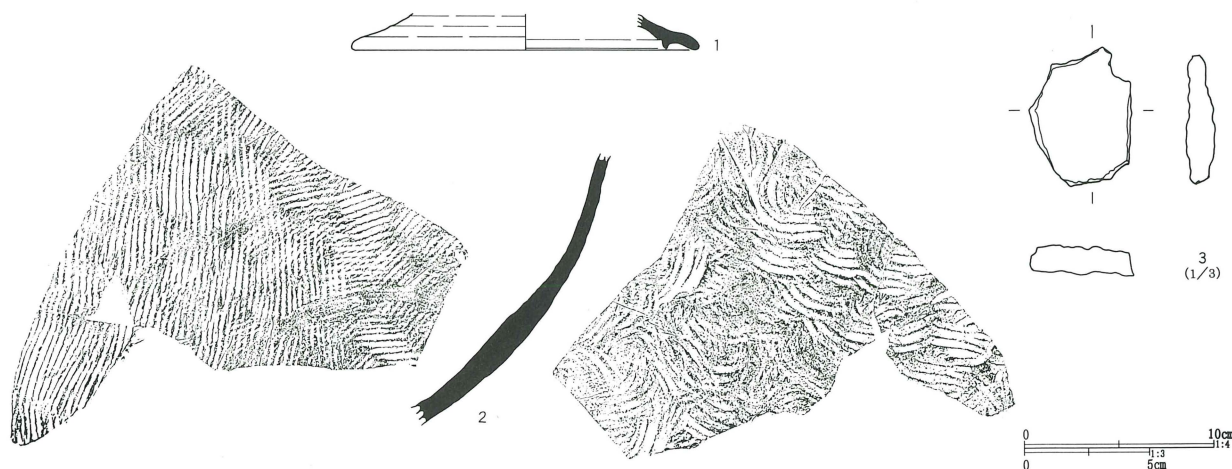
号住居跡が乗っているため、遺存状態は悪い。

平面形は方形と推定され、推定規模は長軸長2.94m、短軸長2.52m、深さ0.15mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面はほぼ平坦である。埋土はロームブロック、焼土混じりの褐色土で人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北西壁の北隅に寄った位置に設置される。上面は削平されており詳細は不明である。埋土は焼土・粘土混じりの暗褐色土を基調としていた。袖部にはロームブロックと焼土ブロック混じりの白色粘土が遺存するが、あまりしっかりしたものではない。

第153図 A区第95号住居跡出土遺物



第72表 A区第95号住居跡出土遺物観察表 (第153図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋	(18.0)	1.9		B片	B	暗灰色	8%	覆土。末野産
2	須恵甕				C片	A	暗灰色		No1・2。覆土中層。末野産
3	瑪瑙原石	覆土。重さ32.74g。板状の原石。表裏は自然面を残す。側縁は全て折り取られている。							

ピット・貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は部分的に巡っていた。

出土遺物は須恵器蓋と甕の他、瑪瑙の原石が1点検出されている(第153図)。1は須恵器蓋。内面にかえりが付く。2は須恵器甕。外面平行叩き、内面同心円文当て具痕。3は瑪瑙原石。側縁は折り取られている。

須恵器は8片出土し、内訳は坏が2点、蓋が3点、甕が3点である(いずれも末野産)。出土遺物はいずれも小片で時期決定の資料とはならない。重複遺構との新旧関係から、住居の時期は熊野Ⅱ期以前となる。おそらくⅠ期に遡るものであろう。

A区第96号住居跡(第154図)

A区第96号住居跡は37-10・11グリッドに位置する。西コーナーが一部調査区外に掛かるが遺存状態は比較的良好である。

平面形は方形で、規模は長軸長3.81m、短軸長3.76m、床面までの深さ0.30mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。

床面は凹凸が比較的顕著で、カマド前面から住居中央部が堅く踏み固められていた。壁際はやや軟弱であった。埋土はロームブロック混じりの暗褐色か

ら黒褐色土を基調としており、人為的に埋め戻されたものと推定される。床面を除去した段階で全面にわたり掘り方が検出された。特に壁際が深く掘り込まれていた。

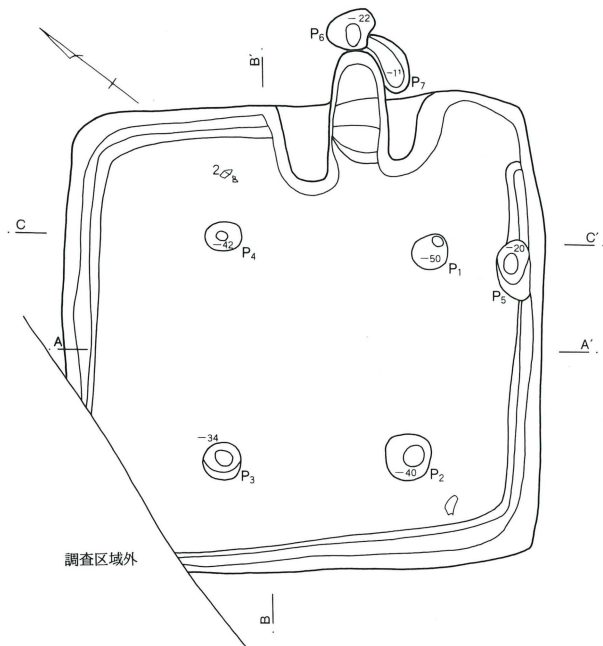
カマドは北東壁に設置される。燃烧部はほぼ壁内に納まり、壁外に延びる煙道部に続く。側壁上部は強く被熱していた。埋土は第1~3層が天井部崩落土、第4層が灰層に相当しよう。第5層は掘り方埋土と思われる。袖は明灰色粘質土をベースに構築されていた。燃烧部に1個体、左袖から燃烧部中央に向けて落ち込むような形で1個体、計2個体の土師器長甕が出土した。一方の甕底部を他方の口縁部内に差し込んだ状態で検出されており、天井部の架構材に使用されたものと考えられる。

ピットは住居内から5本検出された。Pit1~4は規則的に配され、住居に伴う支柱穴と考えられる。Pit5の帰属は不明確である。カマドに接して検出されたピット(Pit6・7)は直接伴うものではない。

壁溝はカマドの周囲を除き巡っている。深さ5~10cmほどである。

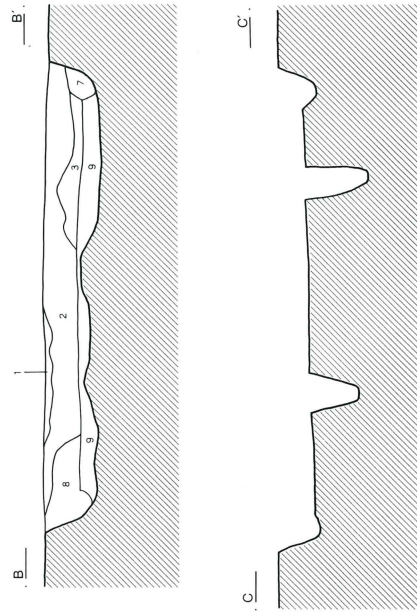
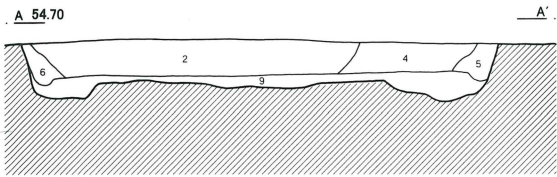
出土遺物は土師器坏・甕、土錘がある(第155図)。1・2は模倣坏である。1は口径9.9cmと小振りの坏

第154図 A区第96号住居跡



調査区域外

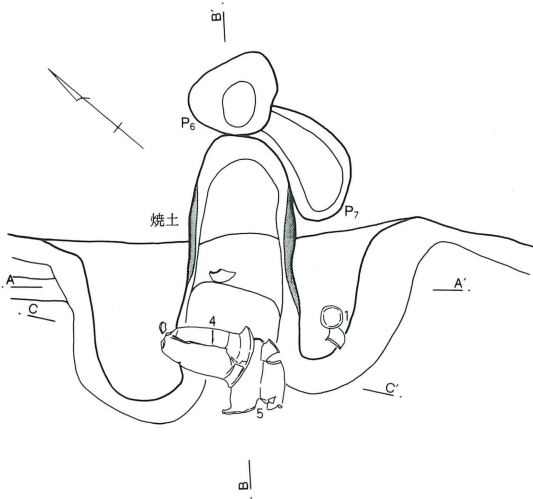
A 54.70



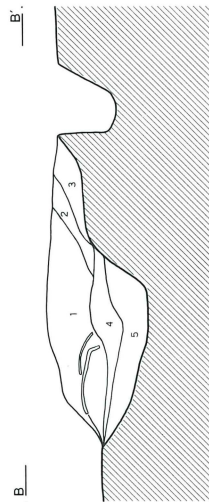
SJ 96

- 1 暗褐色土 ローム粒子・黒色砂混入
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量。灰白色粘土ブロック混入
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック
- 6 暗褐色土 ロームブロック
- 7 暗褐色土 ロームブロック
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック混入(掘り方)

0 2 m
1:50



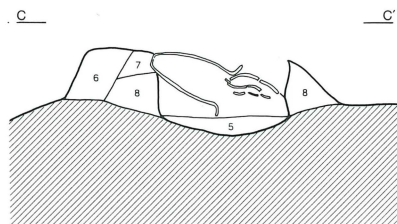
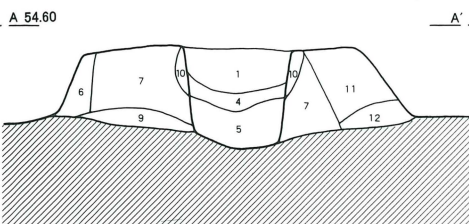
焼土



カマド

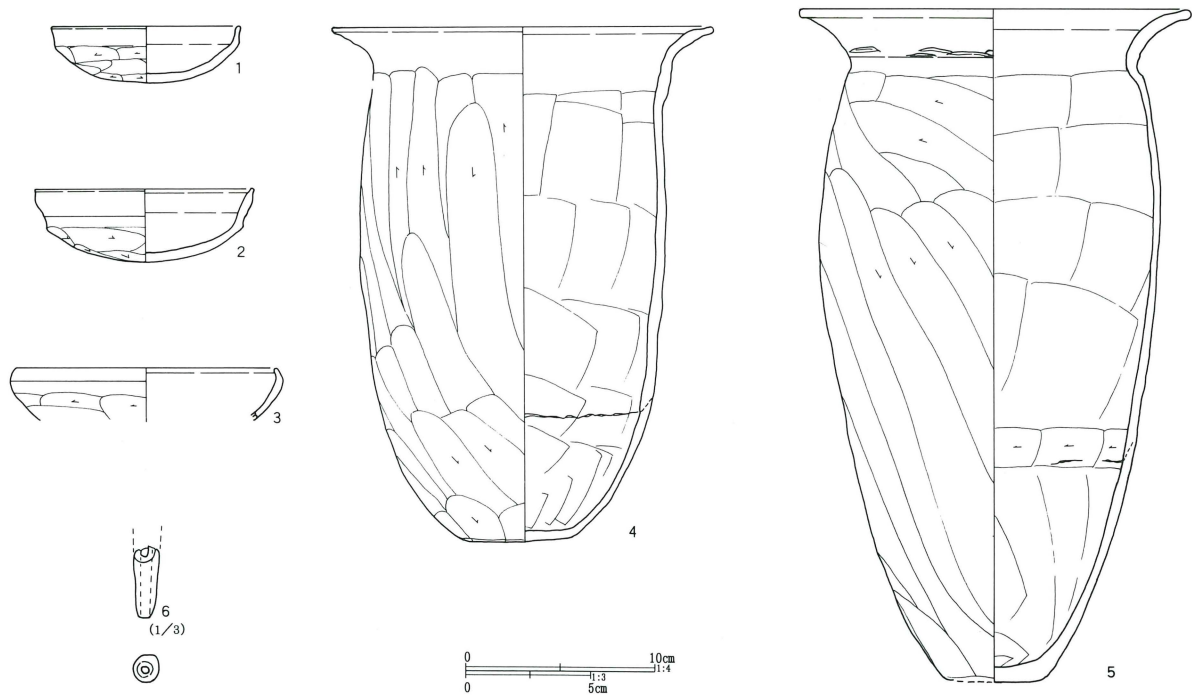
- 1 褐色土 橙灰色・粘土ブロック・焼土
ローム粒子混入
- 2 褐色土 焼土多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 焼土粒子やや多量
- 5 黒褐色土 ロームブロック
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量
- 7 明灰色土 粘質土
- 8 明灰色土 粘質土・黒色土・ブロック混入
- 9 黄褐色土 黒色土・ブロック混入
- 10 焼土
- 11 暗褐色土 粘土粒子・ローム粒子・焼土粒子
- 12 黒色土 ローム粒子混入

A 54.60



0 1 m
1:30

第155図 A区第96号住居跡出土遺物



第73表 A区第96号住居跡出土遺物観察表（第155図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	9.9	3.0		BCG	A	明褐色	100%	カマド内No4. 右袖内
2	土師坏	11.5	3.8		B	B	暗褐色	50%	No4. 覆土下層
3	土師坏	(13.7)	2.8		ABF	A	茶褐色	15%	覆土
4	土師甕	20.0	26.9	5.7	AD	A	茶褐色	90%	カマド内No2
5	土師甕	20.5	35.3	5.5	BD	A	褐色	95%	カマドNo3
6	土錘	覆土。長さ2.8cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ2.76g。胎土B D。焼成A。褐色。残存50%							

で完形品。カマド右袖内に埋置されていた。3は内屈口縁の北武蔵型坏。4・5は土師器甕。4は小型、5はいわゆる長甕である。5の甕の中に4の甕が差し込まれた状態で出土した。須恵器は検出されなかった。住居の時期は熊野I期と考えられる。

A区第97号住居跡（第156図）

A区第97号住居跡は39・40-11グリッドに位置する。平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.98m、短軸長3.72m、深さ0.27mである。主軸方位はN-11°-Eを指す。

床面はやや凹凸があり、あまり堅い箇所は見られなかった。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土～黒褐色土を主体としており、特に埋め戻したような状況は観察されなかった。

カマドは北壁に設置されていた。燃烧部～煙道部

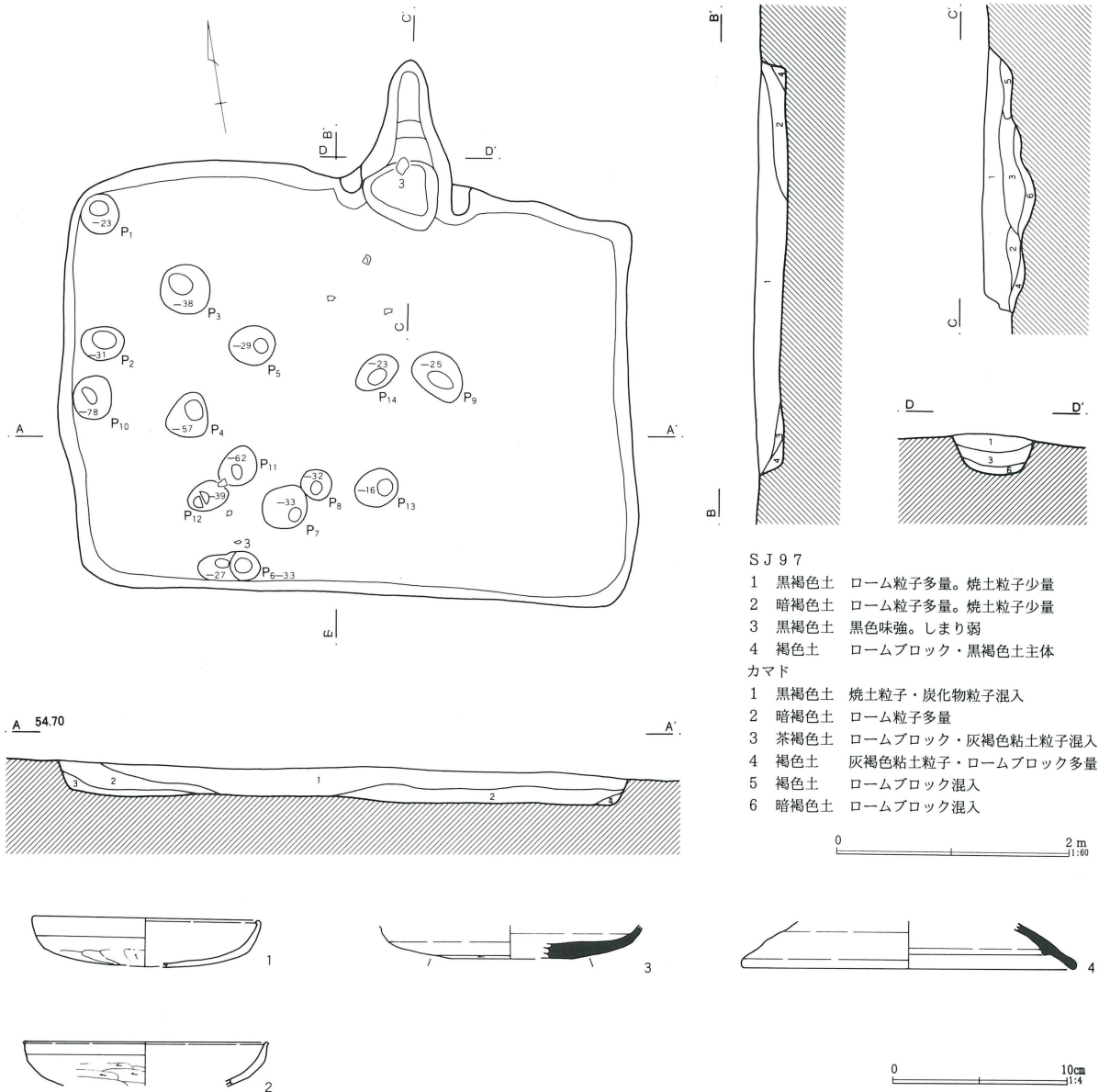
は壁外に延びている。埋土は第2～4層が天井部崩落土、第6層が掘り方である。第6層上面が火床面に相当しよう。袖は灰褐色粘質土混じりの褐色土で構築されていたが、遺存状態は良くない。

ピットは14本検出されたが、いずれも小規模で配置も規則性に欠ける。住居に伴うものではなからう。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏、須恵器坏・蓋が検出された（第156図）。量的に少なくいずれも小片である。1・2は土師器坏。やや扁平で丸底風の北武蔵型坏である。3は大振りの須恵器坏底部。底部を回転ヘラケズリ調整している。4は須恵器蓋。内面にかえりをもつ。

須恵器は8片出土し、内訳は坏が2点（末野産）、蓋が5点（末野3・南比企2）、壺瓶類1点（末野）

第156図 A区第97号住居跡・出土遺物



第74表 A区第97号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.0)	2.7		AB	A	褐色	20%	覆土
2	土師環	(14.0)	2.6		AB	A	明褐色	10%	覆土
3	須恵環		2.0		CD片	C	黄灰褐色	35%	カマド内Na1。末野産
4	須恵蓋	(19.0)	2.6		片	B	灰色	10%	覆土。末野産

である。出土遺物が乏しく、時期は不明確であるが、熊野Ⅱ～Ⅲ期と考えておきたい。

A区第98号住居跡 (第157図)

A区第98号住居跡は38-11グリッドに位置する。第32・33号溝跡によって覆土上層が削平されていた。

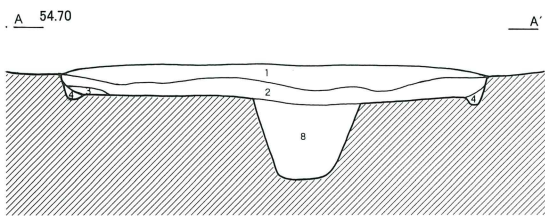
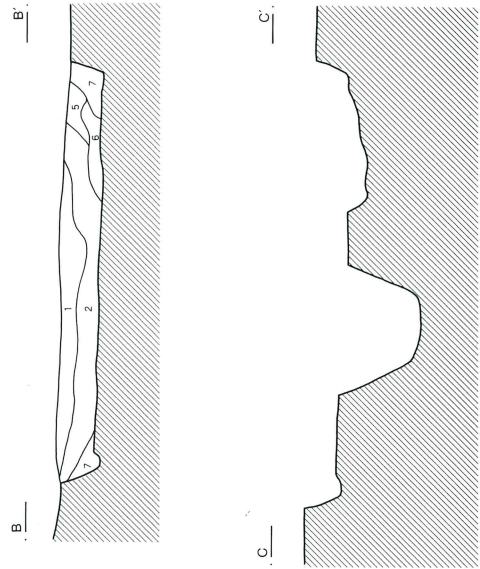
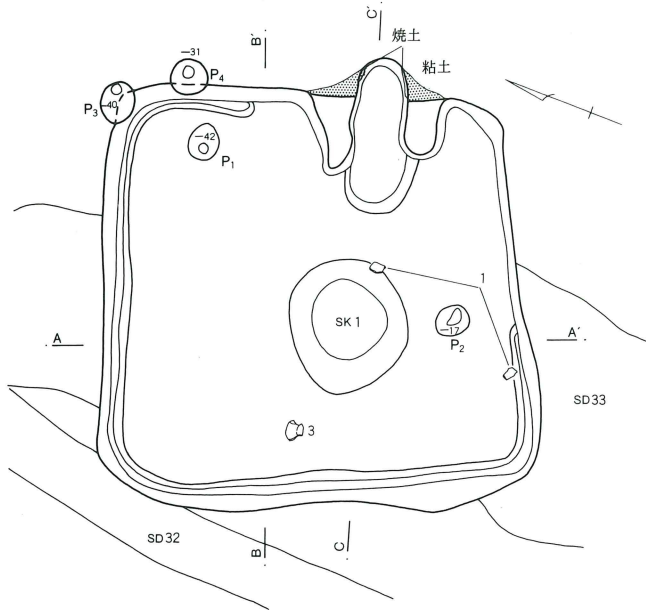
平面形は方形で、規模は長軸長3.48m、短軸長3.36

m、深さ0.30mである。主軸方位はN-68°-Eを指す。

床面は全体に凹凸が顕著で、カマドと第1号土壇を経て西壁に至るラインの周辺が非常に堅く踏み固められていた。他の部分、特に壁際は軟弱であった。

埋土は第1層が第33号溝跡覆土で、最上部に乗る。

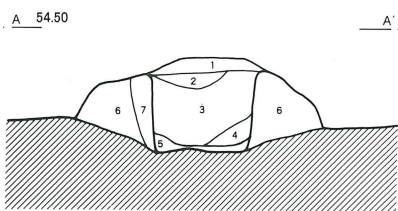
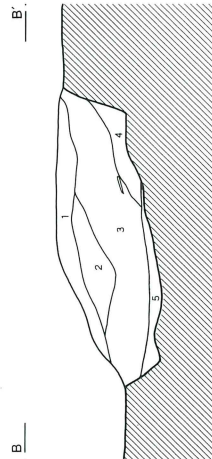
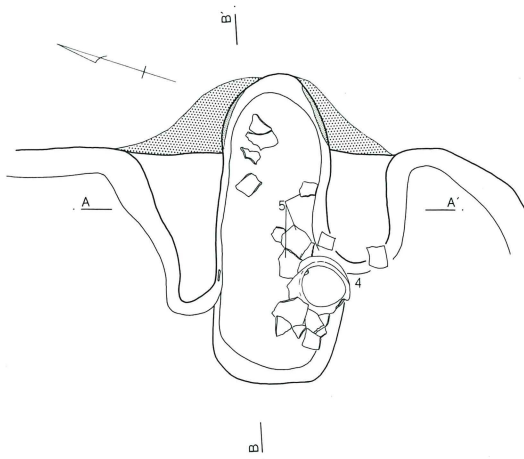
第157図 A区第98号住居跡



SJ 98

- 1 褐色土 ローム粒子・明灰色砂質土微量
- 2 褐色土 ロームブロック極少量
- 3 明褐色土 ローム粒子多量
- 4 褐色土 ローム粒子少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 褐色土 ローム小ブロック・焼土少量
- 7 明褐色土 ロームブロックやや多量
- 8 褐色土 ロームブロック混入

0 2 m
1:80

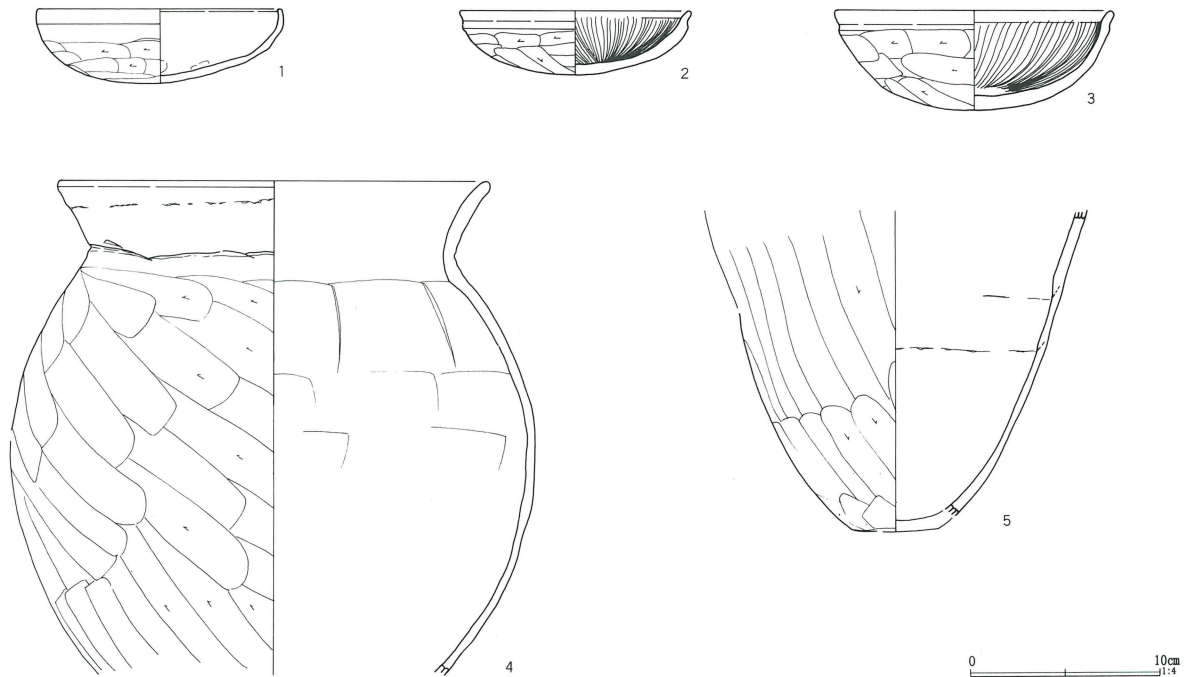


カマド

- 1 褐色土 微細なローム粒子やや多量
- 2 褐色土 微細な焼土粒子・ローム粒子多量
- 3 褐色土 微細な焼土粒子・ローム粒子・焼土ブロック多量
- 4 褐色土 大粒の焼土ブロック・ロームブロック・少量の炭化物混入
- 5 褐色土 微細なローム粒子・焼土粒子少量 灰・炭化物粒子含む
- 6 褐色土 微細なローム粒子混入。焼土粒子少量
- 7 褐色土 焼土粒子多量

0 1 m
1:30

第158図 A区第98号住居跡出土遺物



第75表 A区第98号住居跡出土遺物観察表 (第158図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.8	3.9		AB	A	明黄褐色	60%	No9・10. 覆土上層+下層
2	土師暗文坏	12.0	3.4		AB	A	茶褐色	50%	覆土。内面放射暗文
3	土師暗文坏	14.5	5.3		AB	A	明褐色	90%	No11. ほぼ床面。内面放射暗文。外面黒斑あり
4	土師壺	22.6	26.0		ABD	A	淡褐色	50%	カマド内No1. 内面下半風化
5	土師甕		17.0	(4.5)	AB	B	褐色	60%	カマド内No2・4他。外面煤附着

第2層以下が住居埋土で、ローム粒子を少量含む褐色土を基調としており、埋戻した形跡は認められなかった。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は壁を25cmほど切り込んでいる。底面は鍋底状に掘り込まれ、側壁上位は強く被熱していた。埋土は褐色粘質土を主体としており、第1～4層が天井部崩落土、第5層が灰層と考えられる。袖も褐色粘質土を積み上げて構築されていた。

ピットは住居内と壁に掛かって4本検出されたが、いずれも伴うものではない。土壌は1基、住居中央部から検出された(SK1)。埋土はロームブロックを霜降り状に含む褐色で、上面は貼床されていた。いわゆる床下土壌と考えられる。

壁溝はカマド周囲と南壁東半を除いて巡っていた。深さは5～10cm程度である。

出土遺物は少なく、土師器坏・暗文坏・甕・壺がある(第158図)。

1は丸底形態の北武蔵型坏。口縁部は内彎気味に立ち上がり、体部上位は無調整である。2・3は丸底形態の暗文坏。2は小型、3は相対的に大型品である。内面には放射暗文が中心から口縁に向かって施文される。3は見込部が磨滅しており、底部外面には黒斑がある。4はカマド焚口部付近から出土した土師器壺。球胴形態で底部を欠く。位置的に袖の芯に用いられたものではなかろう。5は甕胴部片でカマド内から出土した。長胴器形で胴部は縦方向のヘラケズリ調整。

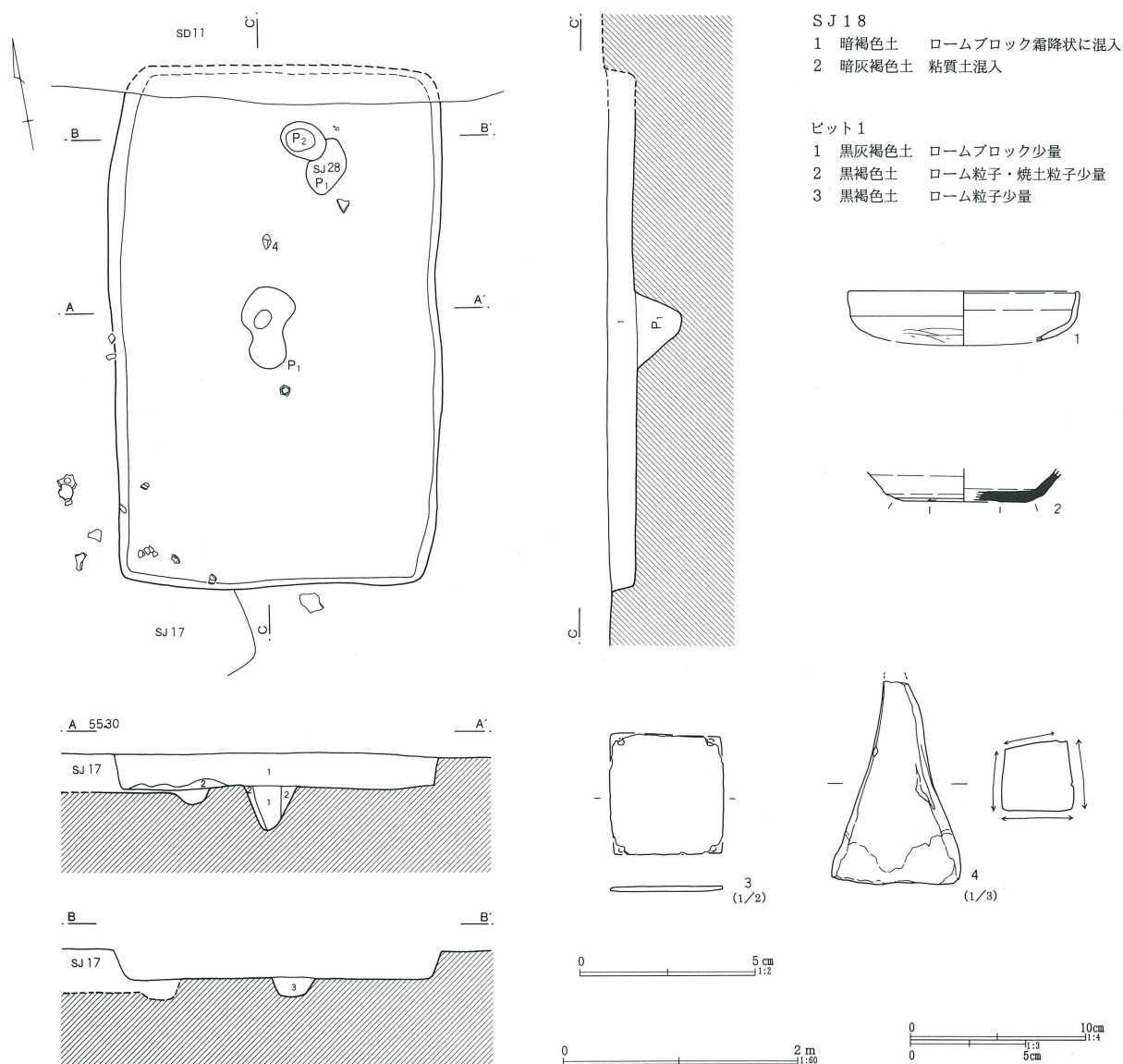
須恵器は坏底部片が1片出土したのみである(末野産)。住居の時期は土師器坏と丸底形態の暗文坏から、熊野Ⅱ期古相と考えられる。

2. 竪穴状遺構(中世)

古代の竪穴住居跡に混じって、中世段階のいわゆる竪穴状遺構(竪穴建物)が18軒検出された。調査段階では竪穴建物という共通性から古代の住居跡と同様住居跡番号(SJ)を付した。以下の説明も住居跡という用語を用いる。

A区第18号住居跡(第159図)

第159図 A区第18号住居跡・出土遺物



第76表 A区第18号住居跡出土遺物観察表(第159図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.0)	2.8		A B	B	褐色	15%	覆土
2	須恵坏		1.9	(7.0)	C 針	A	灰白色	20%	覆土。南比企産。底部B3b手法
3	巡方裏金								覆土。縦3.4cm。横3.2cm。厚さ0.2cm。周辺磨耗著しい
4	砥石								No.3。覆土上層。長さ8.6cm。最大幅5.6cm。重量198.1g。凝灰岩製

Eを指す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土単層で、完全な埋め戻し土と見て良い。北壁際のPit 2付近の床面に褐色粘質土がブロック状に残る部分があり、あるいは出入口部に関係する施設になるかもしれない。

ピットは2本検出された。Pit 1の帰属は不明確、Pit 2は住居跡に伴うものと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、土師器杯、須恵器杯、青銅製帯金具巡方、砥石がある(第159図)。砥石の帰属は不明確であるが、他はいずれも古代の遺物で、本住居跡に帰属するものではない。3は巡方裏金で、四隅に小孔が穿たれている。黒漆が付着する。時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

A区第19号住居跡(第160図)

A区第19号住居跡は45-8グリッドに位置し、第17・21号住居跡、第11号溝跡に切られていた。

平面形は方形と推定され、残存規模は長軸長2.60m、短軸長1.74m、深さは0.05mと非常に浅い。主軸方位はN-11°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、非常に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを霜降り状に混在する黒褐色土で、人為的に埋め戻された可能性が高い。

ピットは3本検出された。Pit 1は住居に伴うものと思われる。北壁際の中央部にあり、やや斜めに掘り込まれていた。Pit 2・3は平面形方形の小ピットで、帰属は不明確であるが伴う可能性もある。

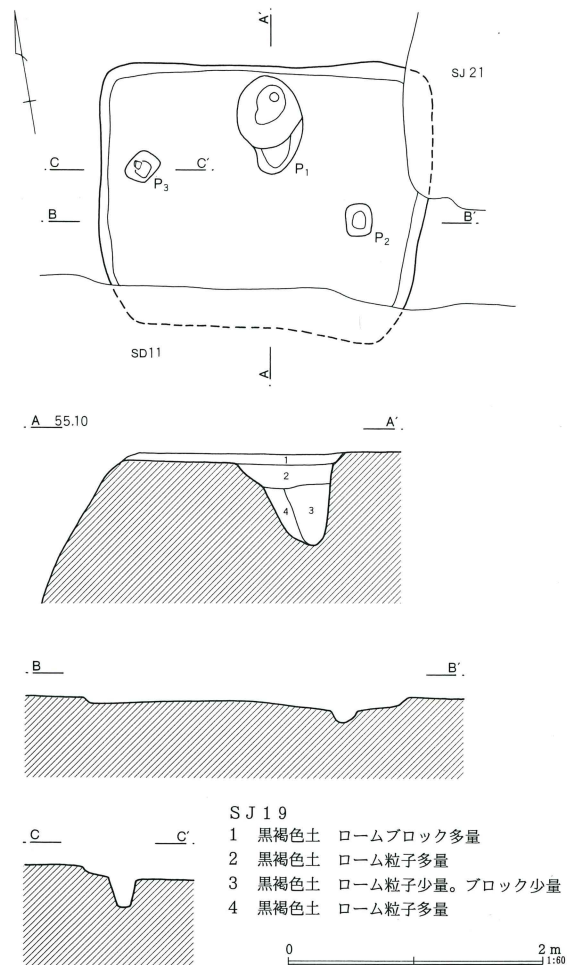
出土遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土しているが、図化可能な遺物はない。時期は中世と考えられるが、それ以上の限定はできない。

A区第21号住居跡(第161図)

A区第21号住居跡は45-8グリッドに位置する。第19号住居跡、第22~24号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.12m、短軸長2.55m、深さ0.30mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

第160図 A区第19号住居跡



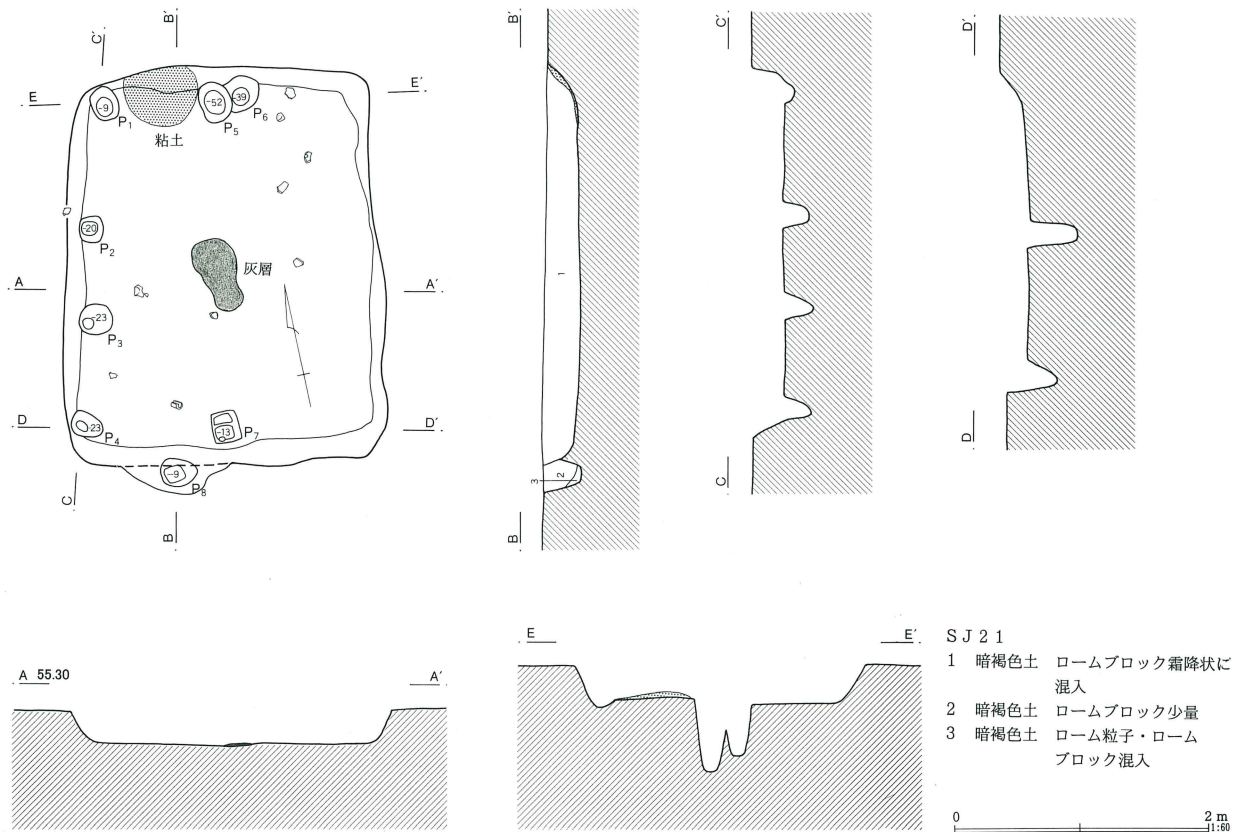
床面は壁際が僅かに高く中央部に向かって傾斜している。全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは緩やかで床面との境が不明瞭な部分もある。埋土はロームブロックを霜降り状に含む暗褐色土単層で、人為的に埋め戻された可能性が高い。

ピットは8本検出された。Pit 1~4は西壁際に並び、壁柱穴と考えられる。北壁中央にはPit 5・6が、南壁際にPit 7・8があり、それぞれ対ピットとして対応する可能性が高い。

北壁西寄りには壁から床面に掛けて灰褐色の粘質土が貼り込んであった。非常に堅く踏み固められており、断面観察からは薄い縞状の堆積が認められ、数度にわたって張り直した可能性も想定される。出入口部に関連する施設と見ることもできよう。

床面の中央部には、長径60cmほどで、楕円形の広がりをもつ灰層が形成されていた。この灰層には、

第161図 A区第21号住居跡



灰と炭化物は多いが、焼土は少ない。また、床面の被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物は土師器・須恵器片が検出されている。量的には少なく、いずれも混入である。時期は中世と考えられる。

A区第25号住居跡 (第162図)

A区第25号住居跡は44-8・9グリッドに位置する。第82・94・95号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も新しい。また、東側には第29・92号住居跡(竪穴状遺構)が主軸を揃えて隣接する。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.60m、短軸長2.52m、深さ0.25mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がり角度はやや緩い。埋土はロームブロックを多量に混在する暗褐色土が基調となり(第2層)、人為的に埋め戻された可能性が高い。

ピットは4本検出された。Pit 1・2とPit 4は南

北壁の中央に位置し、それぞれ対応する支柱穴と考えられる。Pit 1は明らかに斜めに掘り込まれ(斜行ピット)、柱も斜行していた可能性がある。ピット3は上面が浅く掘り込まれた中にあり、性格は不明である。

出土遺物は土師器・須恵器片が少量検出されているが、凶化可能な遺物は、不明鉄製品が1点あるのみである(第162図)。1は不明鉄製品。板状で左端が広くなる。残長3.9cm、幅1.5cm。北壁際から出土した。註記No.2。

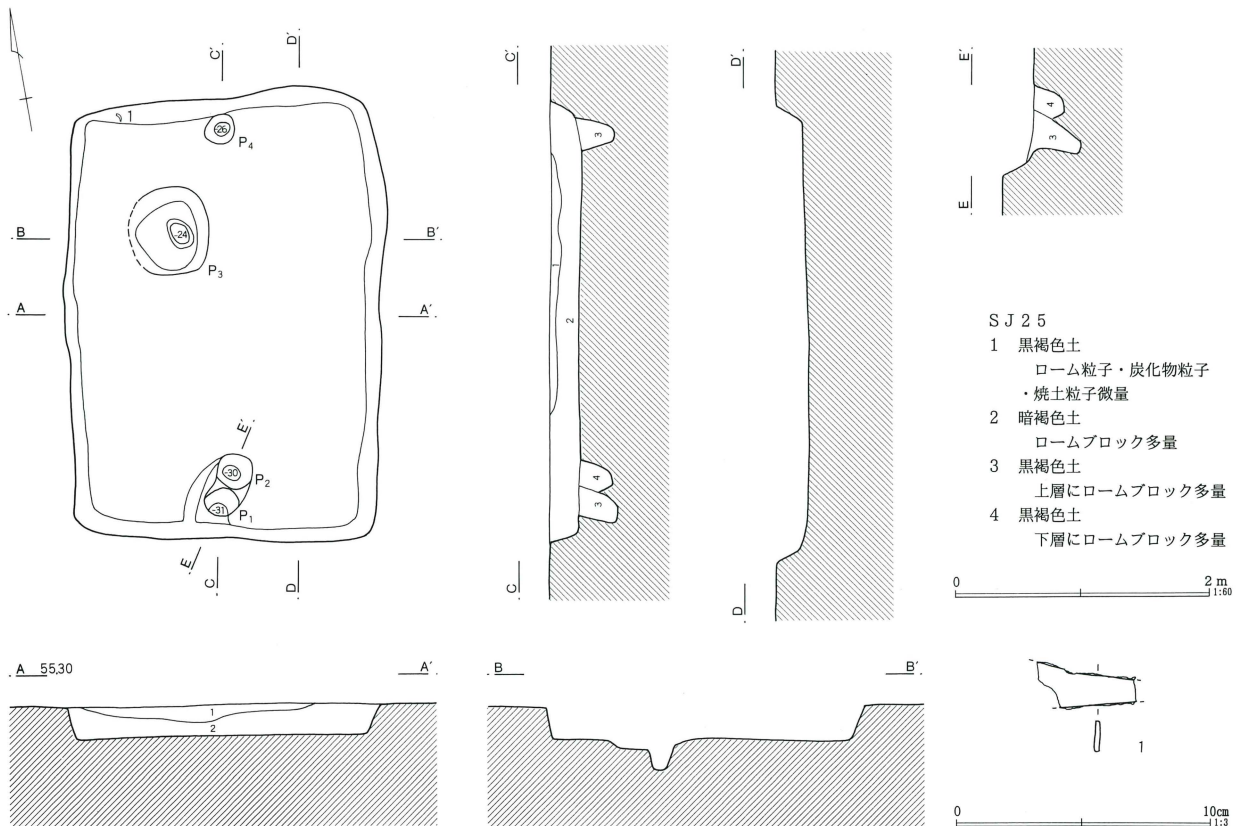
時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

A区第26号住居跡 (第163図)

A区第26号住居跡は43-8・9、44-8グリッドに位置する。第80号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい。また、第44号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は明確にできなかった。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.60m、短軸長2.76m、深さ0.37mである。主軸方位はN-14°-

第162図 A区第25号住居跡・出土遺物



Eを指す。

床面は凹凸をもつが、全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは全体に緩やかである。埋土はロームブロックを極めて多量に含む黒褐色土単層で、明らかに埋め戻された様相が認められた。

ピットは5本検出された。Pit 1・4は主軸線にほぼ沿い、支柱穴となる可能性がある。Pit 1は斜めに掘り込まれた斜行ピットである。Pit 2・3・5は東壁際に並ぶ壁柱穴と考えられる。東壁中央部には暗黄褐色と暗褐色土からなるステップ状の高まりが検出された。非常に堅く締まっており、出入り口部に関係する施設かとも推定される。

出土遺物は少なく、須恵器杯・長頸瓶・高盤がある(第163図)。いずれも混入である。1・2は須恵器杯で底部は回転糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ調整。3は長頸瓶。4は須恵器高盤。脚部は3方透かしが付く。末野産。時期は中世と考えられるが、遺構に伴う遺物がなくそれ以上の限定はできない。

A区第27号住居跡(第164図)

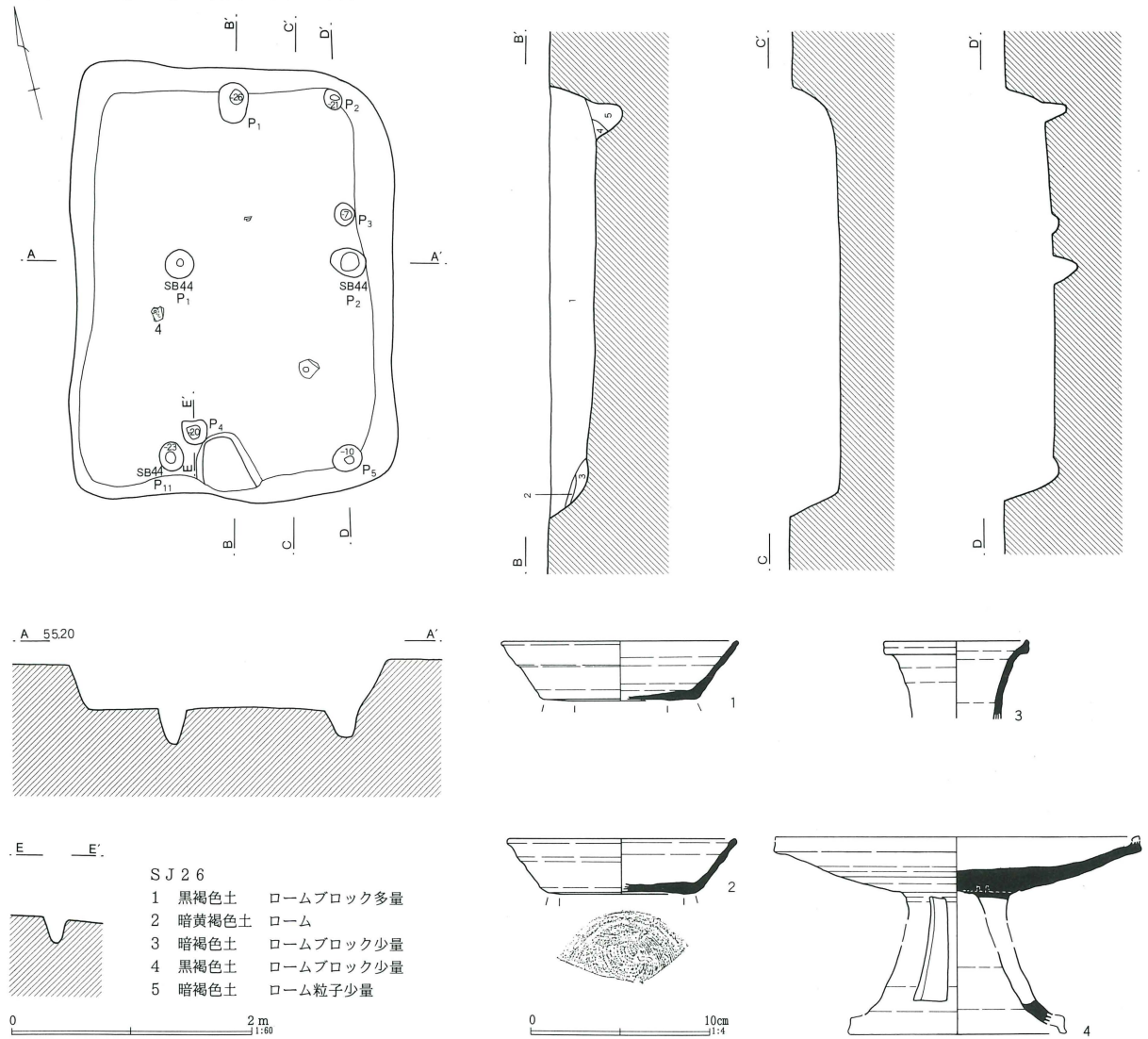
A区第27号住居跡は43-9グリッドに位置する。第25号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい。また、北西コーナー部は第82号住居跡と接していた。

平面形はやや歪みをもつ長方形で、規模は長軸長4.20m、短軸長3.09m、深さ0.58mである。主軸方位はN-105°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で全体に非常に堅く踏み固められていた。壁は垂直近い角度で立ち上がる。埋土はロームブロックを多量に混在する暗褐色から黒褐色土で、明らかに埋め戻されたものと考えられる。

ピットは主軸線上に3本検出された。Pit 1・3は重複し、Pit 1が機能した段階にはPit 3は埋められていた。Pit 2は西壁際にあり、瓢箪状に連結しており、2基重複の可能性もあるが、断面観察からは明瞭に捉えられなかった。いずれにせよ、Pit 1・3とPit 2は共に支柱穴を構成するものと見て良い。

第163図 A区第26号住居跡・出土遺物



第77表 A区第26号住居跡出土遺物観察表 (第163図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵環	(13.2)	3.3	(8.6)	D片	B	灰褐色	10%	覆土。未野産。底部B3b手法
2	須恵環	(12.6)	3.1	(8.2)	C片	A	暗青灰色	20%	覆土。未野産。底部B3b手法
3	須恵長頸瓶	(8.0)	4.3		C針?	A	灰色	30%	覆土。産地不明。南比企産か
4	須恵高盤		(11.0)		C片	C	灰褐色	35%	Na1。覆土下層。未野産

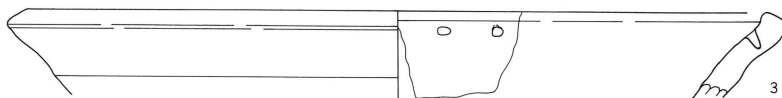
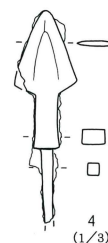
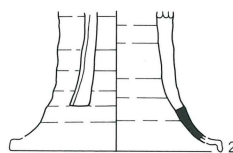
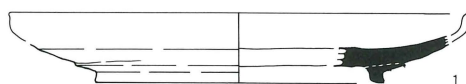
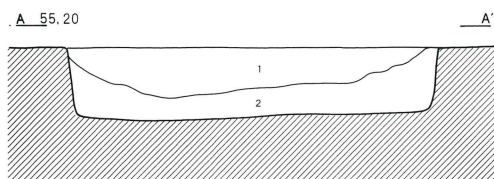
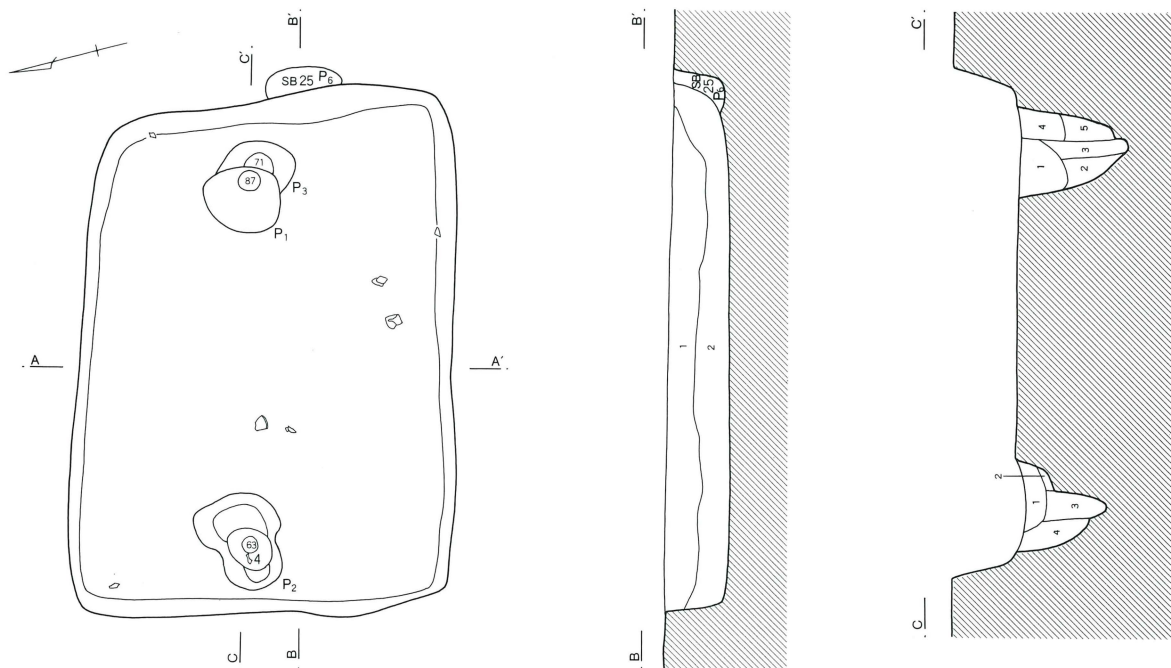
出土遺物は須恵器高台付盤・高盤、在地産鉢、鉄鋏がある(第164図)。1の高台付盤は口縁部を欠き、底部は回転ヘラケズリ。2の高盤は脚部片で3方に透かしが入る。いずれも未野産で混入である。3の在地産鉢は口縁部の小片で、内面に小孔が平行して2個穿たれている。いずれも貫通しない。確認面直下の覆土から出土した。4は鉄鋏。菱形に近い刃部で、平造り。Pit 2上で、床面より僅かに浮いた位置から出土した。

時期は中世で、在地産鉢から15世紀頃と考えられる。

A区第29号住居跡 (第165図)

A区第29号住居跡は44-9グリッドに位置する。第34号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。第92号住居跡は本住居内に納まる形で重複しており、92号住居跡から本住居跡に建て替えたものと考えられる。また、西側に25号住居跡、東側に30号住居跡がほぼ南壁を揃えるように隣接している。

第164図 A区第27号住居跡・出土遺物



SJ 27

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- ビット
- 1 明褐色土 ローム粒子少量。黒色土混入
- 2 黒色土 焼土粒子微量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量。しまりなし
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量

0 2m

0 10cm
1:3
5cm

第78表 A区第27号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

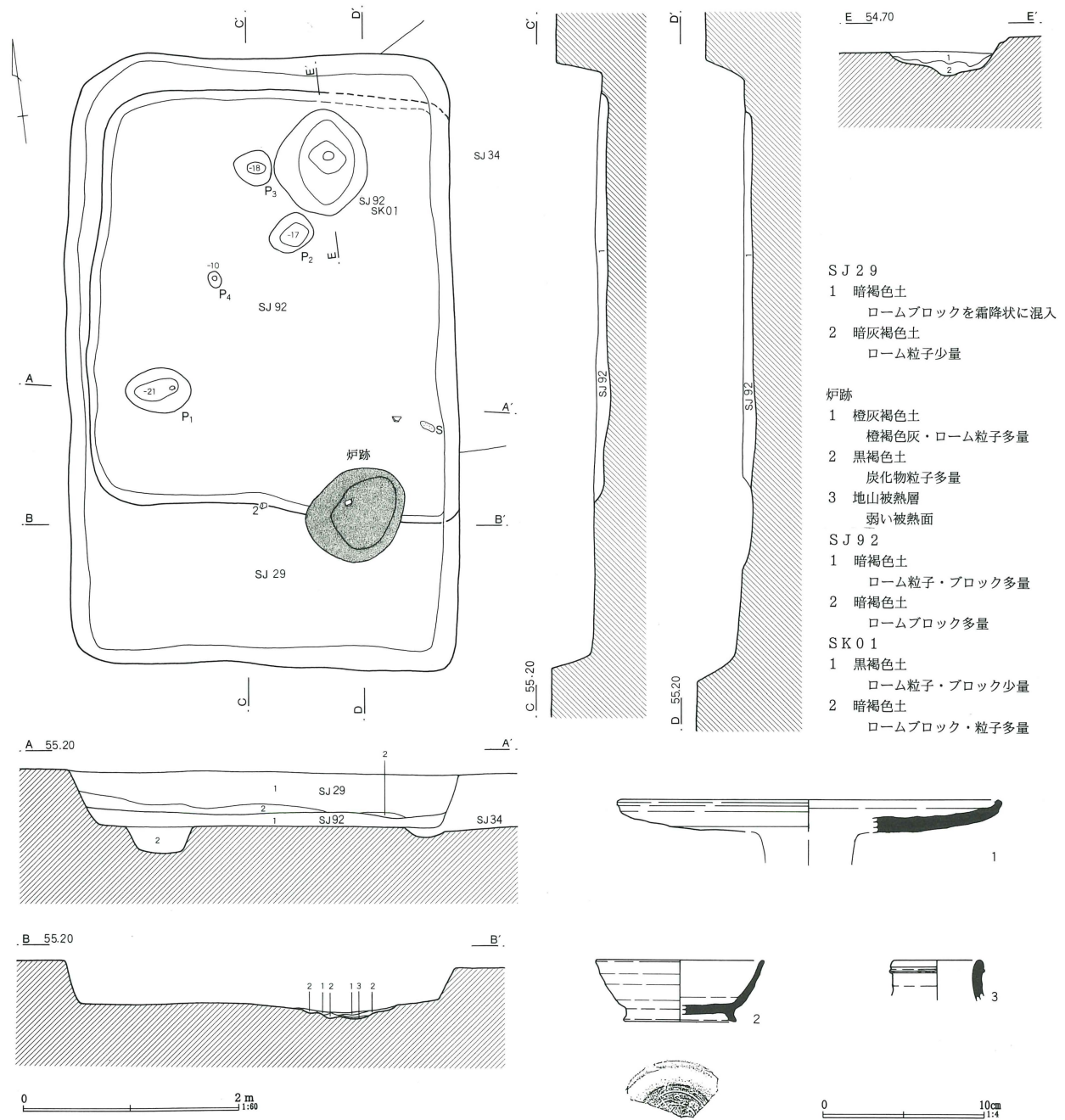
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵高台盤		2.5	(15.0)	C片	B	黄灰色	10%	覆土。末野産。底部3a手法
2	須恵高盤		6.8		B片	B	暗灰色	35%	覆土。末野産。3方透し
3	土師鉢	(39.0)	4.6		BDG	B	黒灰色	5%	覆土。口縁下に貫通しない小孔2個穿たれる
4	鉄鏃	No.2。覆土下層。残長8.9cm。平造闊筈被菱形(三角形)形式鏃							

平面形は長方形で、規模は長軸長5.70m、短軸長3.66m、深さ0.40mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

床面は第92号住居跡を埋めて作り出し、灰層の西

側周辺は非常に堅く踏み固められていた。埋土は暗灰褐色土が堆積した後に、ロームブロック混じりの暗褐色土が厚く堆積していた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

第165図 A区第29・92号住居跡・出土遺物



第79表 A区第29号住居跡出土遺物観察表 (第165図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵高盤	23.6	2.0		BCE片	B	黄灰色	15%	末野産
2	須恵高台坏	(10.4)	3.8	(6.8)	BC針	A	灰色	30%	No2. 覆土下層。南比企産。底部3a手法
3	須恵小型壺	(5.4)	2.5		BC	B	褐色	15%	末野産

ピットは検出されなかった。南東コーナーによつた床面には、直径95cm前後の円形に炉跡状の灰層が形成されていた。底面は部分的に弱く被熱しており、その上部に炭化物層と橙褐色の灰が堆積していた。出土遺物は須恵器高盤・高台坏・小型壺がある

(第165図)。1は高盤で脚部を欠く。坏部下位は回転ヘラケズリ。2は小型の高台坏。底部は回転ヘラケズリ。3は小型壺と思われる。いずれも混入資料で、住居跡に伴う遺物は検出されなかった。時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

A区第30号住居跡（第166図）

A区第30号住居跡は44-9グリッドに位置する。第34号住居跡、第6号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.48m、短軸長2.70m、深さ0.30mである。主軸方位はN-102°-Eを指す。

床面は中央部がやや深く、壁際が浅い傾向にある。凹凸があるが、全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは概して緩やかである。埋土はロームブロックを霜降り状に含む暗褐色土が厚く堆積し、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットは住居主軸線上の壁際に各1本、計2本検出された。Pit 1は若干斜行気味に掘り込まれていた。Pit 2は垂直に掘り込まれるが、柱穴の壁際に凝灰岩の円礫が据えられていた。また、Pit 2周囲の床面は灰褐色粘質土が薄く堆積し、特に堅く踏み固められた状況が観察された。出入り口に関連しようか。

住居中央から東寄りの床面には、浅い炉跡状の掘り込みが検出された。底面は橙色に弱く被熱してお

り、その上部に炭化物粒子混じりの橙灰色灰層が広がっていた。

出土遺物は極めて少なく、須恵器杯が1点ほぼ床面から検出された(第166図)。明らかな混入である。1は須恵器杯。推定口径11.7cm、器高3.4cm、底径5.5cm。胎土に石英と白色粒子、片岩を含む。焼成は良好で青灰色に焼き上がる。約50%残。註記No.5。末野産で、底部は回転糸切り後無調整である。

時期は中世であるが、伴う遺物がなくそれ以上の限定はできない。

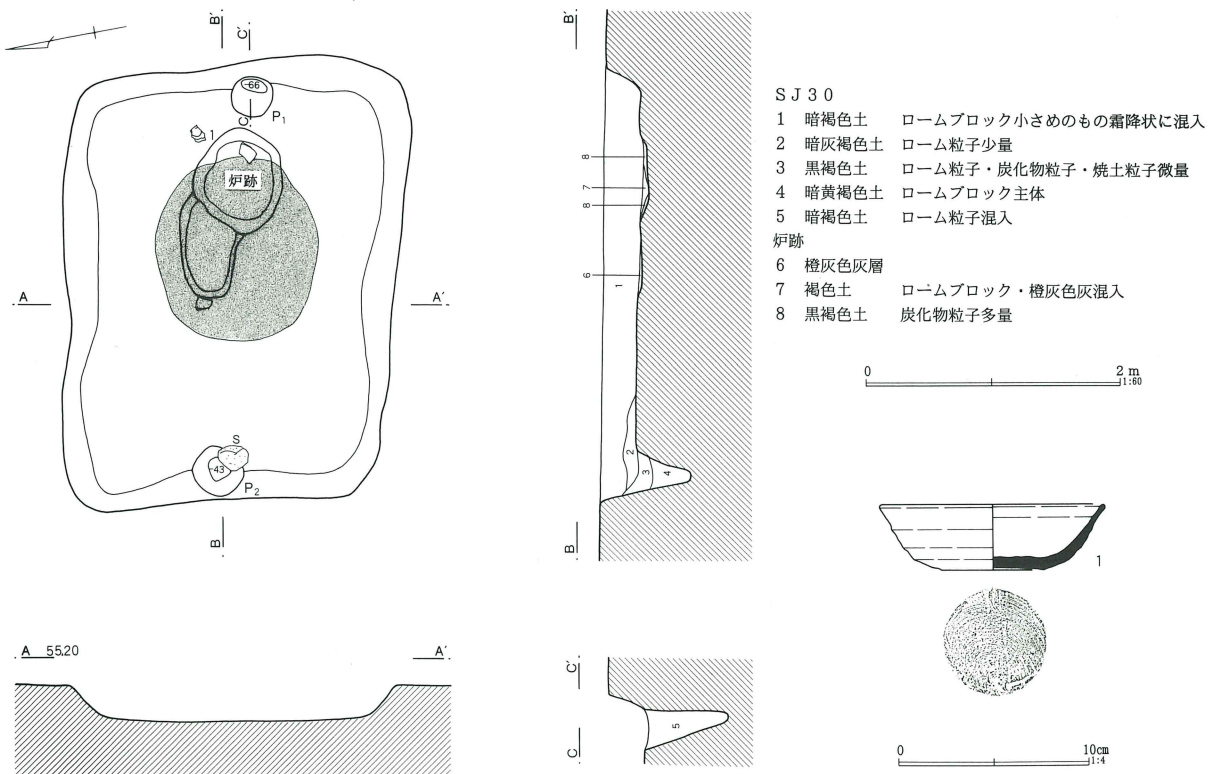
A区第33号住居跡（第167図）

A区第33号住居跡は44-9グリッドに位置する。第34・35号住居跡、第140号土壌と重複し、本住居跡が最も新しい。

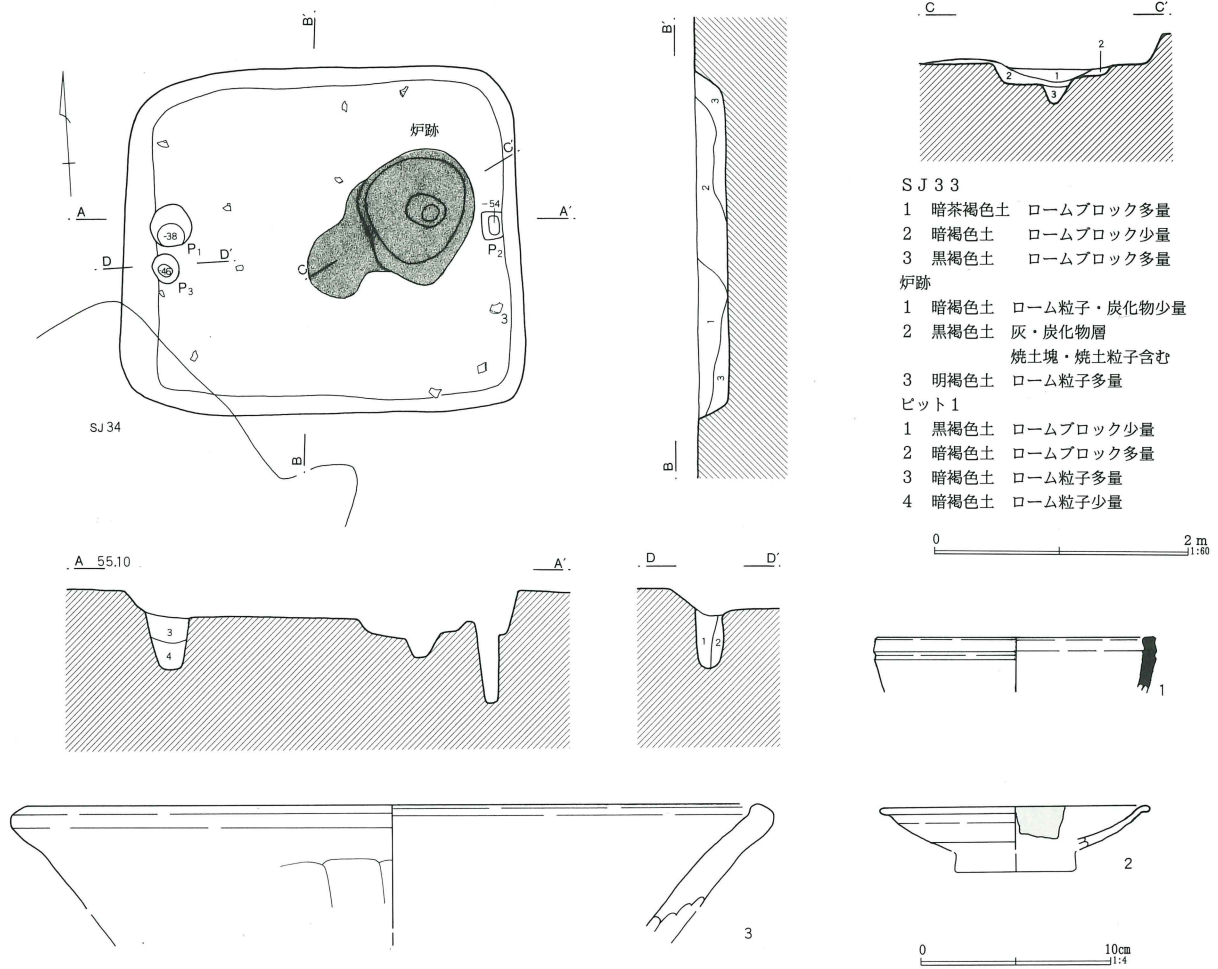
平面形は長方形で、規模は長軸長3.12m、短軸長2.70m、深さ0.24mである。主軸方位はN-92°-Eを指す。

床面は凹凸があるが、全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは概して緩やかである。埋土は第1・3層にロームブロックが多量に含まれてい

第166図 A区第30号住居跡・出土遺物



第167図 A区第33号住居跡・出土遺物



第80表 A区第33号住居跡出土遺物観察表 (第167図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵磨鉢?	(14.6)	2.9		BCE	A	白色	10%	覆土。末野産
2	灰釉陶器皿	(13.9)	2.2		B	A	灰白色	5%	覆土。体部外面下半ケズリ 内面のみ施釉
3	土師質鉢	(38.6)	6.4		ACDE	B	褐色	5%	No.3。覆土上層。器面風化。S K35と同一個体か

たが、第2層には少なく埋戻しされたものか否か不明確である。

ピットは主軸線に沿うように、東壁際から1本(Pit 2)、西壁際から2本(Pit 1・3)、計3本検出された。住居の主柱穴と考えられる。

炉跡状の掘り込みは主軸線上の東壁に寄った位置にある。長径108cm、短径90cm、楕円形を呈し15cmほど掘り込まれる。底面の中央は更にピット状に窪んでいる。炉跡とその西側の床面には焼土・炭化物混じりの灰層が薄く堆積していた。但し、底面の被熱は認められなかった。

出土遺物は須恵器磨鉢、灰釉陶器皿、在地産土師

質鉢がある(第167図)。1は磨鉢と思われる。口唇部に面をもち、外面に沈線が巡る。2は口唇部が小さく外反する灰釉陶器皿で、体部下位は回転ヘラケズリ調整される。灰釉は淡い緑色に発色し厚く掛かる。内面のみ刷毛塗りされている。全体に丁寧なつくりで、焼きも良い。胎土はきめ細かいが、若干白色粒子や砂粒を含む。猿投産というよりも二川産の可能性はある。K-14号窯式新段階に平行する可能性がある。1・2は混入である。3は在地産の鉢。風化が進んでおり、器表面が剥落している。胴部外面はヘラナデか。A区第35号土壇出土の鉢と胎土・色調が酷似しておりおそらく同一個体と思われる。覆土

上層出土。

時期は在地産の鉢から、13世紀後半～14世紀代と推定される。

A区第37号住居跡（第168図）

A区第37号住居跡は44・45-10グリッドに位置する。重複する第6号掘立柱建物跡、第56・57・67号土壇を切っていた。第13号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。第56・57号土壇は遺跡内にかなり多く分布する超長方形土壇であるが、その覆土上に床面と炉跡状の灰層が形成されており、超長方形土壇の年代が近世以降には降らないことが本住居跡との関係で確認された。

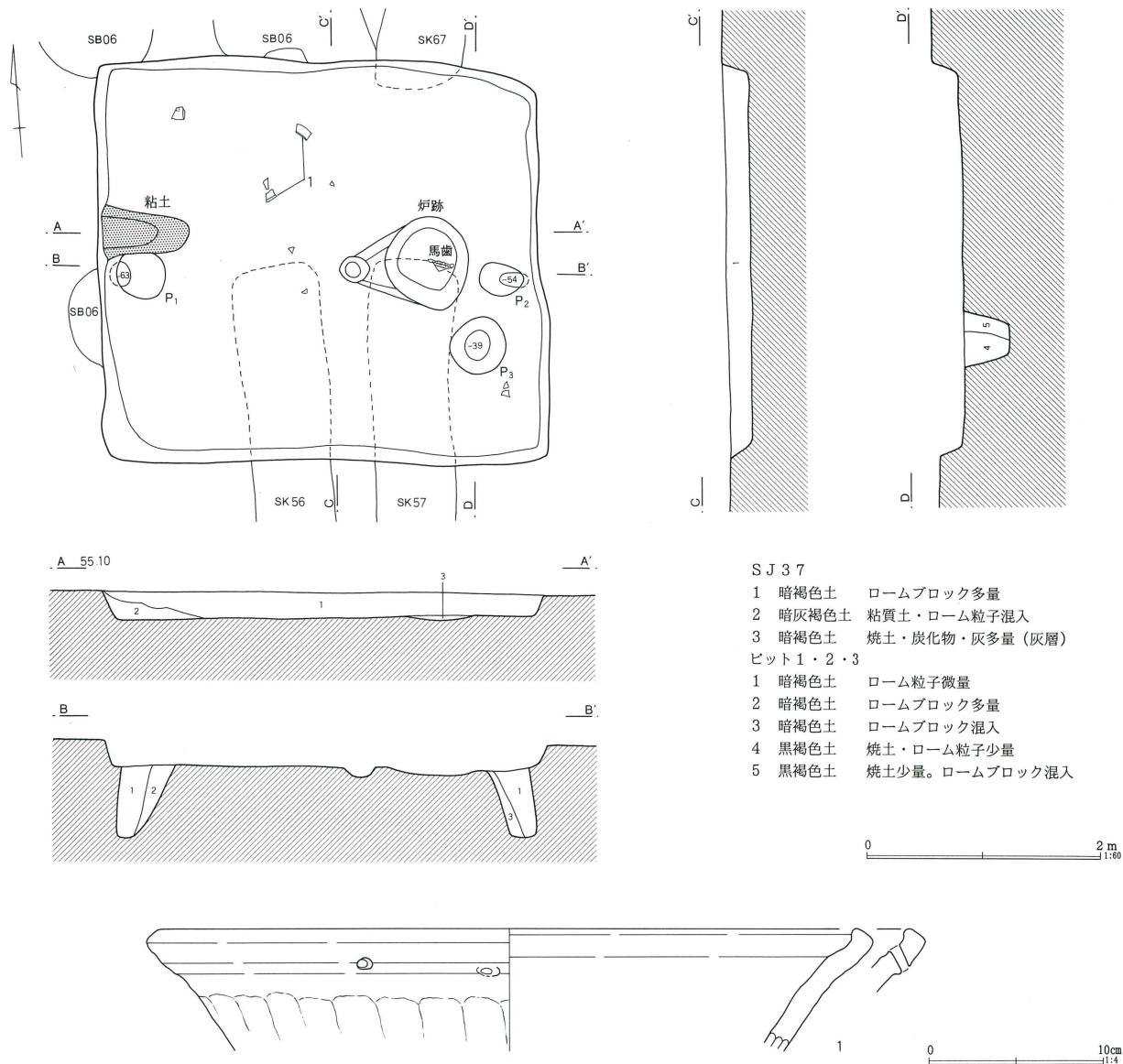
平面形は方形で、規模は長軸長3.90m、短軸長3.48m、深さ0.25mである。主軸方位はN-94°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土単層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットは3本検出された。Pit 1・2は住居主軸線に沿うようにそれぞれ西壁際と東壁際に配置され、主柱穴と考えられる。いずれも垂直ではなく意識的に斜向して掘られていた（斜向ピット）。

炉跡状の遺構はPit 1とPit 2を結ぶライン上の東壁寄りに位置する。瓢箪形に床面を浅く掘り窪め、

第168図 A区第37号住居跡・出土遺物



焼土と炭化物混じりの灰層が覆っていた。底面は極弱く被熱していた。

また、Pit 1の北側には、壁から床面にかけて灰褐色粘土がステップ状に遺存していた。非常に堅く締まっており、住居埋土との識別は容易であった。出入口に関連する施設と見ることもできよう。

出土遺物は極めて少なく、在地産の盤が床面から検出された(第168図1)。それ以外には、炉跡の上部約20cmの位置から馬の歯が出土している。1は土師質の盤。推定口径40.0cm、残存高7.0cm。素地土は比較的細かく、胎土に赤色粒子・雲母状微粒子を含む。焼成は良好で、褐色に焼き上がる。約20%残存。口縁部は端部が内面に突出し、その下部が抉れている。また、口縁部には直径0.6cm程の小孔が2個貫通している。口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラナデ調整されている。

時期は、出土した在地産の盤から14世紀前半頃と推定される。

A区第38号住居跡(第169図)

A区第38号住居跡は45-10グリッドに位置する。北側に第37号住居跡がほぼ軸を揃えて隣接する。第6号掘立柱建物跡と重複し本住居跡の方が新しい。南壁部に重複する第39・47・52号土壌は平面及び断面観察によっても本住居跡を切っていることが判明し、超長方形土壌と竪穴状遺構との新旧関係は、第37号住居跡で得られた結果と逆になる。土壌群は竪穴状遺構と相前後してつくられたものと見ることできる。

平面形は方形と推定され、規模は長軸長3.48m、短軸長3.12m、深さ0.55mである。主軸方位はN-97°-Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土はロームブロック混じりの明褐色土と暗褐色土で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットは5本あり、北壁際から3本、南壁際から2本検出された。南東コーナーにも存在した可能性

もあるが、土壌に切られており不明である。北壁のピット3本は斜めに掘り込まれた斜向ピットで、南壁際のそれは垂直に掘り込まれていた。

東壁南部には、壁から床面に掛けて灰褐色の粘質土が堆積していた。非常に堅く踏み固められており、出入口のステップとなる可能性がある。床面の灰層は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、須恵器長頸瓶と坏がある(第169図)。1・3は同一個体か。胎土が精選され、硬質な焼き上がりである。湖西産と推定される。2は末野産の坏。底部は回転糸切り後無調整。1～3は全て混入資料である。時期は中世であるが、それ以上の限定は難しい。

A区第50号住居跡(第170図)

A区第50号住居跡は45・46-10グリッドに位置する。重複する第48・61・62号住居跡を切り、第46・65号土壌、第11号溝跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.02m、短軸長2.52m、深さ0.60mである。主軸方位はN-110°-Eを指す。

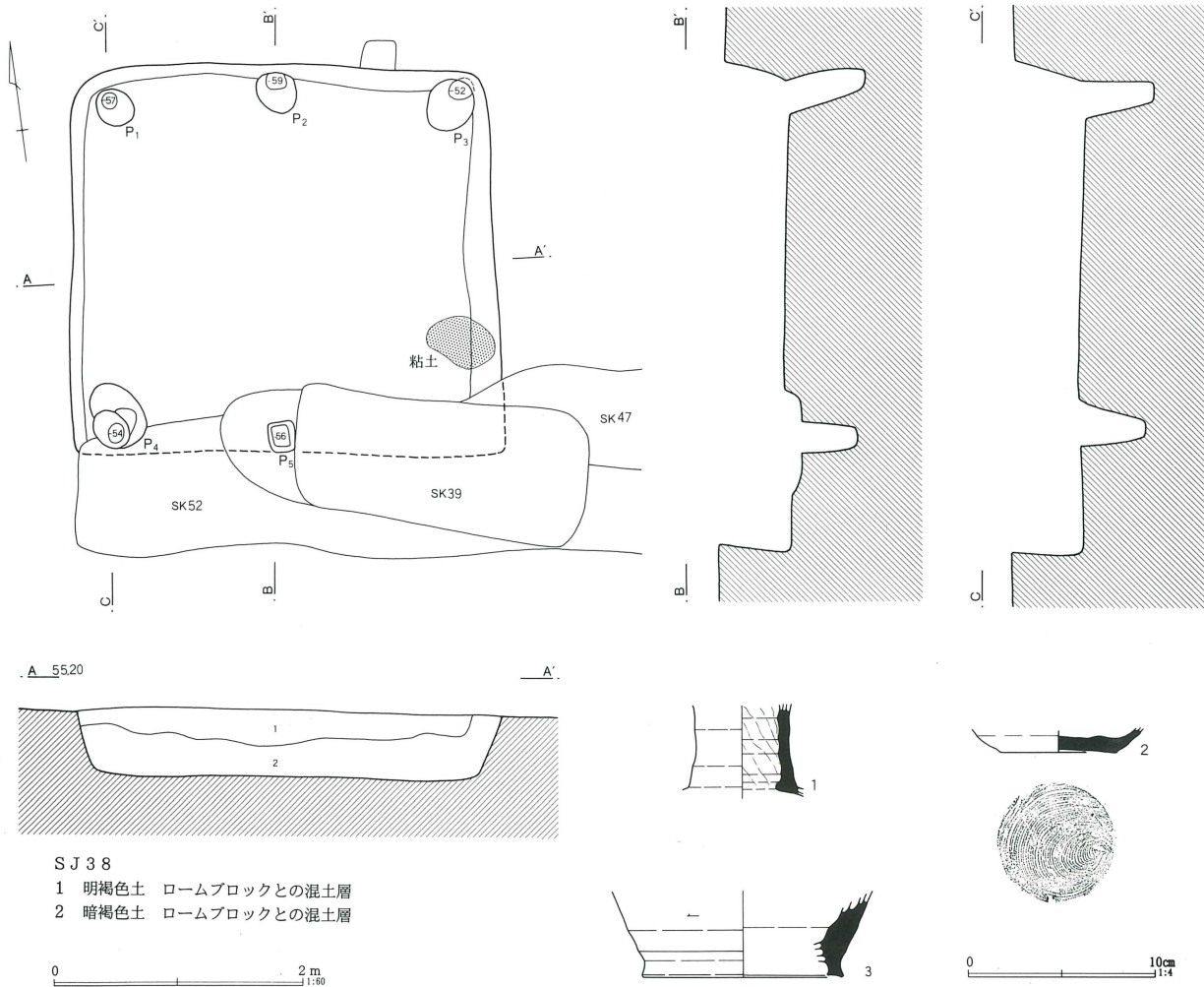
床面は中央部に向かって弱く傾斜しており、全体に堅く踏み固められていた。壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は第8層上面が堅く締まっており、黒色土が薄く堆積していた。住居を埋戻し、再度床面を貼り直して使用した可能性がある。西壁直下から出土した片岩系の板石は二次床面にほぼ対応する位置にある。

ピットは2本検出された。Pit 1は東壁際にある斜向ピットで住居に伴うものである。対応する西壁部にはピットは検出されなかった。Pit 2は上面に貼床があり、直接本住居跡に伴うものではなからう。

灰層は北壁寄りの床面に形成されていた。特に掘り込みは検出されなかった。また、Pit 2上面がやや窪んでおり、灰層が覆っていた。

出土遺物は少なく、土師器坏・内黒碗・小皿、須恵器坏・高台碗・鉢、灰釉陶器長頸瓶・段皿がある(第170図)。1は須恵器坏で、底部は回転糸切り。

第169図 A区第38号住居跡・出土遺物



SJ38
 1 明褐色土 ロームブロックとの混土層
 2 暗褐色土 ロームブロックとの混土層

第81表 A区第38号住居跡出土遺物観察表（第169図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵長頸瓶		4.9		BF	A	灰色	25%	覆土。湖西産。内面絞り目
2	須恵杯		1.3	6.2	BC片	B	褐色	90%	覆土。末野産
3	須恵長頸瓶		4.6	(10.6)	BF	A	紫灰色	10%	覆土。湖西産。やや大粒の白色鉱物若干含む

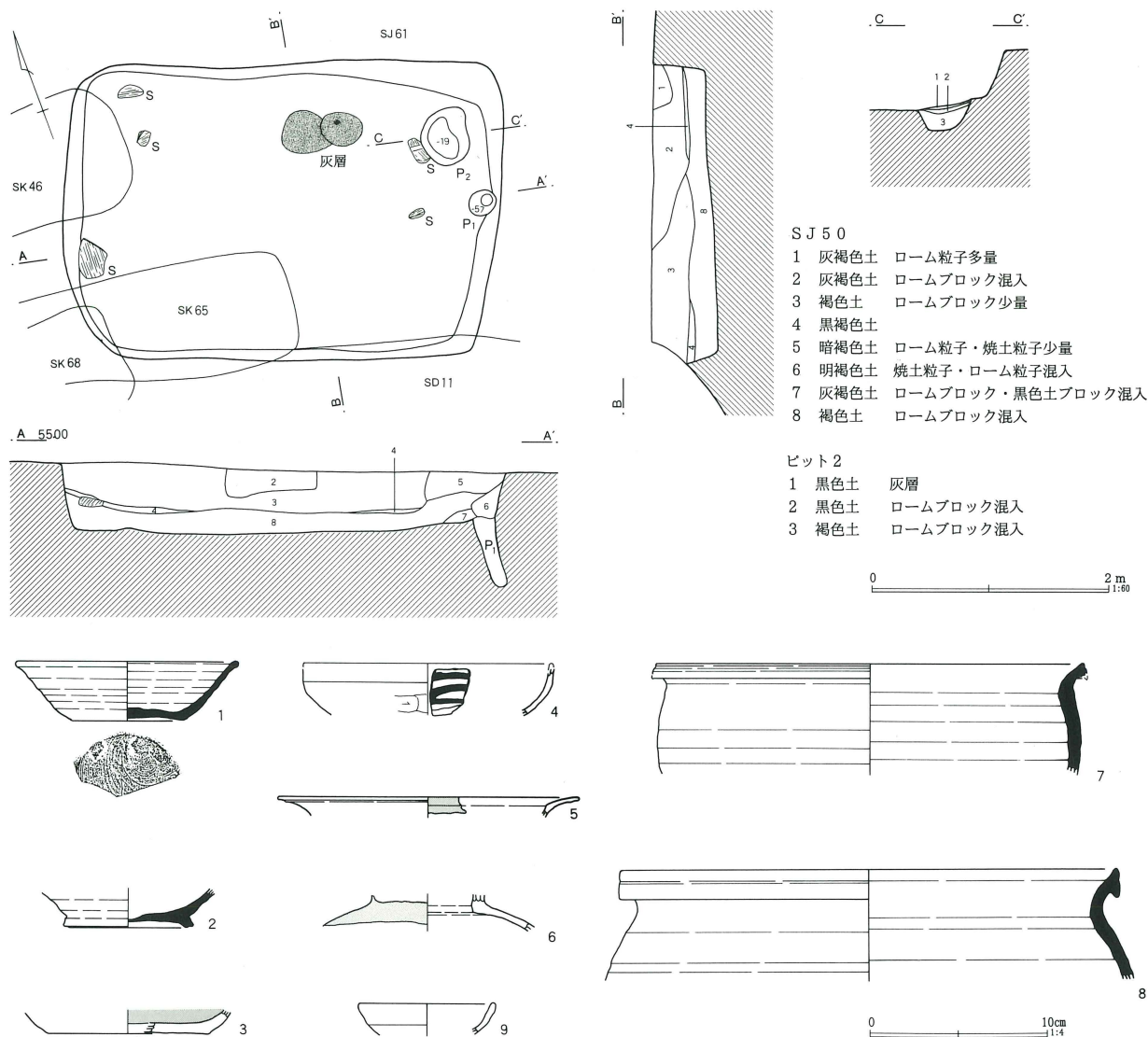
2は高台碗。3は無台の内黒碗。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。底部は平底で丁寧なミガキ、体部は調整不明瞭ながらミガキが加わっているかもしれない。4は土師器坏で、内面に墨痕がある。字は不明であるが、「川」に似る。5は灰釉陶器段皿。内面のみ薄い黄緑色の灰釉が刷毛塗りされる。外面は無釉である。猿投～三河産（非東濃）であろう。K-90号窯式段階と考えられる。6は灰釉陶器長頸瓶。外面薄い黄緑色の灰釉が掛かる。胎土は精選され内面に黒色粒子が吹き出す。猿投産か。第39・54号住居跡、第11号溝跡に同一個体かと思われる破片があ

る。7・8は須恵器鉢。末野産である。9は土師質の小皿か。非ロクロ整形で、胎土は在地の土師器と酷似する。推定口径7.6cmと非常に小型である。口縁部はヨコナデ、体部はナデまたは無調整である。1～8は古代の土器で混入である。住居の時期は中世であるが、9の小皿の時期が問題となる。非ロクロ（手づくね）整形であり、13世紀代に納めておくべきか。

A区第67号住居跡（第171図）

A区第67号住居跡は44・45-10・11グリッドに位置する。北側に68・69号住居跡が雁行形に重複し、

第170図 A区第50号住居跡・出土遺物



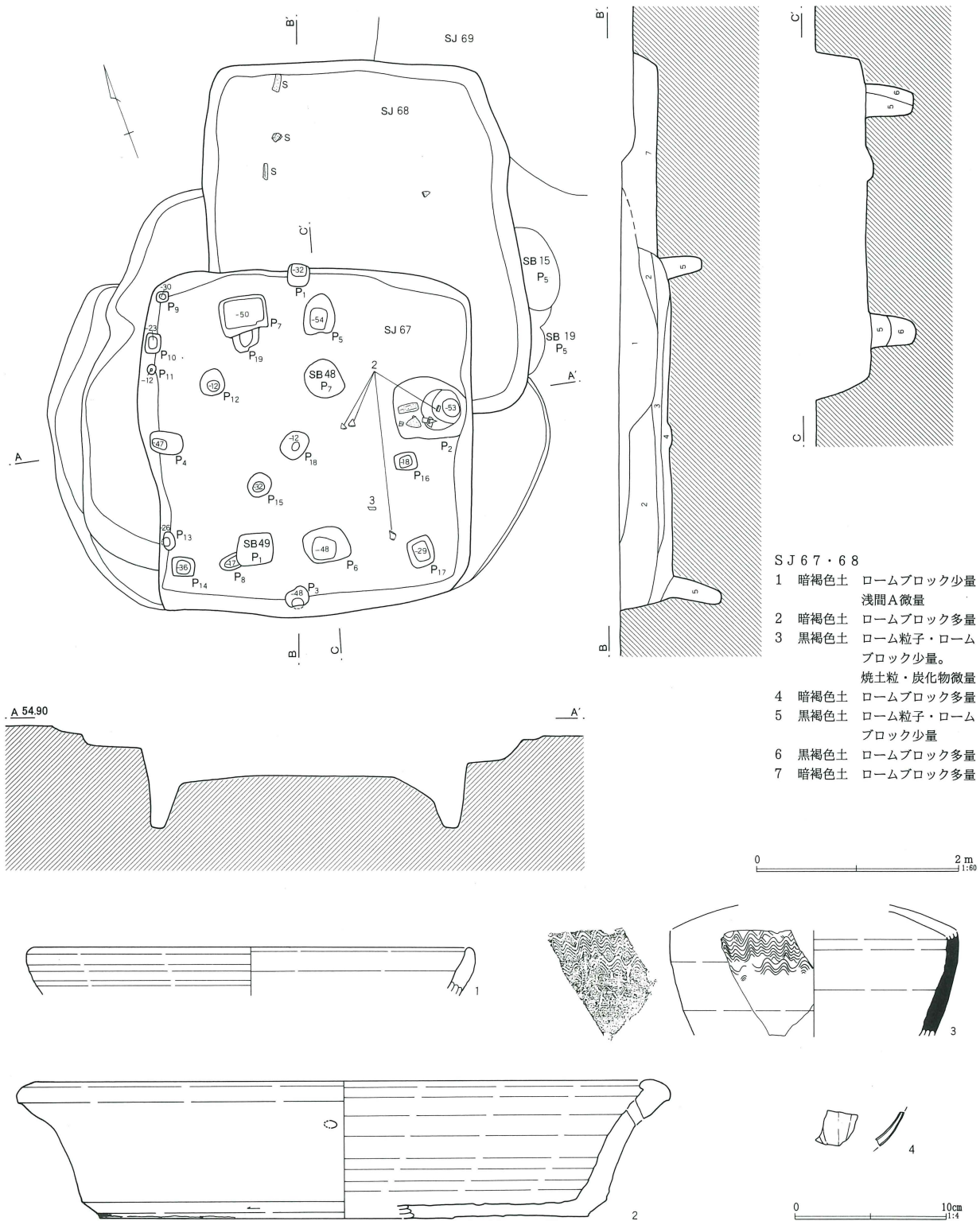
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵坏	(12.4)	3.3	6.4	C片	A	暗青灰色	25%	覆土。末野産
2	須恵高台椀		2.2	6.6	D片	C	黄灰褐色	50%	覆土。末野産
3	土師内黒椀		1.4	(9.0)	B	B	黄褐色	15%	覆土。内面黒色処理
4	土師坏				AB	A	褐色	5%	覆土。内面墨書「川」か
5	灰釉段皿	(17.0)	1.0		B	A	灰白色	5%	覆土。猿投～三河産(非東濃)。内面灰釉刷毛塗り
6	灰釉長頸瓶		2.1		BF	A	灰白色	15%	覆土。猿投産か。胎土精選
7	須恵鉢	(24.0)	6.2		C片	B	淡灰色	5%	覆土。末野産
8	須恵鉢	(28.0)	6.2		C片	B	暗灰色	10%	覆土。末野産
9	土師質小皿	(7.6)	1.8		AB	B	褐色	20%	覆土。非ロクロ整形

本住居跡が最も新しい。また、第15・19号掘立柱建物跡は古代の所産で本住居跡の方が新しい。第48・49号掘立柱建物跡との関係は、第49号掘立柱建物跡 Pit 1 は住居使用時には貼床されていたことから本住居跡の方が新しいと考えられる。第48号掘立柱建

物跡との新旧関係は不明確である。

また、本住居跡から68号住居跡の周囲には浅い掘り込みが検出された。住居に伴う掘り込みの可能性も考慮したが、断面観察によって埋土上部に掘り込まれた後世の掘り込みの可能性が高いことが判明し

第171図 A区第67・68号住居跡・出土遺物



第83表 A区第67号住居跡出土遺物観察表 (第171図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師質片口鉢	(29.0)	3.2		A B	A	灰色	5%	SJ67No.18。Pit 2内。瓦質。在地系。
2	盤	(41.5)	9.0	(32.7)	A B C	B	灰黒色	10%	SJ67No.6・8・10。P 2内+覆土下層。口縁下に小孔あり
3	須恵長頸瓶		6.9		C片	B	淡灰色	10%	SJ67No.9。覆土下層。末野産。混入
4	青磁碗					A	淡緑色	10%	SJ67Pit 7。鎗蓮弁文、龍泉窯系

た。

平面形は方形で、規模は長軸長3.45m、短軸長3.36m、深さ0.55mである。主軸方位はN-20°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは概して緩やかである。埋土は第1層が住居上面に被る後世の掘り込み覆土、第2層～第4層が住居埋土である。第2・4層にはロームブロックが多量に含まれていた。

ピットは19本検出された。Pit1とPit3は南北主軸線の壁際にあり、掘り込みは斜向する。住居に伴う対ピットであろう。同様にPit5とPit6、Pit2とPit4は対になる可能性がある。西壁際のPit9～11・13・14は壁柱穴となろうか。

炉跡、あるいは灰層は検出されなかった。

出土遺物は少なく、在地系の片口鉢、盤、龍泉窯系の青磁碗と須恵器の長頸瓶がある(第171図)。1は片口鉢口縁部。瓦質に焼き上がる。2は在地系の盤。口縁端部は内側に突出する。口縁部直下には小孔が穿たれている。残存部には1孔であるが、2孔となるものであろう。胴部はナデで、下端をヘラで面取りしている。底面は板状の圧痕が付いている。胎土や焼き、形態などが第4号井戸跡から出土した盤に酷似しており、接合はしないが同一個体の可能性もある。3は末野産の須恵器長頸瓶で、混入品。肩部直下に櫛描波状文が施文される。4は青磁蓮弁文碗の体部片である。龍泉窯系で、鎬蓮弁が描出される。Pit7出土。

住居の時期は、在地産の鉢、盤より13世紀後半～14世紀と考えておきたい。青磁碗の時期もそれを否定するものではない。

A区第68号住居跡(第171図)

A区第68号住居跡は44-10・11、45-11グリッドに位置する。第69号住居跡、第15・19号掘立柱建物跡を切り、第67号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.45m、短軸長3.12m、深さ0.25mである。主軸方位はN-20°-E

Eを指す。

床面は中心部が低く、壁際がやや高くなる。凹凸が比較的顕著で、北東隅の第69号住居跡との重複部は、床面がやや沈下していた。全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土単層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットや炉跡、または灰層は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器・須恵器の小片と数個の礫が出土したのみである。

住居の時期は不明確であるが、第67号住居跡へ連続的に建て替えられた可能性が高く、13世紀後半～14世紀と考えておきたい。

A区第69号住居跡(第172図)

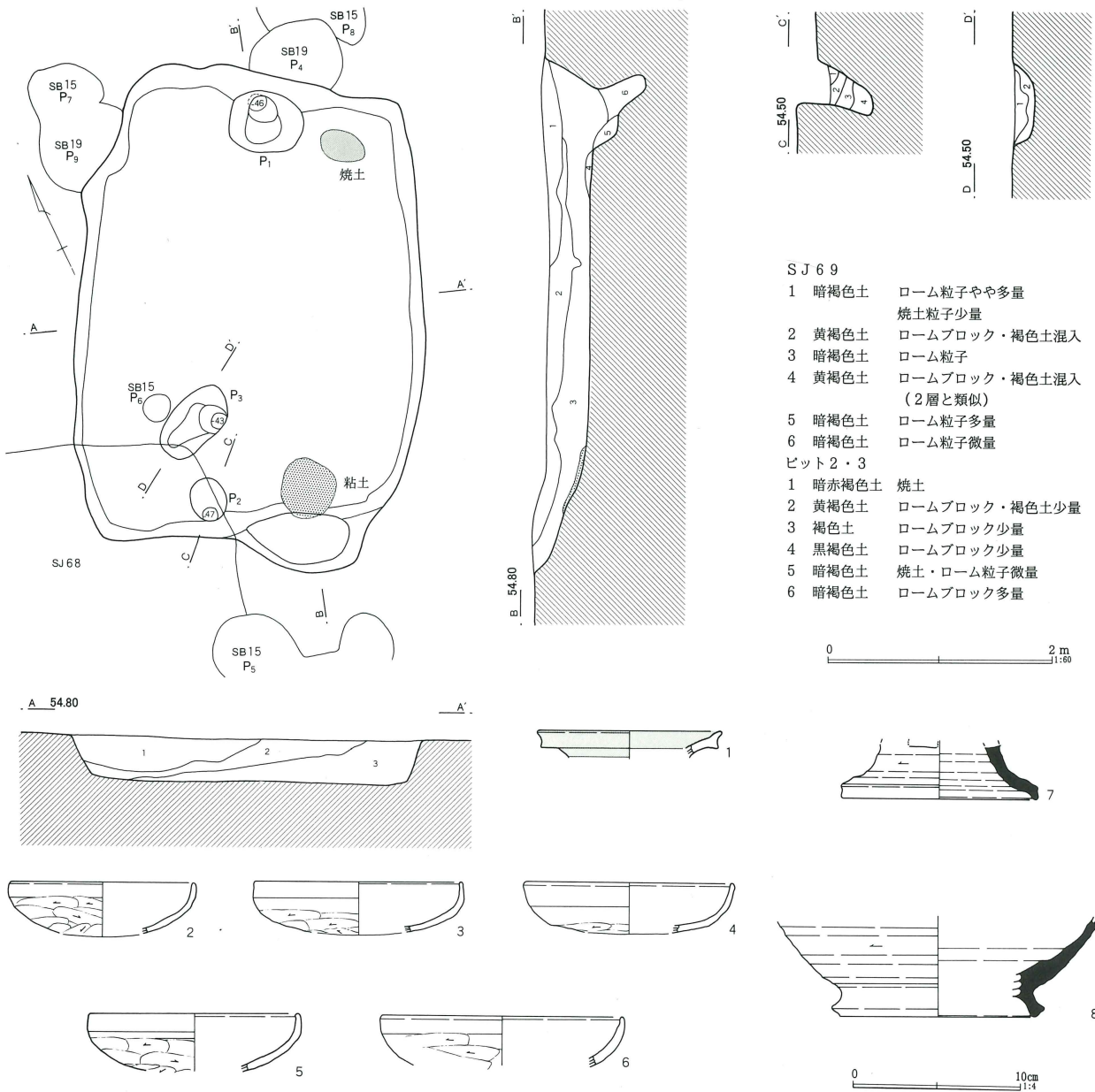
A区第69号住居跡は44-11グリッドに位置する。第15・19号掘立柱建物跡を切り、第68号住居跡に切られていた。本住居跡から第68号住居跡を経て、第67号住居跡に連続して建て替えられた可能性が高い。平面形はやや胴張り気味の長方形で、南壁部にスロープが付く。規模は長軸長4.26m、短軸長3.12m、深さ0.48mである。主軸方位はN-27°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。壁の立ち上がりは概して緩やかである。埋土は暗褐色土と黄褐色土に明瞭に区分され、特に第2・4層はロームブロックが極めて多量に含まれ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットは3本検出された。Pit1とPit2は主軸線上の壁際に対峙し、いずれも斜向して掘り込まれている。主柱穴と考えて良いものである。但し、Pit2は上面に被熱焼土層が被っており、ある時点で柱穴が埋められ、火処とされた可能性がある。Pit3はPit2北側にあり、深さ53cm。住居に伴うものと考えられ、Pit2からPit3に建て替えたものかもしれない。

床面の被熱焼土はPit2上面と北壁際のPit1東側から検出された。いずれも暗赤褐色に床面が焼けていたが、灰層の広がりには認められなかった。

第172図 A区第69号住居跡・出土遺物



第84表 A区第69号住居跡出土遺物観察表 (第172図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	灰釉長頸瓶	(10.8)	1.6		B	A	淡灰色	10%	覆土。浜北産。全体に淡緑色釉 素地土砂っぽい
2	土師坏	(10.9)	3.0		AB	A	褐色	30%	覆土
3	土師坏	(12.3)	3.0		AB	A	茶褐色	15%	覆土
4	土師坏	(12.4)	3.0		A	A	褐色	10%	覆土
5	土師坏	(12.4)	3.4		A	A	褐色	20%	覆土
6	土師坏	(14.5)	2.9		ABC	B	褐色	20%	覆土
7	須恵高盤脚		3.2	(11.6)	片	A	灰色	5%	覆土。末野産。脚部に方形の透し穿たれる
8	須恵高台壺		6.0	(11.6)	BC片	A	灰色	10%	覆土。末野産

南壁中央からやや東にずれた位置に壁から続くス
ロープが検出され、底面には非常に堅く締まった灰
色粘質土が堆積していた。出入り口施設と考えて良

からう。

出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が少量検出
されている(第172図)が、いずれも混入である。1は

灰釉陶器小型長頸瓶。全体に淡緑色の灰釉が掛かる。胎土がやや粗く、非猿投産の可能性はある。7は須恵器高盤脚部か。方形?の透かしが入る。

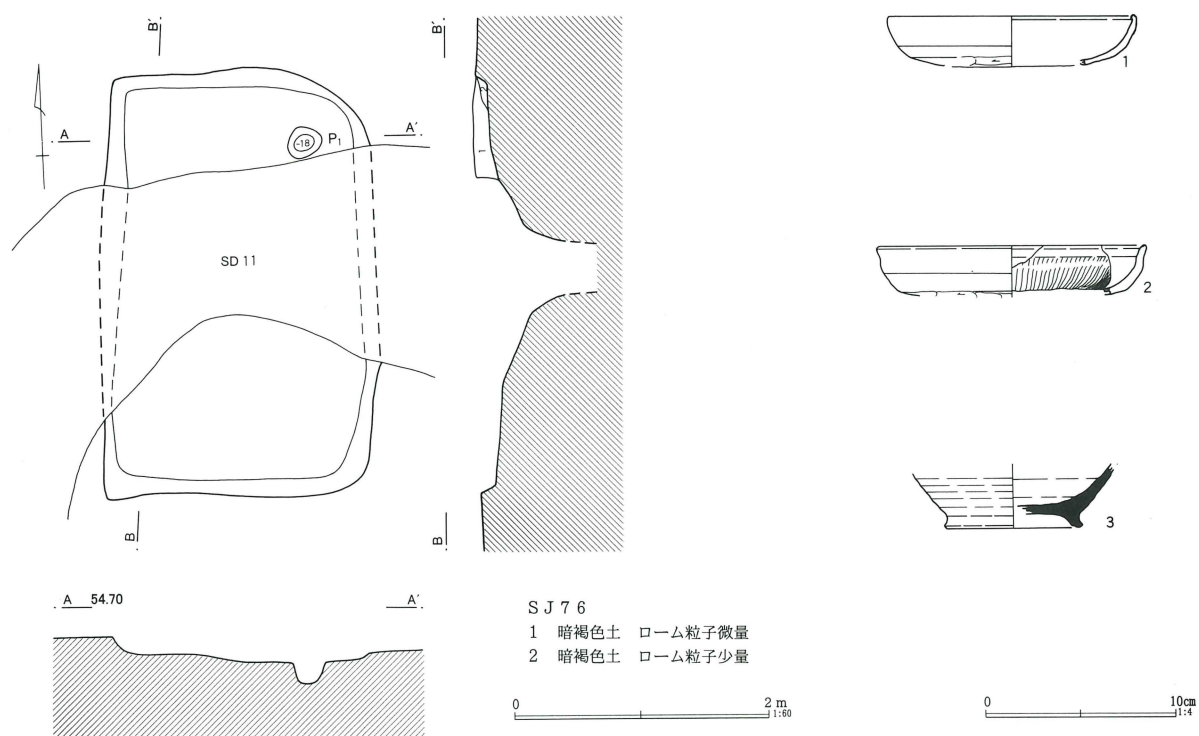
住居の時期は中世、重複する第67・68号住居跡との関係から13世紀後半～14世紀に位置付けておきたい。

A区第76号住居跡（第173図）

A区第76号住居跡は44-12グリッドに位置する。重複する第11号溝跡に床面の中央部を切られていた。また、住居西側を除く大部分は町教育委員会によって既に調査されている。カマドを溝跡に削平された、古代の住居跡である可能性は否定できないが、壁の立ち上がりや床面の状況などから中世の竪穴状遺構と判断した。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.35m、短軸長2.16m、深さ0.14mである。主軸方位はN-4° -

第173図 A区第76号住居跡・出土遺物



Eを指す。

床面はやや凹凸をもち、中心部に向かって若干深くなる。壁の立ち上がりは概して緩やかである。埋土はローム粒子を微量含む暗褐色土が見られたが、全体の状況は不明である。

ピットは1本検出された。深さは18cm。

出土遺物は土師器、須恵器が少量検出されたのみである(第173図)。1は土師器杯。2は暗文杯で、内面に放射状暗文が残る。平底暗文杯となろう。3は須恵器高台椀で、底部は回転糸切り後無調整である。いずれも小片で、混入と思われる。

住居の時期は中世と思われるが、伴出遺物がなく、それ以上の限定はできない。

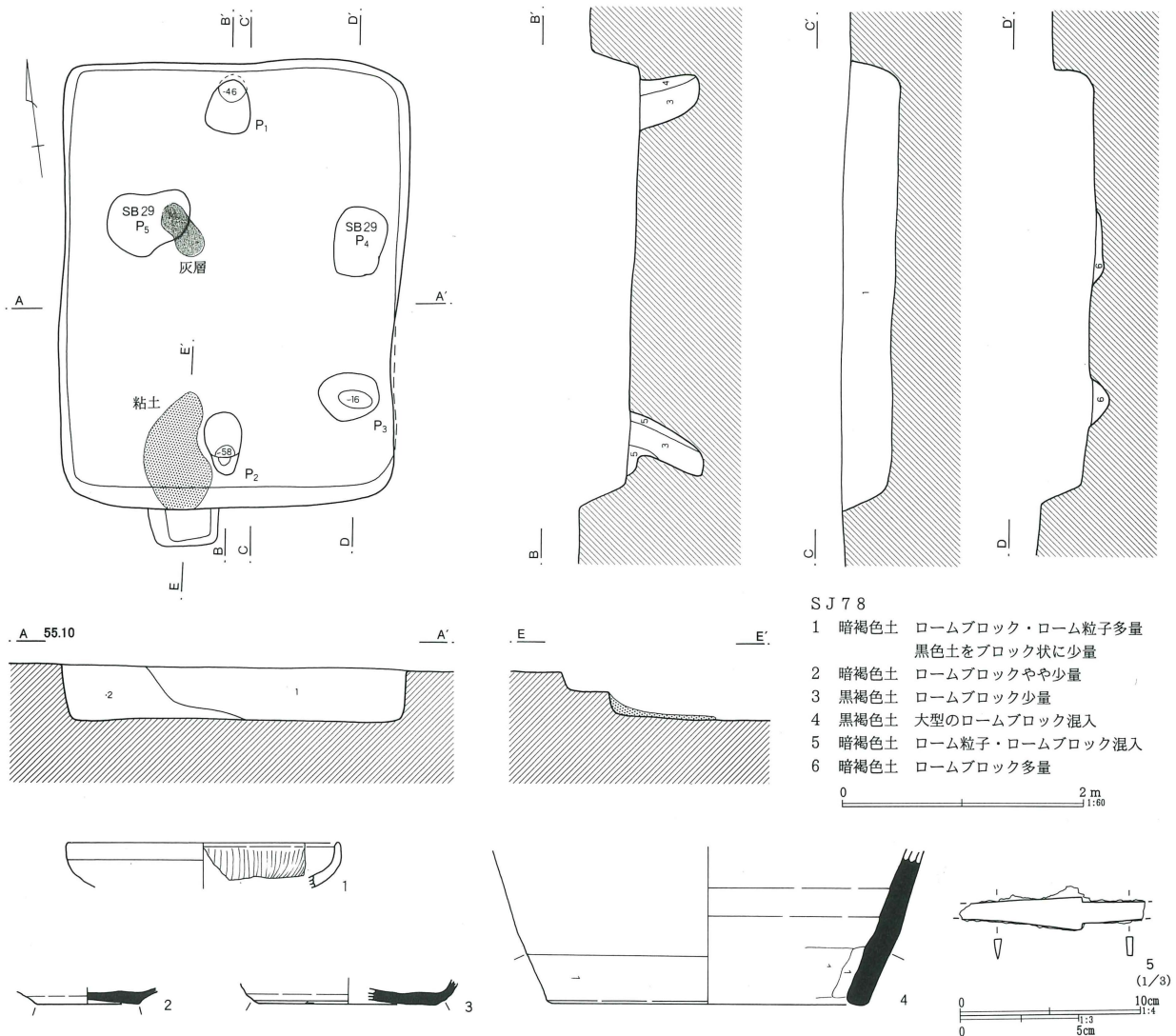
A区第78号住居跡（第174図）

A区第78号住居跡は43-9・10グリッドに位置する。第83号住居跡、第29号掘立柱建物跡が重複し、

第85表 A区第76号住居跡出土遺物観察表（第173図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(13.0)	2.5		AB	A	褐色	5%	覆土
2	土師暗文杯	(14.0)	2.7		AB	B	茶褐色	5%	覆土。内面放射暗文
3	須恵高台椀		3.0	(7.2)	片	B	黄灰褐色	45%	覆土。末野産

第174図 A区第78号住居跡・出土遺物



第86表 A区第78号住居跡出土遺物観察表 (第174図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	(15.0)	2.5		B	B	茶褐色	10%	覆土。内面放射暗文
2	須恵皿?		0.9	(5.6)	BC片	B	茶褐色	20%	覆土。未野産
3	須恵坏		1.4	9.8	BC	A	灰白色	20%	覆土。秋間産。素地土細かい
4	須恵甑		8.7	(17.4)	B片	B	灰褐色	10%	覆土。未野産か
5	刀子	覆土上層。残長7.6cm							

本住居跡が最も新しい。平面形は長方形で、規模は長軸長3.72m、短軸長2.88m、深さ0.47mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で構成され、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

ピットは主軸線上に2本検出された(Pit 1・2)。いずれも斜向ピットで、住居に伴う主柱穴となろう。

Pit 3は東壁際にあり、帰属は不明確である。

灰層は第29号掘立柱建物跡Pit 5の上面に形成されていた。炭化物・焼土粒子混じりの灰層が薄く堆積し、底面の被熱は確認できなかった。

南壁際のPit 2西側には、壁から床面に掛けて灰色の堅く締まった粘質土が堆積していた。また、粘質土の南側壁外には浅い土壌が連結しており、埋土は住居覆土と酷似することから見ても住居に伴う出入

り口施設(ステップ)と想定することも可能である。

出土遺物は土師器暗文坏、須恵器坏・皿・甗、鉄製刀子が検出されている(第174図)。鉄器の帰属は不明であるが、土器はいずれも古代の所産で明らかに混入である。住居の時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

A区第92号住居跡(第165図)

A区第92号住居跡は44-9グリッドに位置する。第34号住居跡が重複し、本住居跡の方が新しい。また、第29号住居跡は本住居の上面に軸を揃えて重複することから、本住居跡から29号住居跡に建て替えたものと考えられる。

平面形は長方形で、規模は長軸長3.96m、短軸長

3. 掘立柱建物跡(古代)

A区からは50棟の掘立柱建物跡が検出された。一部不明確なものもあるが、古代の建物跡が39棟、中世のそれが11棟と考えている。古代の建物跡は住居群の一角にあり、遺構相互の重複も激しく、建物の存在や規模の把握に手間取ったものもある。調査区中央部西側に特に集中する傾向がある。最大の建物は第6号・7号掘立柱建物跡で、いずれも西側に廂が付く。

A区第1号掘立柱建物跡(第176図)

A区第1号掘立柱建物跡は38-16グリッドに位置する。重複する第66号住居跡との関係は、平面及び断面観察から本建物跡が住居跡を切っていることは確実である。また、中世の所産と思われる第41号溝跡にPit 8上面を削平されていた。

4×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行8.10m、梁行5.10mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。

柱間寸法は梁行で2.55m(8.5尺)等間に復元でき

3.40m、確認面からの深さ0.50mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

床面は凹凸が比較的顕著である。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土はロームブロックと黒色土の混土層で、明らかに埋め戻されている。

ピットは4本検出されたが、柱穴に相当するものは見出されなかった。土壌は1基検出された。住居に伴うものであるが、灰層は検出されず性格は不明である。

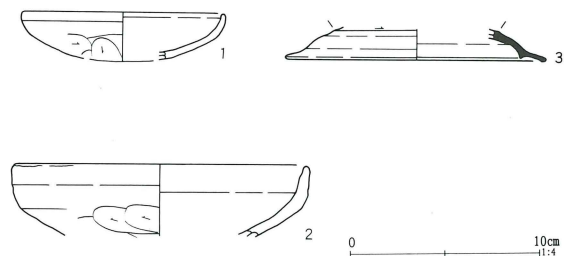
出土遺物は土師器、須恵器の細片が散在的に検出されたが、住居に伴う遺物は皆無である。住居の時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

が、桁行は、東側桁行の柱穴で確認された柱痕もしくは抜き取り痕から測定すると、柱間間隔はややずれ、等間にはならないようである。

柱穴は方形もしくは長方形を意識したものと楕円形気味のものがある。埋土は第1・2層が柱痕。第3~6層が掘り方埋土で、縞状に突き固められている。

出土遺物は土師器坏と須恵器蓋がある(第175図)。いずれも細片で、遺物の時期は8世紀初頭以前である。重複する第66号住居跡が熊野Ⅱ期に位置付けられることから、建物の時期は熊野Ⅱ期またはそれ以降という限定ができるのみである。

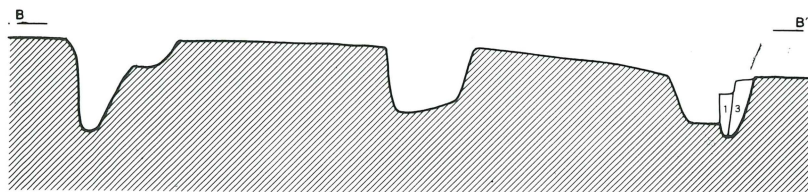
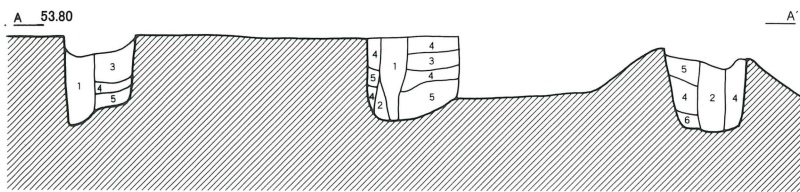
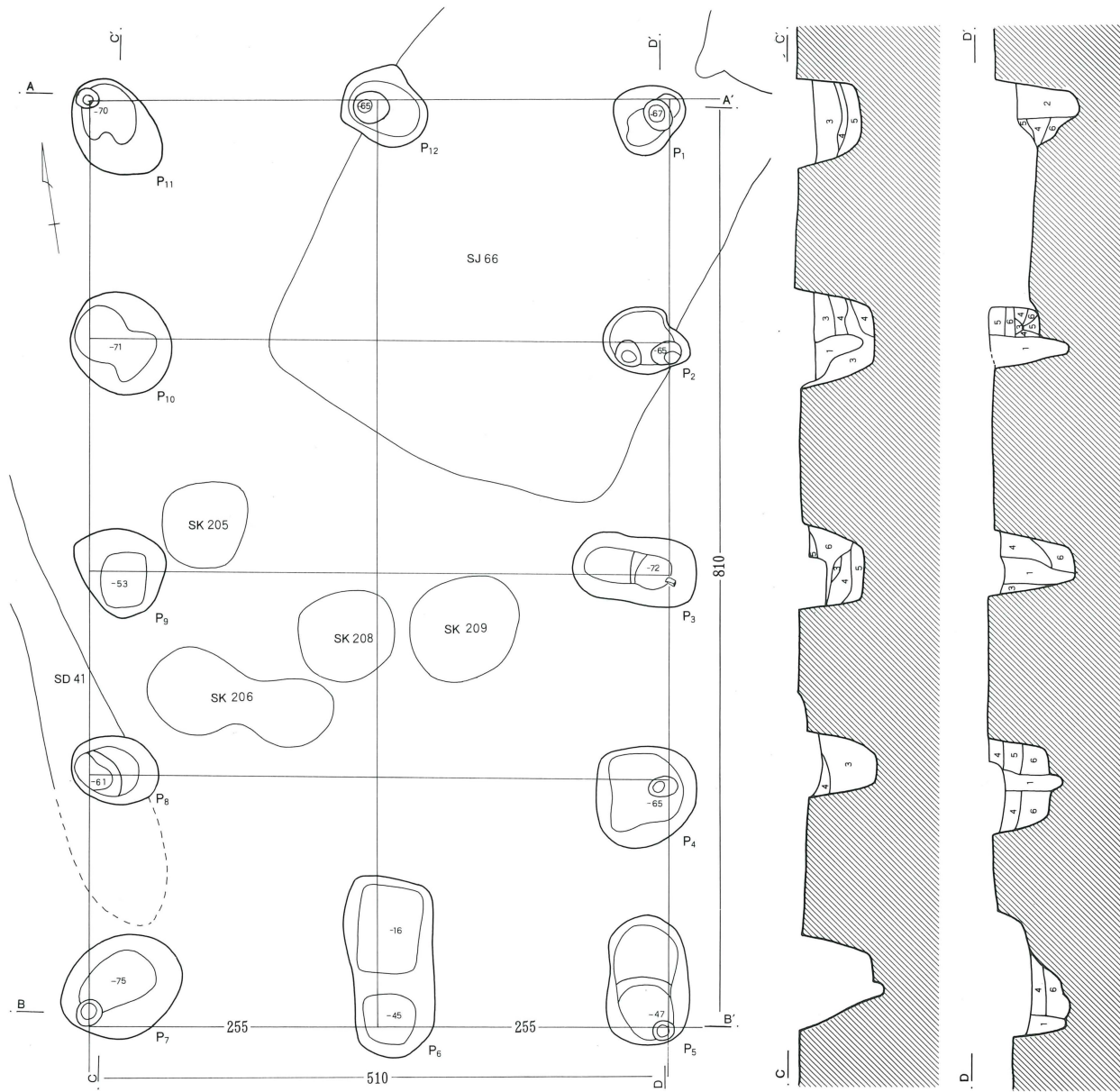
第175図 A区第1号掘立柱建物跡出土遺物



第87表 A区第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第175図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(10.7)	2.5		ABC	A	暗褐色	10%	Pit3 掘り方
2	土師坏	15.6	3.7		ABC	A	明褐色	10%	Pit1
3	須恵蓋	(13.4)	1.7		B片	A	灰色	5%	Pit12. 末野産。天井部回転ヘラケズリ かえり径11.0cm

第176図 A区第1号掘立柱建物跡



SB 0 1

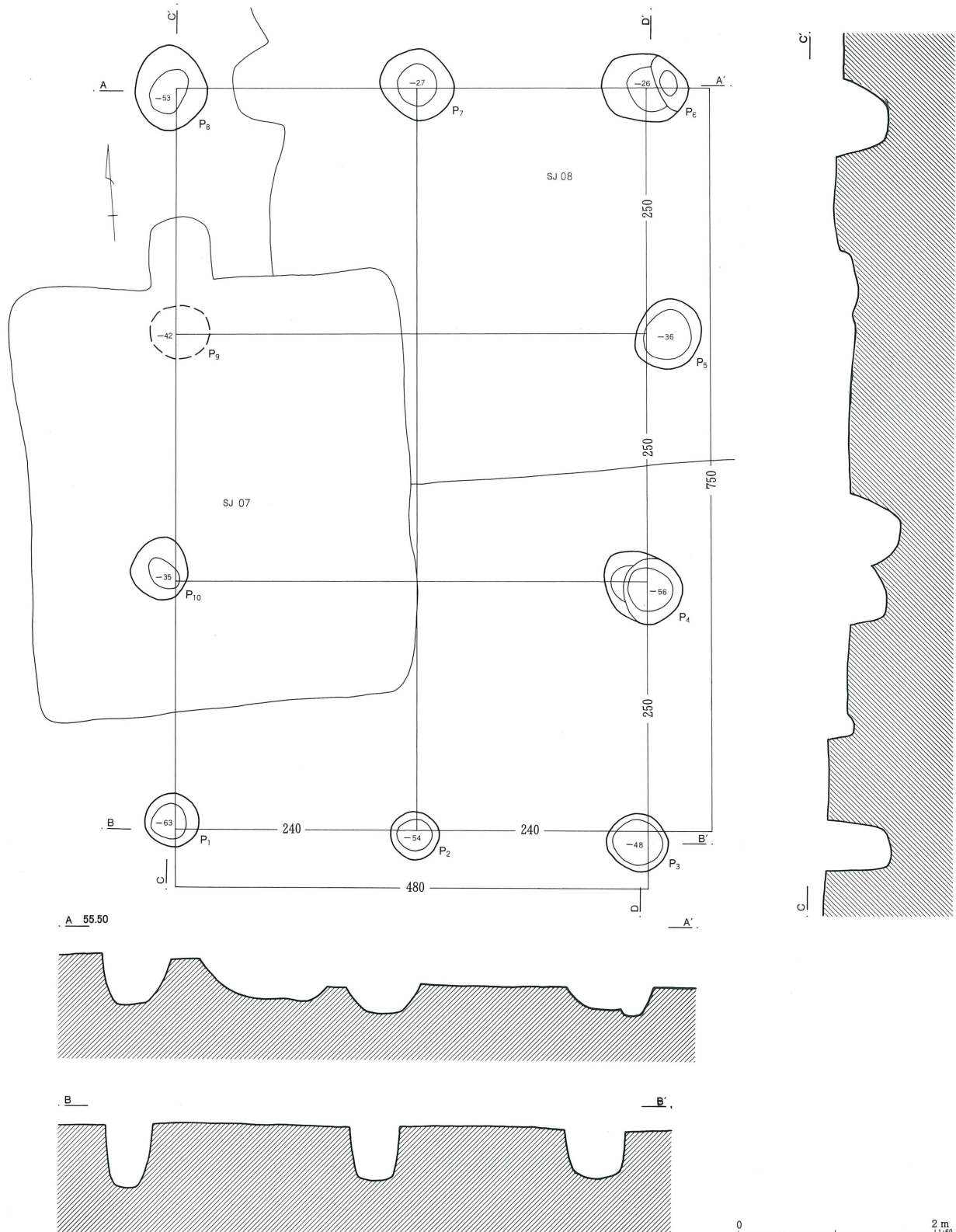
- 1 褐色土 ローム粒子微量
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック混入
- 3 明褐色土 黒色土・ロームブロック混入
- 4 黒色土 ロームブロック混入
- 5 褐色土 ロームブロック少量
- 6 褐色土 ロームブロック混入



A区第2号掘立柱建物跡 (第177・178図)

A区第2号掘立柱建物跡は46・47-7・8グリッドに位置し、第7・8号住居跡と重複する。第8号住居跡第177図 A区第2号掘立柱建物跡(1)

居跡との新旧関係は本建物跡の方が新しい。第7号住居跡との関係は、Pit10は住居跡床面を切っていることから本建物跡が新しいものと判断したが、



Pit 9は断面及び平面的に精査したにも関わらず検出できなかった。新旧関係、ピットの有無に関して不明確な点を残してしまった。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行7.50m、梁行4.80mである。主軸方位はN-4°-Eを指す。

柱痕は検出されず、柱間寸法は柱穴心々間で桁行2.50m、梁行2.40mである。柱穴は円形基調で、底面レベルは比較的揃っている。但し、Pit 9の存否は不明である。

出土遺物は土師器坏・皿・甕、須恵器蓋が柱穴埋土から検出されている(第178図)。いずれも小片であるが、7世紀後半～8世紀初頭頃までのもので、それ以降のものは含まれない。建物の時期は第7号住居跡との関係を重視して熊野Ⅲ期またはそれ以降と考えるべき。

A区第3号掘立柱建物跡(第179図)

A区第3号掘立柱建物跡は37-16グリッドに位置する。第73号住居跡と重複し、平面及び断面観察から本建物跡の方が古いことが確認された。第26・37・38号溝跡は建物よりも確実に新しい。

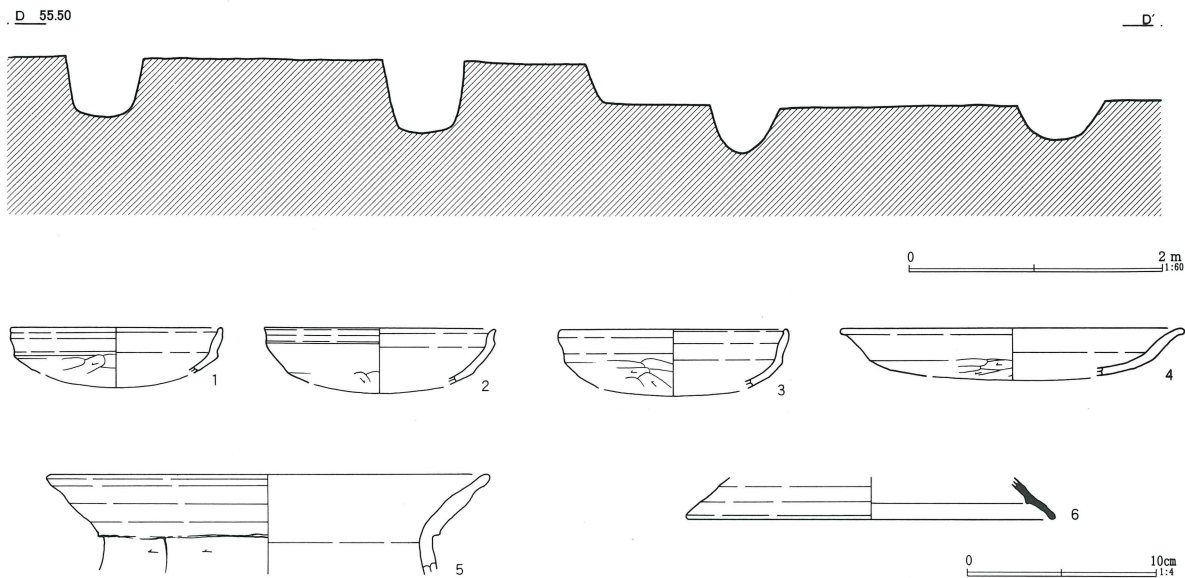
3×3間の側柱建物で、規模は桁行6.30m、梁行4.65mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

柱間寸法は桁行2.10m等間、梁行1.55mにほぼ揃う。埋土は第1～3層が柱痕。掘り方埋土は黒色土と明褐色土を交互に積んで突き固めていた。

柱穴は円形基調で、桁行の柱列(Pit 1～4・7～10)が深く、梁行のPit 5・6、11・12が浅い。Pit 4・5は第70号住居跡に削平されており、検出されなかった。

出土遺物はPit 8から須恵器蓋が1点検出されている(第179図)。無かえり蓋で、混入と見た方がよい。

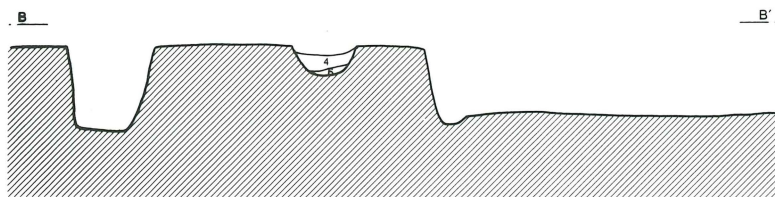
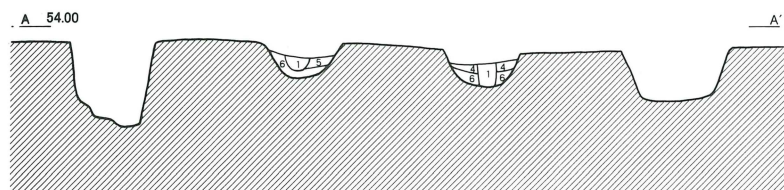
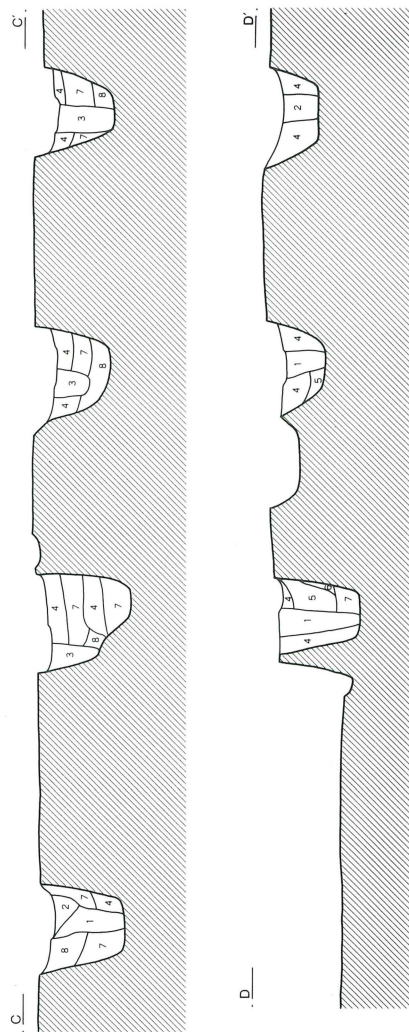
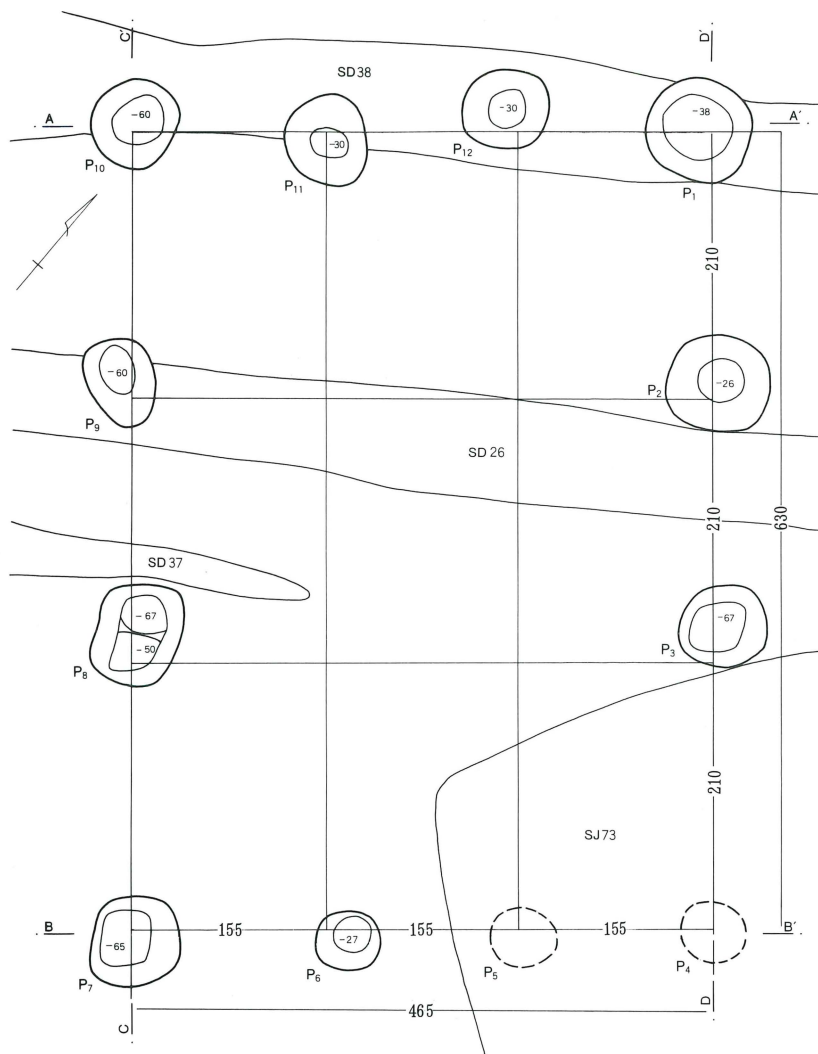
第178図 A区第2号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



第88表 A区第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第178図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.2)	2.4		BDG	A	褐色	5%	Pit3
2	土師坏	(12.2)	2.9		ABD	B	淡褐色	5%	Pit3
3	土師坏	12.0	3.1		BG	A	淡褐色	5%	Pit3
4	土師皿	(18.0)	2.5		ABC	B	橙褐色	5%	Pit5
5	土師甕	(23.4)	5.3		ABC	A	淡褐色	15%	Pit1
6	須恵蓋	(19.4)	2.2		B片	B	灰褐色	5%	Pit2. 末野産。かえり径16.6cm

第179図 A区第3号掘立柱建物跡・出土遺物



SB03

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 褐色土 | ローム粒子少量 |
| 4 黒色土 | ロームブロックやや少量 |
| 5 黒色土 | ロームブロック混入 |
| 6 褐色土 | |
| 7 明褐色土 | ローム粒子・黒色土ブロック混入 |
| 8 明褐色土 | ローム粒子・黒色土ブロック微量 |

0 2 m 1:60



0 10 cm 1:4

であろう。1は須恵器蓋。推定口径15.8cm。胎土に白色粒子と赤色粒子を含み、焼成は普通。灰色を呈し、5%残存。Pit 8出土。末野産か。

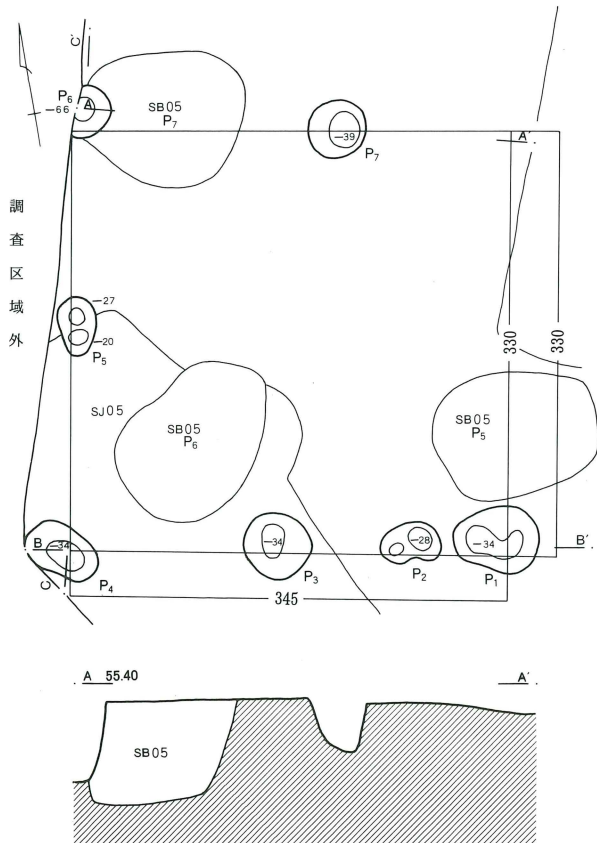
建物跡の時期は第73号住居跡との関係から熊野Ⅱ期またはそれ以前となる。主軸の傾きから熊野Ⅰ期に遡る可能性が高いものと考えている。

A区第4号掘立柱建物跡（第180図）

A区第4号掘立柱建物跡は46-7・8グリッドに位置する。調査区西端にあり、全体の様相は不明確で、柱並びも悪い点があるが、建物と考えておく。重複する第5号住居跡、第5号掘立柱建物跡を切っていた。

2×2間の建物と考えておくが、北東隅柱はおそらく中世の所産と思われる土壌により破壊され、遺存しない。また、東側柱筋の柱間柱は検出されなかった。Pit 2は柱筋に乗るが、柱間がずれ、伴う可能性は低い。規模は桁行長3.45m、梁行長3.30mである。主軸方位はN-80°-Wを指す。

第180図 A区第4号掘立柱建物跡



柱筋は概ね通るが、柱間距離は一定しない。柱痕は検出されなかった。柱穴は円形または楕円形で、規模は直径40~65cmとやや小さい。

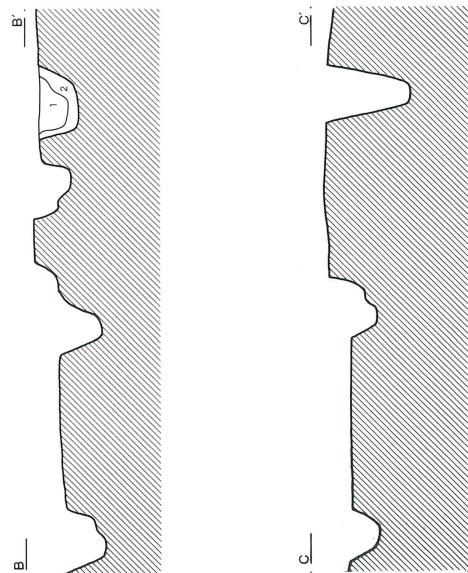
出土遺物は検出されなかった。建物の時期は第5号住居跡との関係から熊野Ⅰ期以降となるが、限定できない。

A区第5号掘立柱建物跡（第181・182図）

A区第5号掘立柱建物跡は45-8、46-7・8グリッドに位置する。Pit 3~8は町教育委員会によって既に調査されている。重複遺構との新旧関係は第5号・17号住居跡よりも新しく、第16号住居跡に切られていた。第6号住居跡との関係は町教育委員会の調査区に相当するため不明であるが、建物跡の方が古い可能性が高い。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長7.65m、梁行長5.10mである。主軸方位はN-4°-Eを指す。

柱筋は概ね通るが、北側梁行の柱間柱がやや外に

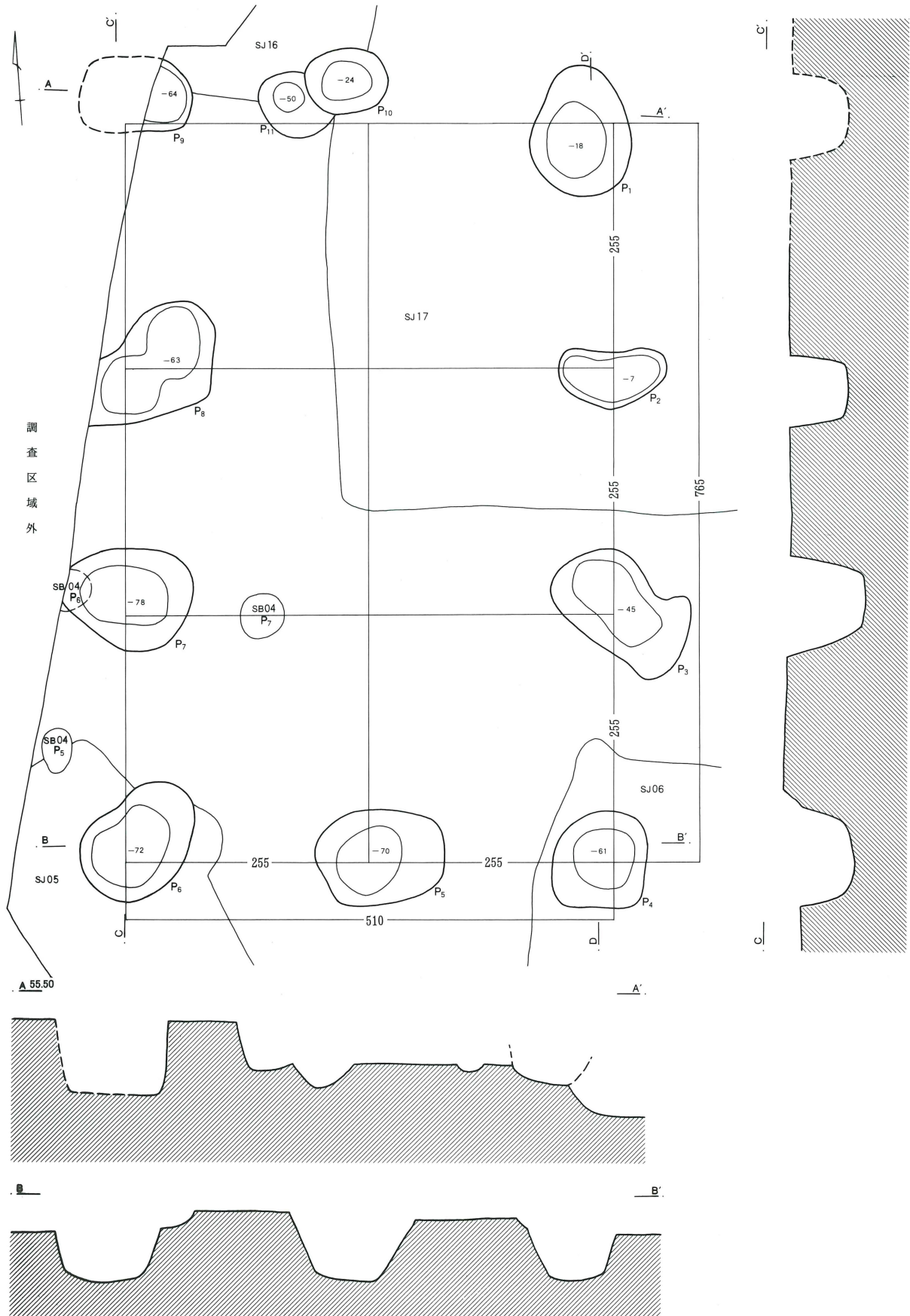


SB04

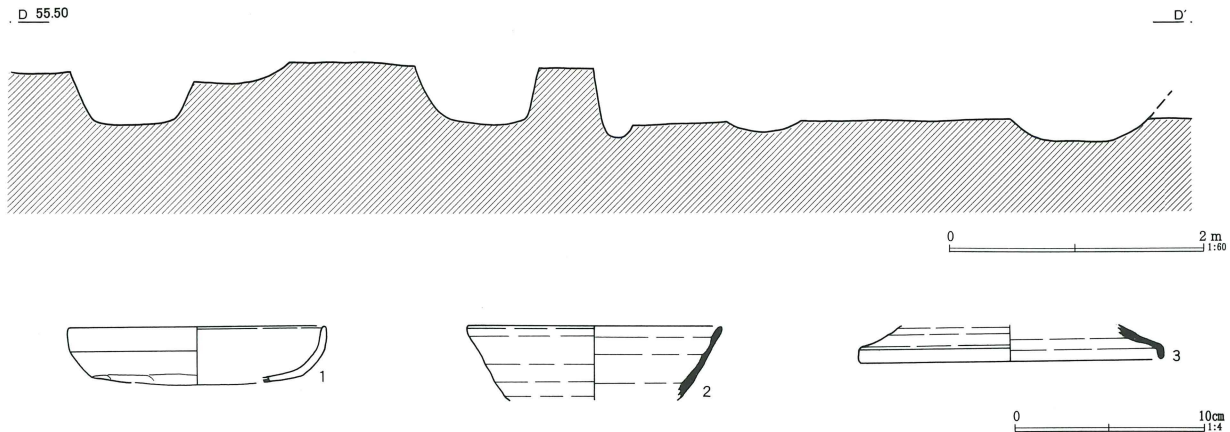
- 1 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 2 褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック混入



第181图 A区第5号掘立柱建物跡(1)



第182図 A区第5号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



第89表 A区第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第182図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.6)	2.9		A B C D	A	褐色	20%	Pit10
2	須恵坏	(13.4)	3.9		B C 針	B	灰白色	10%	Pit10。南比企産
3	須恵蓋	16.0	1.8		B片	B	灰褐色	5%	Pit10。末野産

ずれ気味である。柱間距離は桁行、梁行共に2.55m等間に復元できる。柱穴は長方形、または楕円形で、底面の深さは比較的一定している。Pit10・11を見ると建て替えられた可能性もある。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器坏・蓋がある。いずれも17号住居跡と重複するPit10から出土しており、混入の疑いもある。建物跡の時期は第7号建物との類似からV期頃か。

A区第6号掘立柱建物跡 (第183～185図)

A区第6号掘立柱建物跡は44・45－9・10グリッドに位置する。第30・37・38号住居跡、第39・42・54～57・67号土壇と重複し、本建物跡は全ての遺構に切られていた。

見かけ上は4×3間、南北棟の総柱建物であるが、北側梁行と東側桁行の柱穴は規模が小さく、深度も浅い。また、柱間もやや狭いため、3×2間の身舎に、北側と東側2面の廂が付く建物跡と考えるのが妥当である。規模は桁行長10.05m、梁行長6.90mである。主軸方位はN－6°－Eを指す。

身舎はPit1～12で構成される。柱筋はきれいに通り、柱間距離は桁行2.55m(8.5尺)、梁行2.40m(8尺)等間に揃う。側柱列の柱穴は深くしっかりしているが、Pit11・12は浅く、床東となろうか。身舎柱を

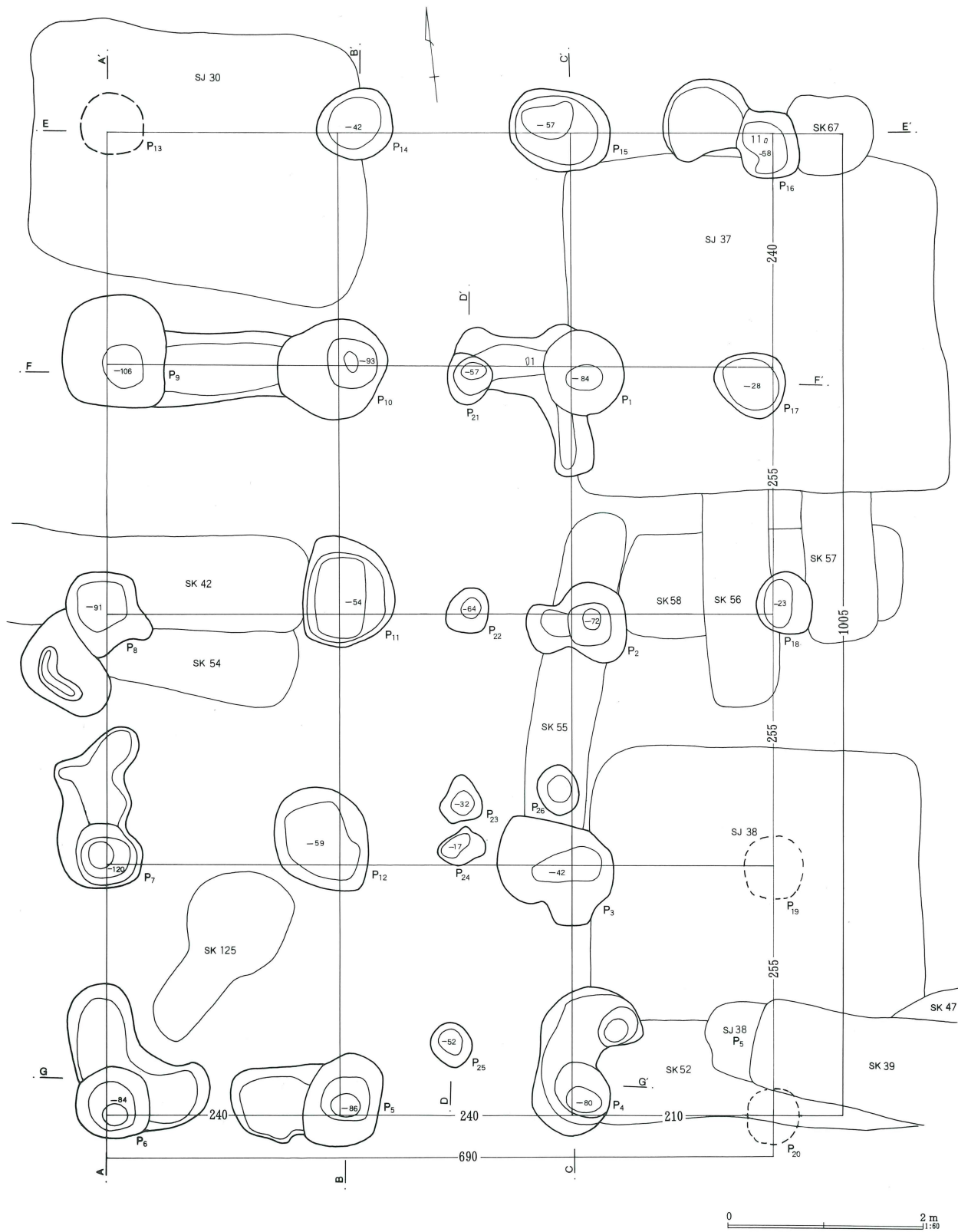
連結するように浅い溝跡が途切れながら付属する。一部溝持ち形態といえよう。また、建物中軸線上にPit21～25が並んで検出された。柱穴規模はやや小さく、東西の柱筋に乗るものと乗らないものがあるが、別の建物に展開しないため本建物に伴う可能性を考えておきたい。

廂柱は身舎の北側に2.40m、東側に2.10m出ている。北側の廂柱筋は通るが、東側廂柱筋はやや振れている。Pit19・20は削平されて遺存しない。北西隅柱のPit13は他の柱穴深度と同等であれば、遺存するはずであるが、第30号住居跡床面を精査したが検出されなかった。柱穴深度が非常に浅いか、置き柱かいずれかであろう。

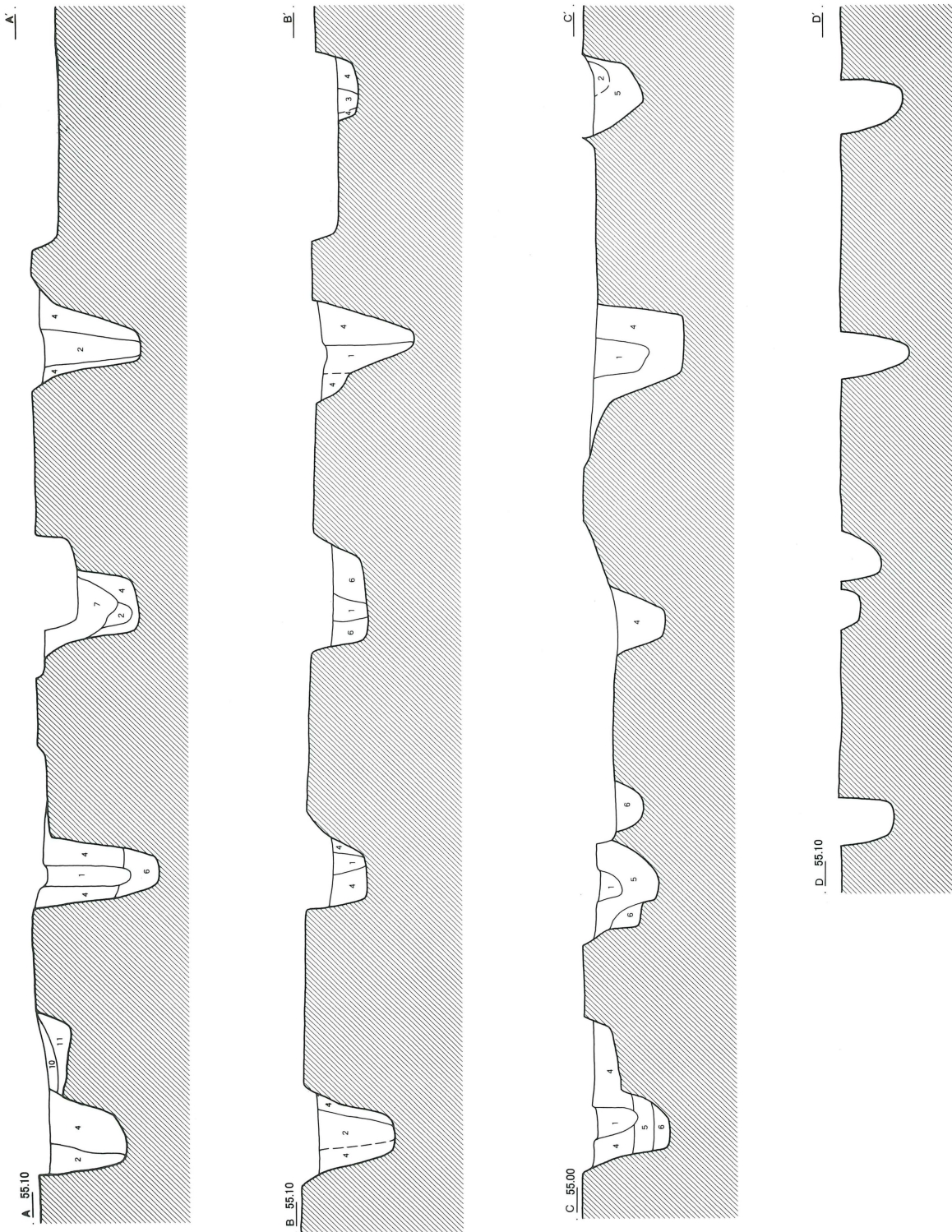
柱穴埋土は褐色から明褐色土系を基調としていた。柱痕または抜き取り痕と思われるものはほとんどの柱穴で認められた(第1～3層)。

出土遺物は土師器坏・甕・小型甕、須恵器坏・高台碗・長頸瓶・磨鉢、鉄鏃、青銅製帯金具巡方がある(第186図)。2は底部回転糸切り後無調整の須恵器坏、3の須恵器坏は底部調整は不明瞭。5は高台碗、7は「コ」の字状口縁甕である。8は須恵器長頸瓶で、硬質に焼き上がり、一見猿投産に似るが、東金子産の可能性もある。9は磨鉢で、内面は著しく磨滅し

第183图 A区第6号掘立柱建物跡(1)



第184図 A区第6号掘立柱建物跡(2)



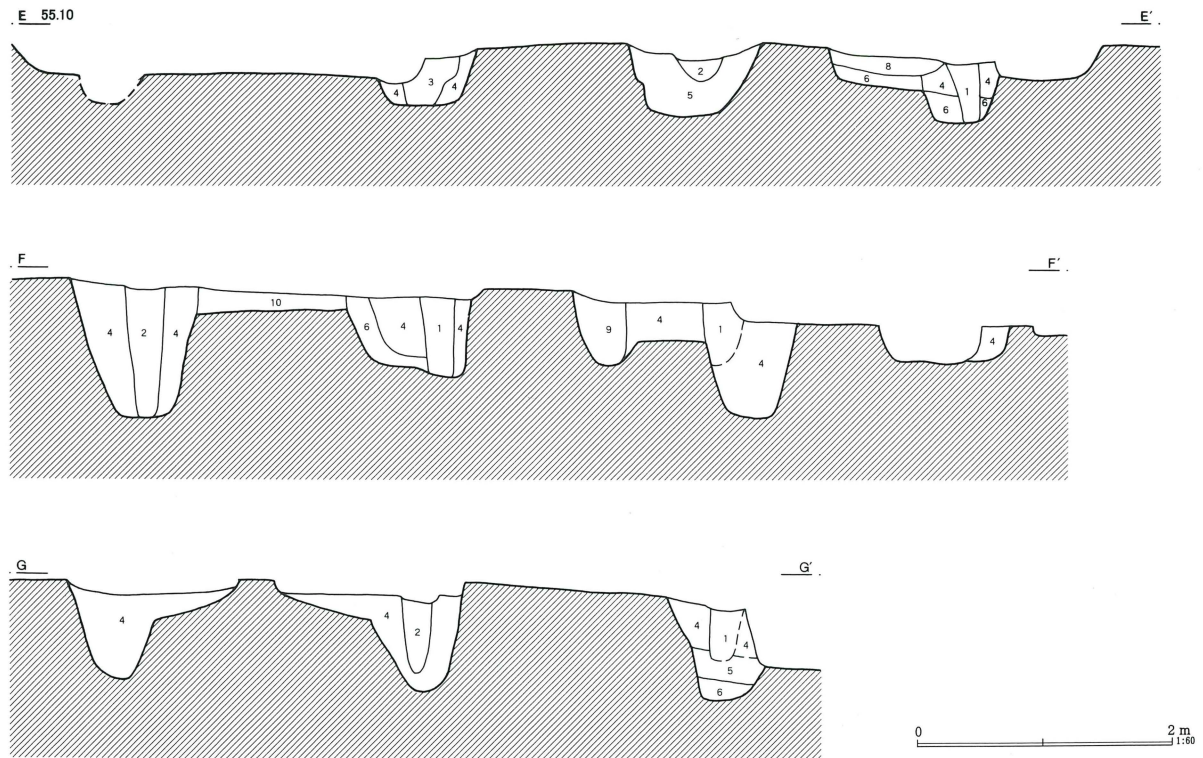
SB 06

- 1 明褐色土 ローム粒子多量
- 2 明褐色土 ローム粒子混入少量
- 3 明褐色土 ローム粒子少量。焼土粒子混入
- 4 褐色土 ロームブロック混入
- 5 褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック混入
- 6 褐色土 ロームブロック・ローム粒子混入
- 7 褐色土 ローム小ブロック少量

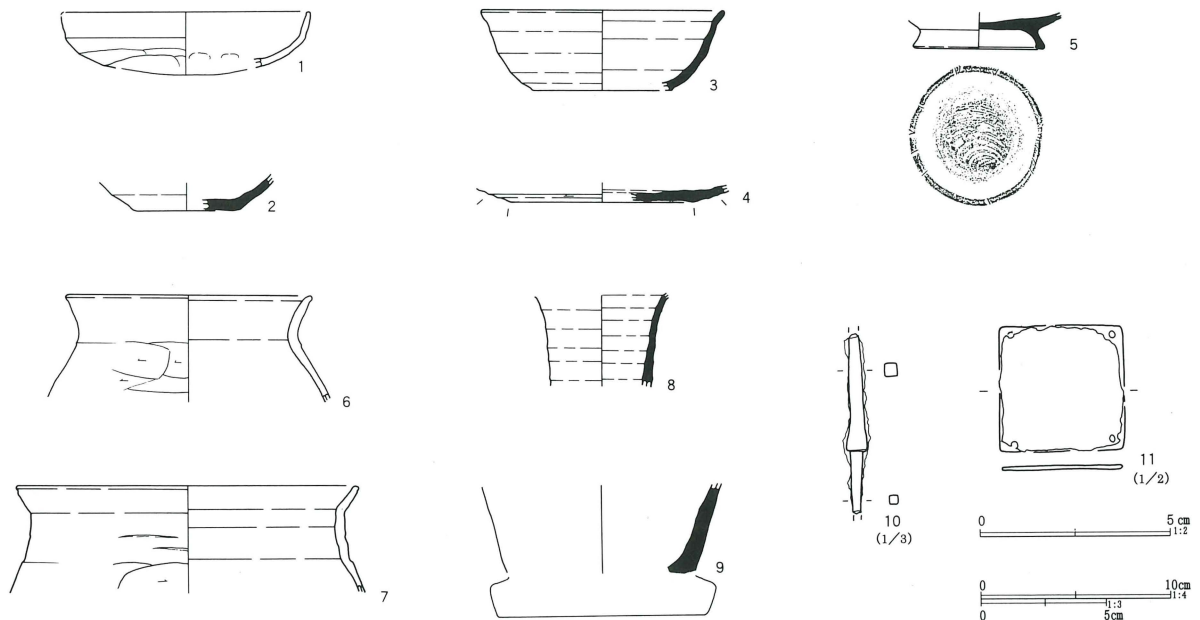
- 8 褐色土 ロームブロック・ローム粒子混入
焼土粒子少量
- 9 黒褐色土 ロームブロック少量
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量
- 11 暗褐色土 ロームブロック多量

0 2 m
1:60

第185図 A区第6号掘立柱建物跡(3)



第186図 A区第6号掘立柱建物跡出土遺物



ている。10は鉄鏃茎部片。11は青銅製帯金具の巡方裏金である。一辺3.3cm、四隅に小孔が穿たれている。建物跡の北東隅柱(Pit16)から出土し、地鎮の可能性はある。出土土器はいずれも小片であるが、9世紀中葉～後半頃の土器が主体である(2・3・5・7・

8)。

建物跡の時期は重複遺構との関係から古代であるのは疑いなく、柱穴出土の土器から熊野VI期頃に構築されたものと考えておきたい。

第90表 A区第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第186図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.0)	2.9		ABCD	A	褐色	25%	Pit1 No2
2	須恵坏		1.9	5.8	B片	D	黄灰色	20%	Pit12 掘り方。末野産。底部B0手法
3	須恵坏	(12.8)	4.2	7.4	BD片	B	灰褐色	20%	Pit12 掘り方。末野産。底部B0手法?
4	須恵坏		1.0	9.8	B片	B	灰褐色	10%	Pit1。末野産。体部下端+底部回転ヘラケズリ
5	須恵高台椀		1.9	6.8	BC片	A	灰色	85%	Pit15。末野産。回転糸切り後 高台貼付け
6	土師小型甕	13.0	5.6		ABC	B	暗褐色	20%	Pit3
7	土師甕	18.0	5.7		BC	A	褐色	5%	Pit12 掘り方
8	須恵長頸瓶		4.9		BH	A	黄灰褐色	25%	Pit16 掘り方。猿投または東金子産か
9	須恵磨鉢		4.7		BC片	A	灰色	10%	Pit12 掘り方。末野産。内面磨減
10	鉄鏃	Pit5。残長7.0cm。閃光被、鋒部欠失							
11	巡方裏金	Pit16内No1。縦3.3cm。横3.3cm。厚さ0.1cm。青銅製							

A区第7号掘立柱建物跡 (第187・188図)

A区第7号掘立柱建物跡は45・46-9・10グリッドに位置する。南半は町教育委員会によって調査されている。中世段階の第11号溝跡、第46・66号土壌に切られていた。第39号住居跡との関係はPit3・4の上面に第39号住居跡の床面が乗っていたことから、本建物跡の方が古いことが判明した。

3×2間、南北棟の側柱建物で、西側に廂が付く。全体の規模は桁行長8.10m、梁行長6.90mである。主軸方位はN-2°-Eを指す。

身舎の柱間距離は桁行2.70m(9尺)、梁行2.40m(8尺)を基本とするが、柱痕または抜き取り痕の位置は若干ずれ気味である。廂の出は2.10m(7尺)で身舎の柱間よりもややせまい。柱穴形態は円形や楕円形が主体で、身舎の柱穴の方が大きく、廂柱はやや小型である。埋土は第1・2層が柱痕または抜き取り痕、第3~6層が掘り方埋土である。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏・高台椀、瓦がある(第188図)。1は高台椀と思われる。2の坏は底部と体部下端が回転ヘラケズリ調整される。3は「コ」の字状口縁甕の口縁部片である。4は平瓦片。側縁はヘラで切っている。凸面平行叩き、凹面布目であ

る。

建物跡の時期は、第39号住居跡との関係から熊野VI期後半、またはそれ以前、出土遺物からみて熊野V期~VI期前半に比定される。

A区第8号掘立柱建物跡 (第189図)

A区第8号掘立柱建物跡は46-10グリッドに位置する。第39・41・48号住居跡、第11号溝跡と重複していた。第39・41号住居跡との関係は、39号住居跡遺物の出土状態や、第41号住居跡カマドの遺存状態から本建物跡の方が古いことが判明した。第48号住居跡との関係は不明確であるが、Pit3が検出されなかったことから、住居掘り方に切られている可能性があり、本建物跡の方が古いものと考えておきたい。第11号溝跡は本建物跡を切っている。

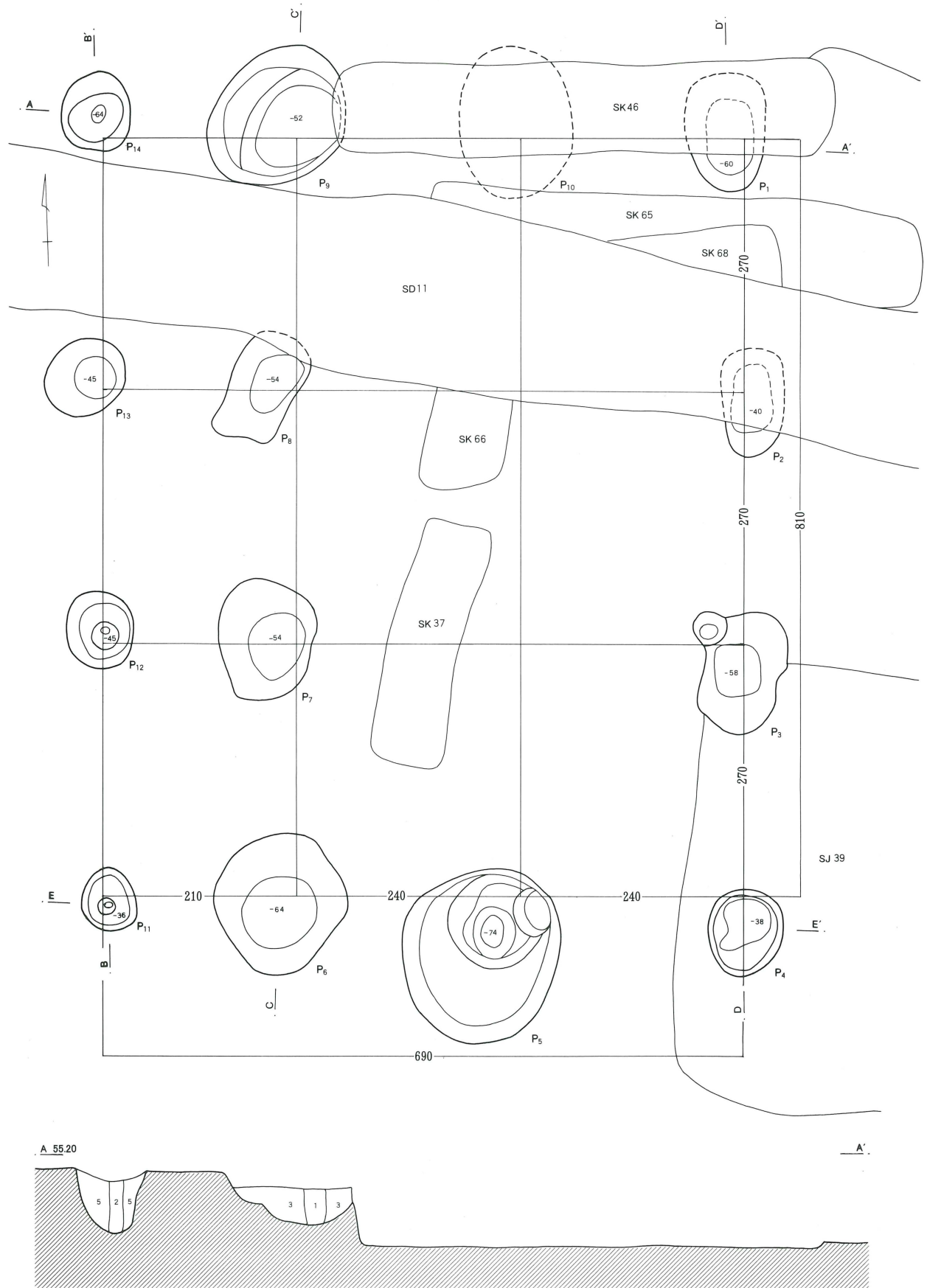
3×2間、南北棟の総柱建物跡と考えられ、規模は桁行長7.65m、梁行長4.80mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。

柱間距離は桁行2.55m、梁行2.40mとなる。柱穴の深さは、Pit7がやや浅い他は概ね揃い、全体に深い。柱穴形態は円形で、直径40~50cm前後と比較的小さいものが多い。埋土は黒色土を基調としており、Pit4・8・9・11からは柱痕または抜き取りと思わ

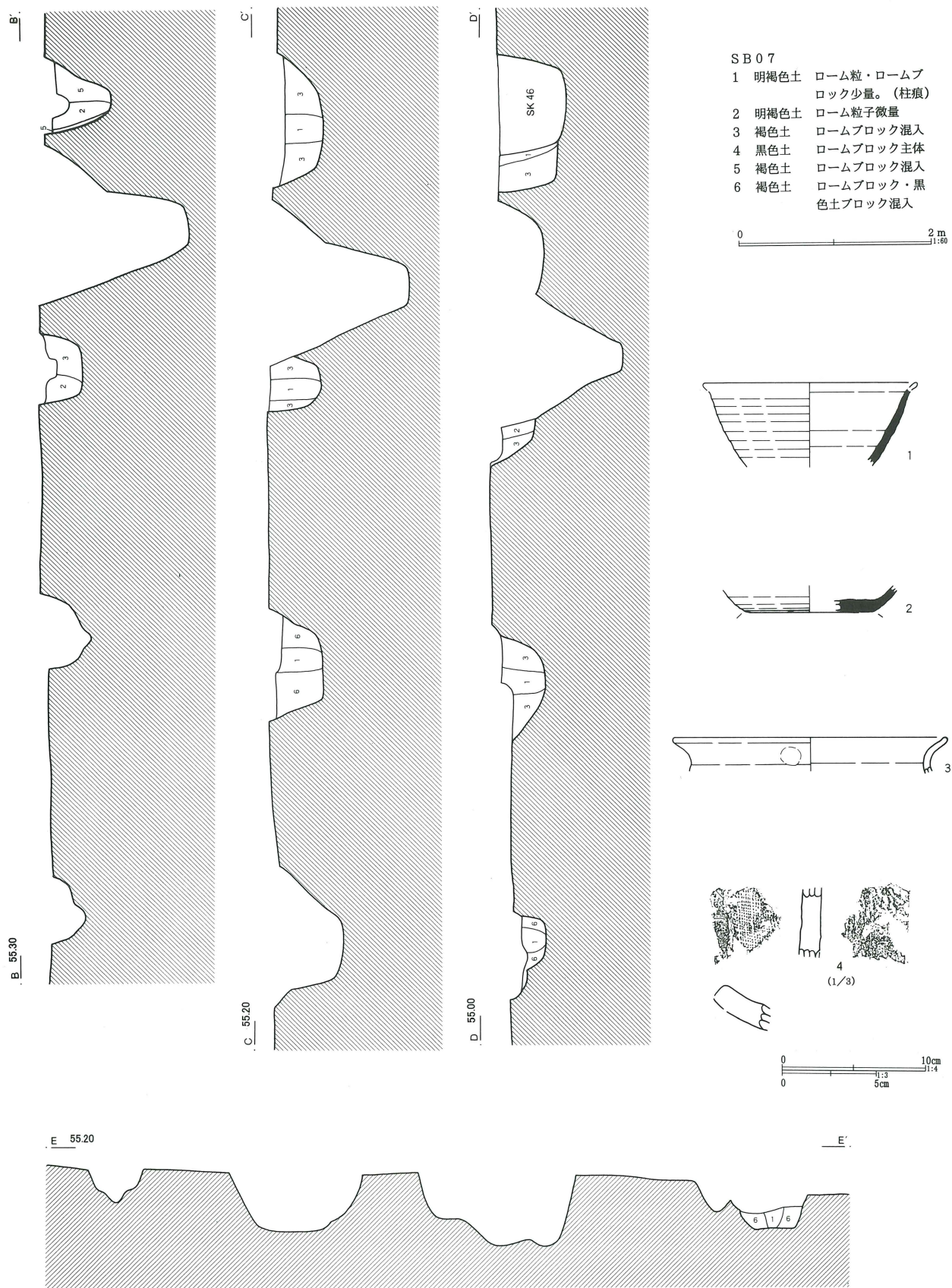
第91表 A区第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第188図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵椀		5.3		B片	B	灰褐色	5%	Pit3。末野産
2	須恵坏		1.8	(8.2)	B片	A	暗灰褐色	25%	Pit8。末野産。底部3C手法
3	土師甕	19.0	2.5		BC	A	褐色	5%	Pit1
4	平瓦				BC	B	灰色		Pit8。凸面平行叩き、凹面布目

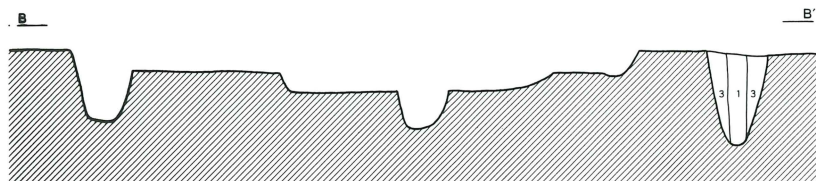
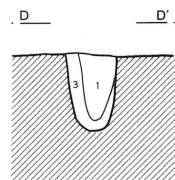
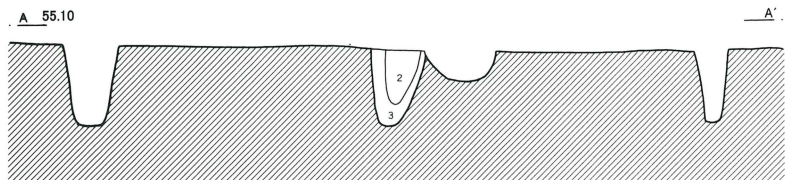
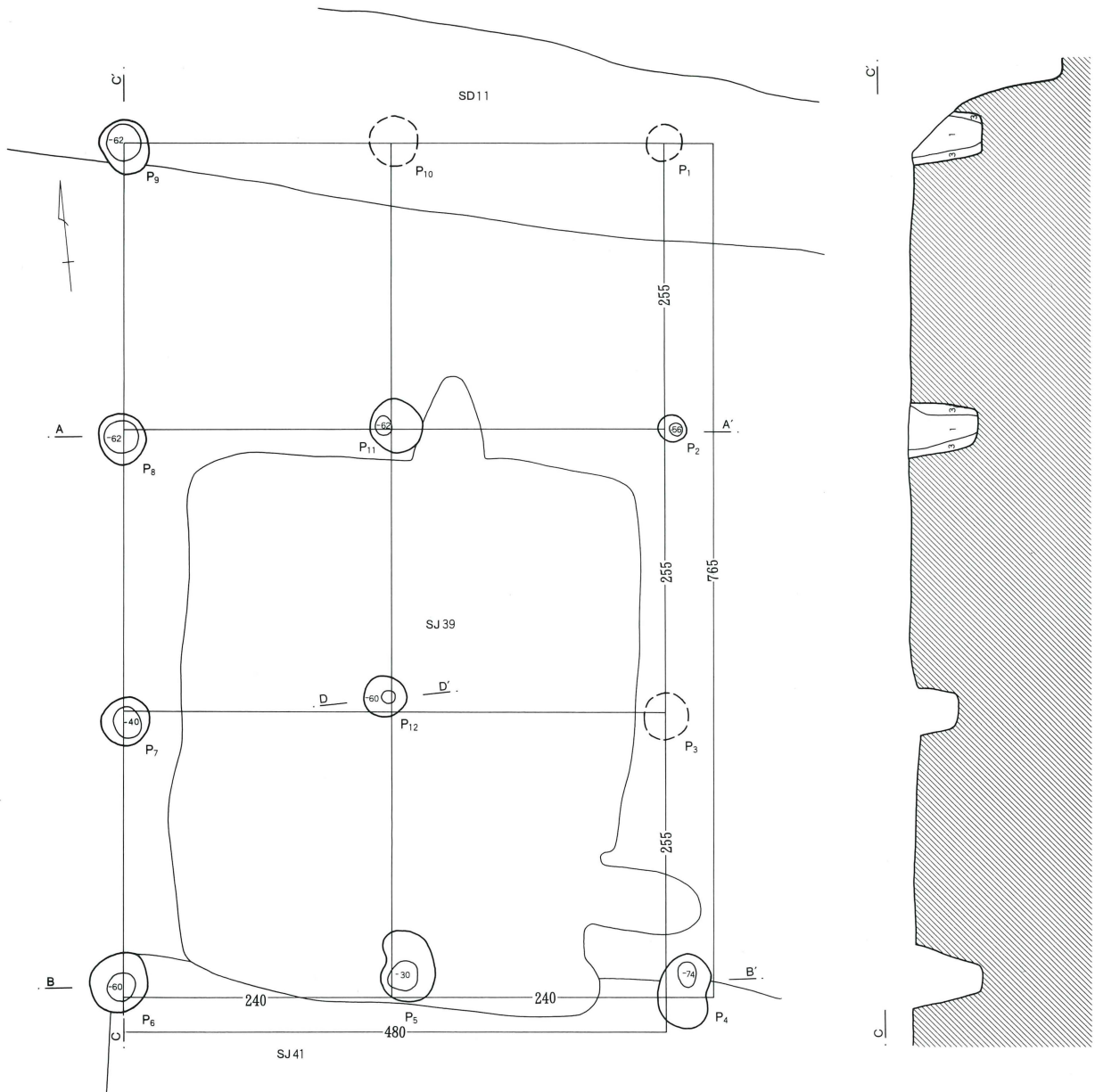
第187图 A区第7号掘立柱建物跡(1)



第188図 A区第7号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



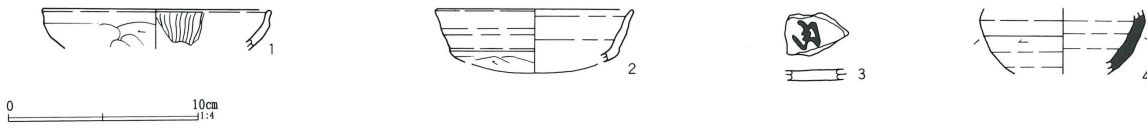
第189図 A区第8号掘立柱建物跡



- SB08
- 1 黒色土 ローム粒子微量。(柱痕)
 - 2 黒色土 ロームブロック混入
 - 3 黒褐色土 ロームブロック混入



第190図 A区第8号掘立柱建物跡出土遺物



第92表 A区第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第190図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	12.0	2.1		BC	A	褐色	5%	Pit11. 内面放射暗文
2	土師模倣坏	(10.5)	2.8		ABC	A	明褐色	15%	Pit9
3	土器坏				BC	A	褐色		覆土。坏内面に「内」の墨書
4	須恵小型壺		3.4		BCD	B	黄褐色	15%	Pit8. 末野産か

れる痕跡が認められた。

出土遺物は土師器坏・暗文坏、須恵器小型壺(疎か)がある(第190図)。1は暗文坏で、内面に放射暗文が施文される。丸底形態となろう。2はいわゆる有段口縁坏である。3は土師器坏の内面に小さく「内」の墨書がある。本建物跡の遺物の中にあっただが、註記がなく、出土位置は不明である。4は疎か。胴部下位は回転ヘラケズリ調整される。末野産の可能性はある。建物跡の時期は重複遺構との関係から熊野Ⅲ期、またはそれ以前となる。出土遺物は3の墨書土器を除くと、Ⅱ期以前に遡るものと考えられる。

A区第9号掘立柱建物跡 (第192図)

A区第9号掘立柱建物跡は46・47-13グリッドに位置する。第10号掘立柱建物跡を切り、第52号住居

跡、第2号井戸跡、第75号土壌に切られていた。

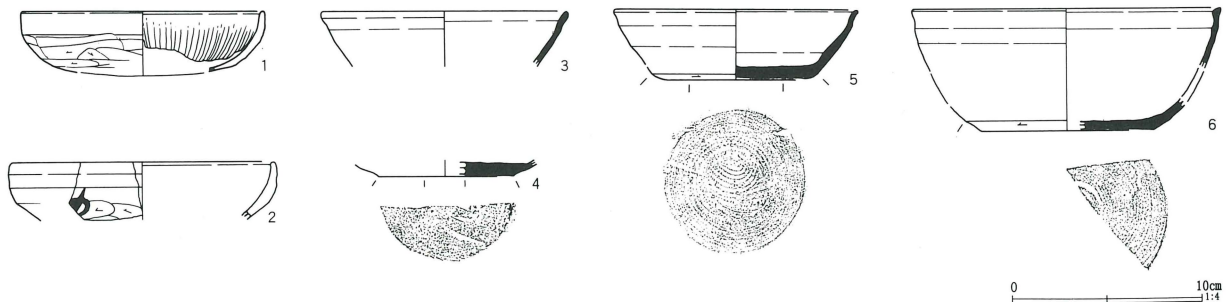
3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長5.40m、梁行長4.20mである。主軸方位はN-7°-Eを指す。

柱痕または抜き取りと思われる痕跡は全ての柱穴で確認された。それによれば柱間距離は桁行1.80m、梁行2.10mとなり、きれいに尺に揃う。また、Pit3、Pit6はややずれ気味である。埋土は第1~3層が柱痕または抜き取り痕。第4層以下が掘り方埋土である。

柱穴は不整楕円形で、長径0.70m~1.00m程の規模である。掘り込みレベルは隅柱がやや深めであるが概ね揃っている。

出土遺物は土師器坏・暗文坏、須恵器坏・碗があ

第191図 A区第9号掘立柱建物跡出土遺物



第93表 A区第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	12.8	3.2		BC	A	黄褐色	15%	Pit1. 内面放射暗文
2	土師坏	(13.8)	3.0		ABC	A	褐色	5%	Pit1 外面不明墨書
3	須恵坏	(13.0)	2.9		B針	A	灰色	20%	Pit4. 南比企産
4	須恵坏		0.8	(7.2)	針	A	灰白色	40%	Pit4. 南比企産。底部B2b手法
5	須恵坏	12.9	3.7	7.4	C針	B	灰白色	75%	Pit1. 南比企産。B3d手法
6	須恵無台碗	(16.3)	(6.4)	(9.1)	C針	A	灰色	5%	Pit7 掘り方。南比企産。底部3c手法